

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

XIV—3

1987

滋賀県教育委員会
財団 法人 滋賀県文化財保護協会

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

XIV—3

—坂田郡近江町世継遺跡・長浜市金剛寺遺跡—

1987

滋賀県教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会

序

滋賀県教育委員会では、活力のある県民社会、生きがいのある生活を築くための一つとして、文化環境づくりにとりくんでいます。特に、文化財保護行政にたずさわるものとして、近年の社会変化に即応し県下の実情や将来あるべき姿を見定めつつ、文化財の保護と保存に努めております。

先人が残してくれた文化財は、現代を生きる我々のみならず子々孫々に至る貴重な宝でもあります。このような大切な文化遺産を破壊することなく、後世に引き継いでいくためには、広く県民の方々の文化財に対する深いご理解とご協力を得なければなりません。

ここに、昭和61年度に実施しました県営ほ場整備事業に係る発掘調査の結果を6分冊に分けて取りまとめましたので、ご高覧のうえ今後の埋蔵文化財保護のご理解に役立てていただければ幸いです。

最後に、発掘調査の円滑な実施にご理解とご協力を頂きました地元の方々、並びに関係機関に対して厚く感謝の意を表します。

昭和62年3月

滋賀県教育委員会
教育長 飯田志農夫

例 言

1. 本書は昭和61年度県営ほ場整備事業に伴う坂田郡近江町世継遺跡、長浜市金剛寺遺跡の発掘調査報告書で、昭和61年度に発掘調査し、整理したものである。
2. 本調査は県農林部からの依頼により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、(附)滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。
3. 発掘調査にあたっては、近江町教育委員会、長浜市教育委員会の協力を得た。
4. 本書で使用した方位は磁針方位に基づき、高さについては東京湾の平均海面を基準としている。
5. 本事業の事務局は次のとおりである。

滋賀県教育委員会

文化財保護課長	服部 正
課 長 换 佐	田口宇一郎
埋蔵文化財係長	林 博通
〃 主任技師	葛野 泰樹
管理係主任主事	山本 徳樹

(附)滋賀県文化財保護協会

理 事 長	南 光雄
事 務 局 長	中島 良一
埋蔵文化財課長	近藤 滋
調査三係長	兼康 保明
〃 技師	稻垣 正宏
総 務 課 長	山下 弘
〃 主任主事	立入 裕子
〃 主事	西田 博之

6. 本書の編集は、調査担当者兼康保明、稻垣正宏が行った。
7. 出土遺物や写真・図面については、滋賀県教育委員会で保管している。

目 次

I. 坂田郡近江町世継遺跡

1. はじめに	1
2. 位置と環境	1
3. 調査の経過	7
4. 調査の結果	8
5. 遺 物	16
6. まとめ	21

II. 長浜市金剛寺遺跡

1. はじめに	31
2. 位置と環境	31
3. 遺 構	37
4. おわりに	45

図版目次

- 図版一 世継遺跡 試掘調査風景（西より）
世継の集落と遺跡全景（東より）
- 図版二 世継遺跡 筑摩神社並七ヶ寺繪図（筑摩神社所蔵）
T 2・小溝
- 図版三 世継遺跡 墓畔及び土層
遺構検出状況・ピット
- 図版四 世継遺跡 遺物出土状況
遺物出土状況
- 図版五 世継遺跡（遺物）
- 図版六 世継遺跡（遺物）
- 図版七 世継遺跡（遺物）
- 図版八 世継遺跡（遺物） 古式土師器
- 図版九 世継遺跡（遺物） 古式土師器・土師器、古式土師器
- 図版一〇 世継遺跡（遺物） 土師器
- 図版一一 世継遺跡（遺物） 須恵器、須恵器・灰釉陶器
- 図版一二 世継遺跡（遺物） 須恵器
- 図版一三 世継遺跡（遺物） 須恵器、灰釉陶器
- 図版一四 世継遺跡（遺物） 陶器・磁器、石製品
- 図版一五 世継遺跡（遺物） 木製品
- 図版一六 世継遺跡（遺物実測図・古式土師器）
- 図版一七 世継遺跡（遺物実測図・土師器）
- 図版一八 世継遺跡（遺物実測図・須恵器、灰釉陶器）
- 図版一九 世継遺跡（遺物実測図・須恵器）
- 図版二〇 金剛寺遺跡 鏊塚全景（南東より）
埴頂部掘下げ状況（北東より）
- 図版二一 金剛寺遺跡 鏊塚埴頂部土壠掘下げ状況（南西より）
埴塚断面図
- 図版二二 金剛寺遺跡 基底部土師質皿出土状況
上段の拡大写真
- 図版二三 金剛寺遺跡 第1トレント（北より）
第2トレント中央部（西より）
- 図版二四 金剛寺遺跡 S E 0 0 1 遺物出土状況（南より）
S E 0 0 1 遺物取上げ後（南より）
- 図版二五 金剛寺遺跡 S E 0 0 1 遺物出土状況（西より）
S E 0 0 1 遺物出土状況（拡大）

- 図版二六 金剛寺遺跡 第6トレンチ掘削前（東より）
第6トレンチ西部（東より）
- 図版二七 金剛寺遺跡 第6トレンチ中央部（北より）
第6トレンチ東部自然河川（西より）
- 図版二八 金剛寺遺跡 第6トレンチ東部自然河川（東より）
第6トレンチ東端
- 図版二九 金剛寺遺跡 第6トレンチ自然河川土器出土状況
第7トレンチ掘削前
- 図版三〇 金剛寺遺跡 第7トレンチ自然河川（西より）
第7トレンチ東部（西より）
- 図版三一 金剛寺遺跡 鏡塚封土出土土器
鏡塚基底部出土土質皿
- 図版三二 金剛寺遺跡 SE001出土遺物
- 図版三三 金剛寺遺跡 SE001出土遺物（木器）
- 図版三四 金剛寺遺跡 SE001出土遺物（木器）
鏡塚、第6トレンチ出土遺物
- 図版三五 金剛寺遺跡 第6トレンチSD001
- 図版三六 金剛寺遺跡 第6トレンチSD001、第7トレンチSD002出土遺物
- 図版三七 金剛寺遺跡 第7トレンチSD002出土遺物
- 図版三八 金剛寺遺跡 第7トレンチSD002出土遺物
- 図版三九 金剛寺遺跡 SE001出土遺物
- 図版四〇 金剛寺遺跡 SE001、第6トレンチ、第6トレンチSD001出土遺物
- 図版四一 金剛寺遺跡 第6トレンチSD001出土遺物
- 図版四二 金剛寺遺跡 第6トレンチSD001、第7トレンチSD002出土遺物
- 図版四三 金剛寺遺跡 第7トレンチSD002出土遺物
- 図版四五 金剛寺遺跡 第7トレンチSD002、鏡塚、塗木塚出土遺物
- 図版四六 金剛寺遺跡 SE001出土遺物

挿図目次

I 坂田郡近江町世繼遺跡

第1図 調査位置図	2
第2図 明治25年位置図	3
第3図 試掘トレンチ配置図	4
第4図 トレンチ実測図	9
第5図 土層断面図	11
第6図 第1地点遺構実測図	12
第7図 第2地点遺構実測図	13
第8図 第2地点土層断面詳細図	14
第9図 第2地点遺構実測図	14
第10図 土鍋・石製品実測図	19
第11図 瓦実測図	19
第12図 木製品実測図	20

II 長浜市金剛寺遺跡

第1図 周辺遺跡分布図	32
第2図 遺跡周辺図	33
第3図 遺跡位置図	34
第4図 遺構全体図	36
第5図 土層断面図	38
第6図 鏡塚墳頂土壙埋土断面	39
第7図 鏡塚基底部土器器皿出土状況	39
第8図 遺構全体図(第2トレンチ)	40
第9図 S E 0 0 1 遺物実測図	41
第10図 遺跡位置図	42
第11図 遺跡全体図(第6トレンチ)	43
第12図 第7トレンチ河川土層断面図	44

表目次

I 坂田郡近江町世繼遺跡

第1表 試掘調査結果一覧	5
第2表 世繼遺跡出土土器觀察表	23

II 長浜市金剛寺遺跡

第1表 金剛寺遺跡出土土器觀察表	46
------------------	----

I. 坂田郡近江町世継遺跡

1. はじめに

本報告は、坂田郡近江町世維の県営は場整備事業大の川西部地区世維工区内で、昭和61年度に実施した世維遺跡発掘調査の結果をまとめたものである。

世維遺跡の存在については、昭和40年度版『滋賀県遺跡目録』に、世維の集落の南東側に世維遺跡、さらに集落東方の水田中に世維寺遺跡があげられており、早くから周知されていた。

世維遺跡は、世維に所在する深光寺に遺跡より採集された石獣が保管されていることから、弥生時代の遺物散布地として理解されていた。しかしその後、集落の東側から隣接する水田一帯にかけて、土師器や須恵器など土器片の散布が認められ、かなり広範囲にわたる、しかも時代幅のある散布地であることが判った。

世維寺遺跡は、水田中に「興福寺」の小字名が残っていることから、「興福寺官務帳疏」にみられる寺院跡（世維寺）との関連が考えられていた。それとは別に、世維より古瓦が出土しているとの話が一部の研究者の間にはあったが、瓦の所在が不明確で真偽のほどは定かでなかった。しかし字名に残る興福寺と関係するかどうか、関心のもたれるところであった。

昭和60年度に、世維と宇賀野を結ぶ県道の北側では場整備が実施された際、近江町教育委員会によって縄文時代から歴史時代にかけての多数の土器片が採集されている。ただ、遺物は工事中の発見であり、遺構の存在や遺跡の性格についてまでは詳細に把握することはできなかったという。しかし、世維遺跡の範囲が、当初予想していたよりも北へ伸びることが明らかになった。また、注目すべき遺物として、縄文時代晚期の滋賀里Ⅲ式の土器片^①が1点混っていた。米原町入江内湖に形成される遺跡と同様に、当地においても内湖縁辺部の微高地に、縄文時代の遺跡の立地する可能性が強くなってきた。

以上の問題点を整理し、今回調査を実施するにあたり次の諸点に留意した。

- (1) 遺跡の広がりと遺物包含層の状況、遺構の有無。
- (2) 遺跡の中心となる年代。
- (3) 瓦の有無とその年代。
- (4) 世維寺の所在。

(兼康保明)

2. 位置と環境

世維は近江町の西端に位置し、琵琶湖に面している。湖岸には浜堤が形成され、その上に集落が営まれている。調査の対象地は、この集落の東側一帯に広がる水田地帯である。この地は、町内を東西に流れる天野川が形成する沖積低地である。浜堤と水田との比高差は約1.3mを測り、比高差が0cmとなる地点は、東へ約750mと緩やかな傾斜となっている。集落の南側には、浜堤を断ち切って天野川が流れ、さらにその南にはかつての人江内湖がみられる。また、北側には浜堤と沖積低地が続き、小さいながら沼地が残っている。このような地形をみると、今回の調査地はすべて水田化されてはいるけれど、かつては浜堤のすぐ東側に後背湿地帯があるいは広く内湖がみられたものと思われる。

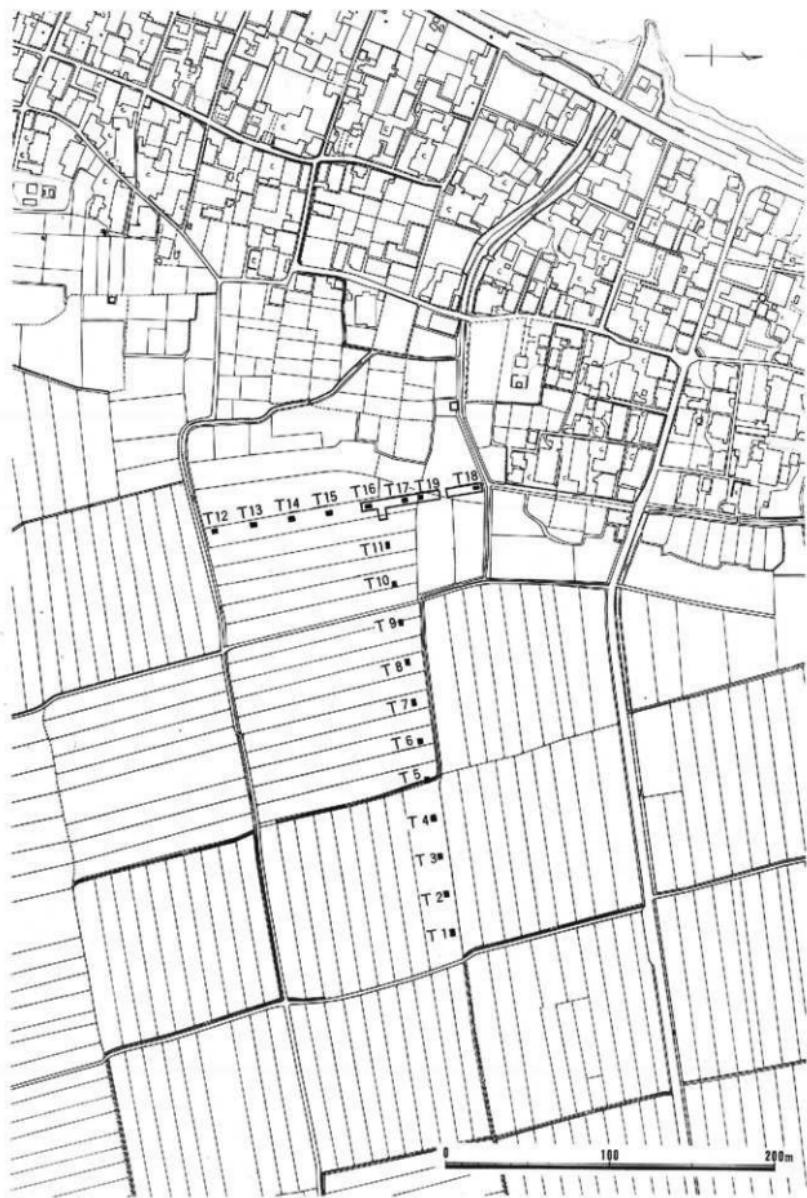
世維の歴史を考えるうえで見過せないのは、その地名の由来である。『坂田郡志』は、「古く四大樹ありしより四ツ木の名を得た」との伝承をのせている。それに対して林屋辰三郎氏は、世維の地名をそのままに解し、世維



第1図 調査地位置図



第2図 明治25年位置図



第3図 試掘トレンチ配置図

の物語を伝える集団の居住するところと考えている。つまり世紀とは、世々のことを継々に語ることであり、その語られた物語とは、古代より坂田郡に勢力を張っていた息長氏の伝承ではないかとのべられている。息長氏は天武八姓の主位である真人姓をうけ、奈良時代にもひき続きた郡の大領をつとめ、平安時代には正暦のはじめごろより長保2年にかけて(990~1000)、現在米原町に所在する筑摩御厨の長を任せられるなど、当地域との関係はけっして薄いものではない。

こうした歴史的背景からみれば、旧朝妻郷内に属する世紀は、古代においては大野川をはさんで朝妻湊と対をなす古津としてとらえる必要があろう。

(兼康保明)

3. 調査の経過

(1) 試掘調査

昭和61年度のは場整備では、田面の高さについては工事後も特に大きな変化がないため、直接遺跡に影響を及ぼすと考えられるのは排水路のみであった。調査の対象となった排水路は、ほぼ南北方向に入る第12号小排水路と、その途中から東に向ってT字形に伸びる第13号小排水路の2本である。

試掘調査は、県教育委員会文化財保護課の指導により、排水路に約20mの間隔で、約3m×3mの試掘坑を19カ所穿ち、遺構および遺物包含層の有無を確認した。調査は、昭和61年4月27

日から5月7日まで実施し、第1表にみるような調査結果を得た。

トレンチ	排水路番号	遺物包含層	遺構	備考
T 1	第13	無	無	
T 2	*	*	有	幅40cm深さ20cmの小溝(同版2)
T 3	*	*	無	
T 4	*	*	*	
T 5	*	*	*	
T 6	*	*	*	
T 7	*	*	*	土器小片若干
T 8	*	*	*	
T 9	*	*	*	
T 10	*	*	*	
T 11	*	*	*	
T 12	第12	*	*	
T 13	*	*	*	灰軸底部片1 中世土器小片 少量含
T 14	*	*	*	
T 15	*	*	*	
T 16	*	有	*	包含層未完層
T 17	*	*	*	
T 18	*	*	*	
T 19	*	*	*	

第1表 試掘調査結果一覧

(2) 本調査

試掘調査の結果に基づいて、本調査では、遺物包含層が確認されたT 16~T 19の4試掘坑を結ぶ第12号小排水路の北半と、一部第13号小排水路にもトレンチを拡張した調査を行った。調査は、昭和61年5月16日から6月10日までの間、まず第12号小排水路の北側より調査を開始し、遺物包含層の広がりの南限を確認した。続いて、第13号小排水路の拡張トレンチで遺物包含層の東限を確認して、調査を終了した。調査の所見については、次節でのべたい。

(兼康保明)

4. 調査の結果

(1) 地区割り

調査にあたっては、現地に4mで遺物取上げ用の小地区割を行ない、全長約80mにわたるトレンチを穿った。ここでは、トレンチを便宜的に5地点に区切って報告する。第1～4地点は第12号小排水路に、第5地点が第13号小排水路にある。

なお調査トレンチは、地表では水路幅の3mとし、調査最終面では幅約1.5mを基準とした。

第1地点

第12号小排水路の北端にある。新川の土手より南4.45mの地点（ポイントA）を調査の起点とし、約17mのトレンチを設定した。土層断面は東壁で2カ所、約8mにわたり観察・実測を行った。現地調査の地区割りはA～C地区である。

第2地点

本地点は、第1地点の南端より約10m離れてトレンチを設定した。トレンチを続けて掘らなかったのは、その間に農業用揚水の配管が埋設されているためである。調査トレンチの全長は約18mで、ポイントB（ポイントAより26.6m南に設置）を起点とする。土層断面の観察と実測は、湧水と壁面の崩壊のため最初の7mを西壁で、後の11mを東壁で行った。現地調査の地区割りはD～G地区である。

第3地点

第2地点の調査トレンチに統けて、約16mのトレンチを設定する。上層断面の観察と実測は、引き続き東壁で行った。現地調査の地区割りはJ・K地区である。

第4地点

第3地点の南端より約6m離れてトレンチを設定する。土層断面の観察と実測は、西壁と北壁で行った。現地調査の地区割りはJ・K地区である。

第5地点

本地点は、第3・4地点間の未調査分より、東に向けて拡張したトレンチである。この拡張したトレンチは、第13号小排水路の位置に合わせたもので、調査の基準を第12号小排水路と交わるセンター杭（ポイントBより45.5m南に設置）とした。このセンター杭を中心にして、幅3m、長さ約9.5mのトレンチを設定した。土層断面は北壁で約6m実測した。現地調査の地区割りは、拡張1・2地区である。

(2) 層位

現地調査は小地区割りでトレンチを設定し数地区終了するごとに埋戻しを行い、各土層断面図を合成して約70mに及ぶ土層断面図を作成した。

第1層

耕土と床土で、およそ30～40cmの厚さを測る。土色は、耕土が十分なほど粘性を保った暗褐色、床土がやや鉄分を沈殿させた褐色である。そして第2地点より南の床土は、さらに多くの鉄分やマンガン粒を沈殿させ、赤茶褐色を呈てくる。また、その堆積面に凹凸が認められる。

第2層

本層の厚さは、20~40cmを測る。土質は粘質土あるいはシルトで、土色は淡青灰色または淡赤褐色である。特に土色では酸化土層と還元土層という大きな差が認められ、この差は第1層でみた床上の変化には対応している。後述するが、第2地点にみられる鮮道がその境界となっているようである。しかも淡赤褐色シルト層のみられる範囲には、所々でなくなるもののさらに多くの鉄分等を沈殿させた赤褐色粘質シルト層が確認できた。この層は、おそらく現在の水田に先行する水田の旧床土と考えられ、その上層が旧耕土になるものと思われる。なお、第3地点より南には、鉄跡とも考えられるような小凹が旧耕上面にて認められた。

第3層

本層は、20~60cmと場所によってかなり層の厚さに幅がある。しかし、大方は第3地点までが約30cmであり、第4地点より南では約50cmとしだいに厚くなっている。土質はシルト質砂～粘質土で、土色は暗青灰色～暗灰色を呈している。本層には、若干の遺物が包含されている。

第4層

本層は遺物包含層で、層厚は10~60cmと場所によってかなり幅がある。土質には粘土～砂までみられ、土色にもかなりの違いが認められ、しかも何層にも重なり堆積している。しかしこれは、第1地点にみられるような砂や礫からなる包含層、第3地点をはじめとしてみられる腐植土をかなり含んだ粘質シルトからなる包含層、さらにそれらの混じった再堆積層となる。また、本層を分層した中には、落ち込み状に堆積する層が確認された。

(落ち込み1)

第1地点～第2地点北端にかけて確認された、落ち込み状の包含層である。落ち込みの幅は約29m、深さは約0.5mを測る。土質は、先に述べたように砂と礫によるもので、落ち込みの底より順に、褐色礫、黄褐色砂礫、暗灰色砂と3層に分層できる。また、それぞれの層は、大きくオーバーフローして堆積している。このほかにも、第1地点北端で同様な包含層が認められた。これは、北に広がって落ち込んで行く砂礫層である。層は何層にも砂と礫が重なりあっており、河川などによる2次的な堆積によるものと思われる。出土した遺物の中には、ひどく壊滅した土器片や、時期的にみてかなり隔たりのある土器片が混在していた。

(落ち込み2)

第2地点南端～第4地点北端にかけて確認された。幅約32.2m、深さ約0.5mを測る。埋土は3層で、上層が暗赤褐色砂、中層が青緑色と暗黒色を混在させたシルト質砂、下層が腐食しきっていない木の枝や葉などを多量に含んだ茶褐色の粘質シルトである。本層では、特に下層から多量の遺物が出土している。

第5層

本層は、遺物包含層と地山の間で確認された土層を第5層として把握した。この層には、土質、土色に著しい違いが認められるものの、どの層も層の厚さが極端に薄いか、あるいは数地区にしか存在しないため1層としてまとめた。ただ、遺物を含む層と含まない層があるが、はっきりと区別できるほどの層ではない。

(灰色砂礫) 第1地点と第2地点北半に認められる。層厚は20cm以下である。本層は上位に砂分が、下位に礫分の比率が高くなっている。遺物は出土しなかった。

(青灰色砂礫) 第1～第3地点にかけて部分的に認められる。本層より遺物は出土しなかったが、次の青緑色砂に近似する点からみて、調査地外において遺物の含まれる可能性は高い。

(青緑色砂礫) 第3地点中央部で確認された。本層の厚さは10cmに満たない。遺物はごく少量であるが出土している。

(暗灰褐色縞) 第3地点中央部、青緑色砂礫の下で確認された。層の厚さは5cm以下である。沿貝の腐った痕跡と考えられる黄灰色の土粒が混っている。また、本層はひじょに硬く練っていた。遺物は出土しなかった。

(青灰色～暗褐色粘土) 第4地点南半に認められる。層厚は10cm以下である。遺物は西壁断面で土器数片の出土が確認された。

第6層

青灰色の粘土層で、地山と判断した。地山の状況を確認するため、第1地点で約60cmほどの深さまで掘下げた。その結果、上位に認められた3～4cm大的黄褐色シルトブロックはみられなくなり、下位になるほどより湖成堆積的な状況であった。ただし、この状況は調査地点が南に向かうほどに粘土層から砂質土層となり、褐色のシルトブロックがかなり多く混ってくる。また、レベルも南にだんだん高くなっている。

(3) 調査結果

第1地点

本地点での調査は、特に層位の確認を重視しながら、遺物の包含される層の特定、ならびに遺構面の存在の有無にも注意して進めた。その結果、自然堆積ではあるが、落ち込み状になる遺物包含層と、幾つかのピットによる遺構を検出した。

まず、層位についてはすでに前項でまとめたので、ここでは遺物との関係を中心にみて行きたい。

第1層・第2層から遺物の出土はない。

第3層からは、ごく少量ではあるが遺物が出土した。出土した遺物は、灰釉陶器、須恵器が各1点と、土師器とみられる小破片が数点である。特に土師器については、摩滅が著しかった。

第4層では、落ち込み1を検出し、それに伴い多くの遺物が出土した。古式土師器、土師器、須恵器が混在した状態で出土したが、摩滅の著しいものも多く認められた。落ち込み1は砂や礫で構成されており、遺物の状態や時期差のあるものが混在するなど、二次的な自然堆積によるものであることが確認された。

第5層の灰色砂縞、青灰色砂縞とともに遺物の出土はなかった。

第6層も第5層と同様に無遺物層である。

次に遺構であるが、落ち込み1のほかに、ピットを2カ所で検出ただけである。共に検出面は、暗青灰色砂を取り除き、青灰色砂を確認した時点である。両ピットとも地山の青灰色粘土まで掘り込んでいる。埋土は第4層で、落ち込み1の上層とした暗灰色砂である。

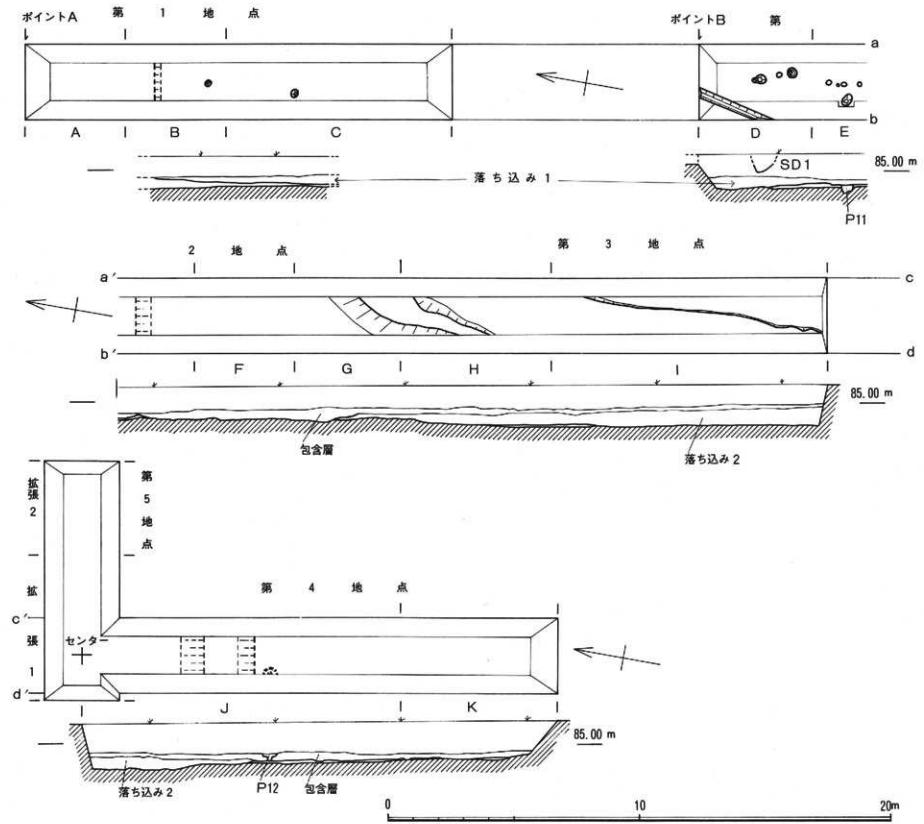
(ピット1) 径30cmの円形を呈し、ピット内のやや北よりに径12cmの柱穴(?)をもつもの。遺物なし。

(ピット2) 約30×35cmを測るやや精円形を呈するピットで、ピット内の南端に若干斜めに食い込んだ約15×25cmの柱穴(?)をもつもの。遺物は、外面向に粗いクシメを施したS字状口縁台付壺の小片が出上した。

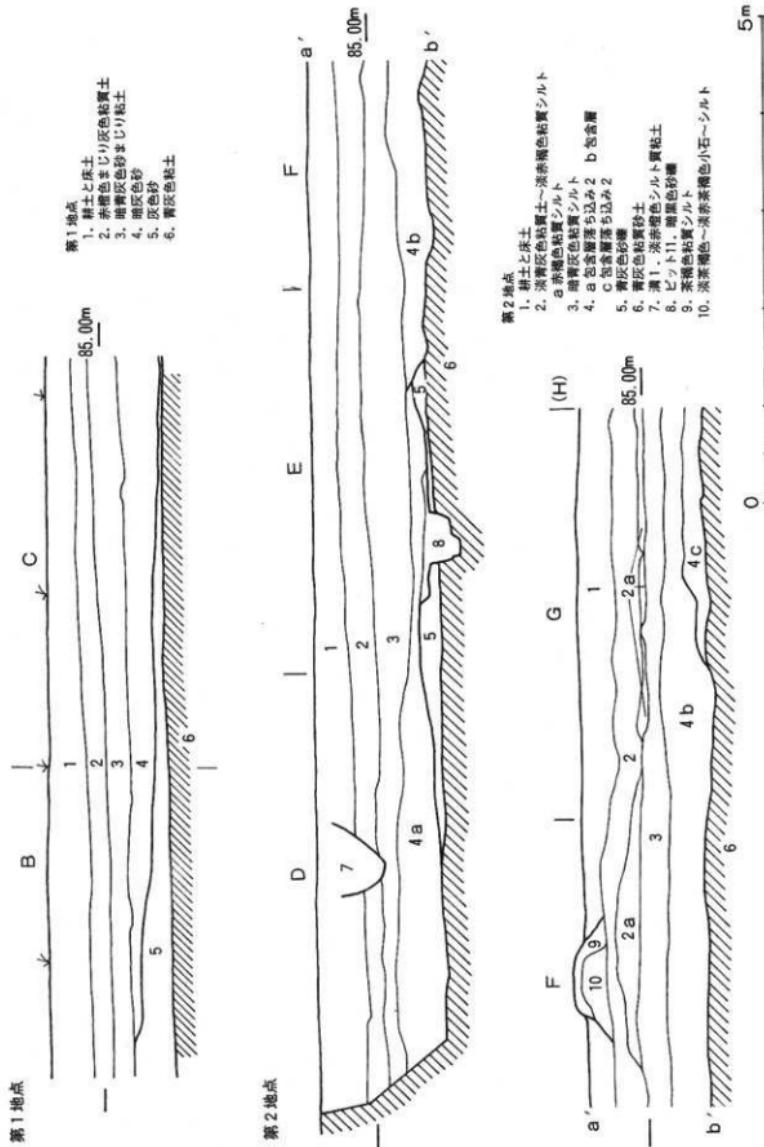
両ピットは、柱穴間隔約3.6mを測り、規格も似ており埋土も同じである。しかし、ピットの底のレベルは20cmもの差があるうえ、統くピット列も検出できなかった。このことから、両ピットを掘立柱建物の柱穴と考えるのは困難である。

第2地点

第1地点のトレチとは若干離れているため、調査は第1地点の層位分層の検討と、遺構の検出に注意を払った。その結果、トレチの北端部分では第1地点の層位と同様であり、南側部分では遺物包含層などに大きな変化を認めた。また、遺構ではピット群を検出した。

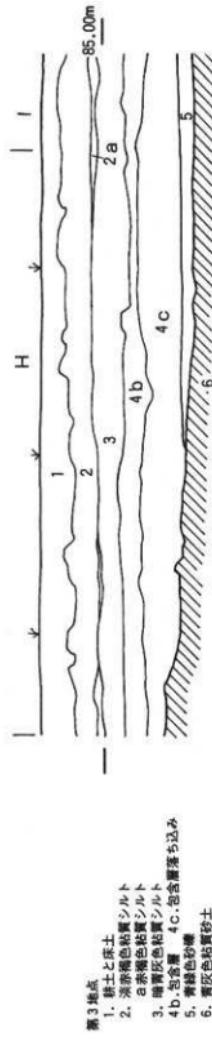


第4図 トレンチ実測図

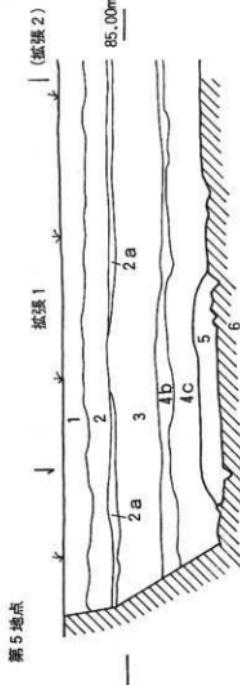


第5圖 土層斷面圖

第3地点

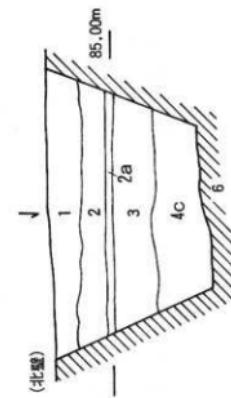
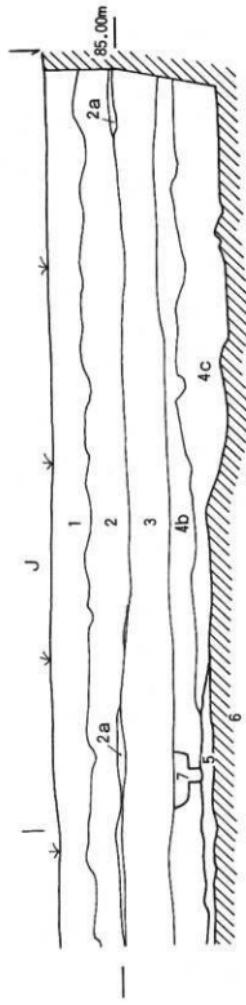
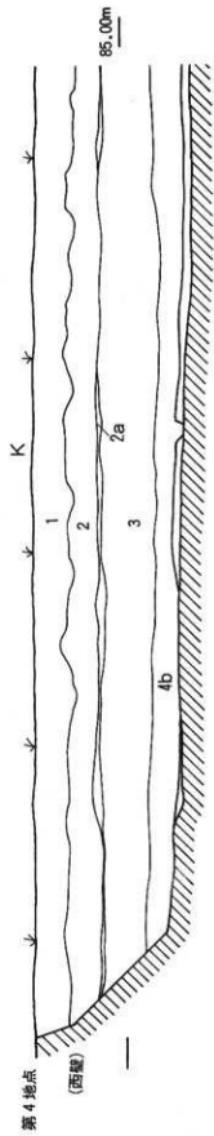


第5地点



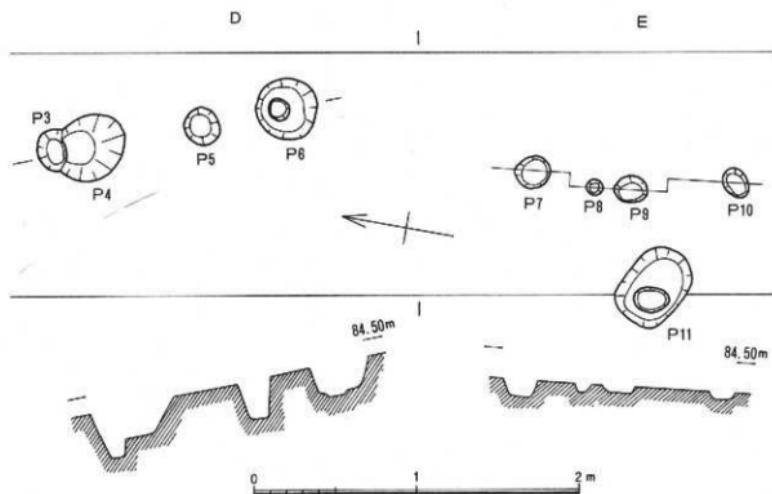
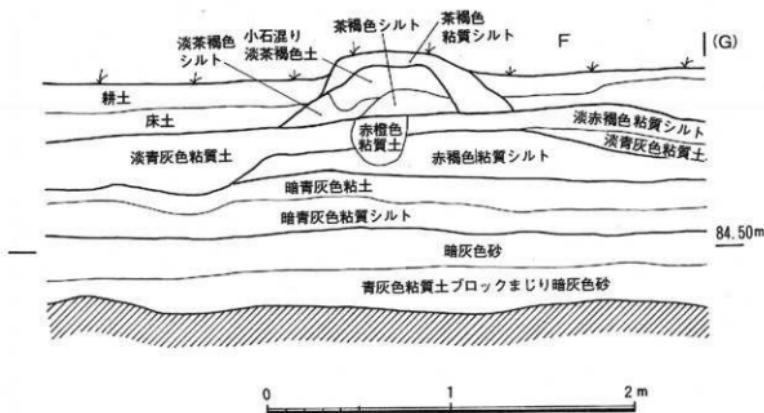
第6図 第1地点地縫測図





- 第4地点
1. 耕土と庄土
 2. 淡赤褐色粘質シルト
 3. 暗灰褐色粘土
 - 4b 包含層
 - 4c 匀合漂砂込み
 5. 暗灰褐色漂砂土
 6. 暗灰褐色真土

第7図 第2地点遺構実測図



遺物について第1地点と同様、ここでも層位との関係をみてみよう。まず、西壁で観察を行った北側の7mあたりまでが、第1地点と同じ層位になる。そして、それより南では、第3層、第4層に大きな違いが認められる。

第1層は、トレンチの北半で、耕土がすでに削平されている。遺物の出土はない。

第2層は、青灰色系の還元土層から、赤褐色系の酸化土層へと変る。ここでも遺物の出土はなかった。

第3層からは遺物が出土したが、その出土量はさほど多くない。

第4層の遺物包含層は、トレンチの北端で落込み1を7m、南側で落ち込み2を3mにわたり検出した。なお、落ち込み2からは多量の遺物が出土し、上層の包含層（暗灰色砂）も同様であった。

第5層は灰白色砂礫・青灰色砂礫で、所々確認されない部分もある。おそらく第4層に削られ、その埋土に混じったものと思われる。

第6層は南に向かってだんだんと粘土質から砂質へと変化していく。

遺構は、トレンチ北側部分でピット群を検出した。いずれも杭跡と推定される。ピット内の埋土には土色差が認められるが、土性はすべて砂礫であった。この他に、比較的時期の新しい溝（S D 1）を1条検出した。この溝は、床土より掘り込まれた素掘りの溝で、遺物の出土はなかった。溝の方向は、現在の畔の方向と重なっていない。

本地点では、現在の畔道を調査トレンチが断ち切っているため、詳細にその土層断面の観察を行った。それによると、調査地は低湿地であるため、畔道が沈むことのないよう5cmほどの小石を畔の中ほどに敷き、あるいは杭を打ち込んだ可能性がある。この畔道は、第2層上面より土や石などを積んで作っており、現在の水田に伴うものである。なお、第2層とした赤褐色粘質シルトは、他の地点の同層の厚さと比べてかなり層厚が増している。おそらく、旧の畔道あるいは畔があったものと考えられる。また、旧床土とした赤褐色粘質シルトは、この高まりを境として南にのみ認められている。

第3地点

本地点では、ピットなどの遺構は検出されなかった。しかし、遺物包含層の落ち込みを面的にとらえて、ほぼその西端を検出した。また、その落込み面では、多くの遺物の散布が認められた。

第1層・第2層から遺物は出土はない。第2層の旧耕土には、多少の凹凸が認められた。凹凸は、あるいは歯の痕跡ではないかと考えられる。また、旧床上でもより多くの鉄分が沈殿し、かなり固くなる。

第3層は、第2地点と相違はない。

第4層は、大きく上層と下層に分けられ、その下層が落ち込み2としてとらえられる。落ち込み2は第2地点の南端で検出され、さらに第4地点でも確認されている。落ち込みの埋土は3層に分層され、上層が暗黒褐色砂、中層が青緑色と暗黒色の混じったシルト質砂、下層が茶褐色粘質シルトである。この3層ともに遺物を多量に包含しているが、層位的には堆積せず混在した状態である。ただ傾向としては、中・下層に古式土器が多く認められた。

第5層には、厚さ10cm以下の濃緑色砂礫（上層）と、厚さ5cmほどの暗灰褐色礫（下層）がトレンチ北半で確認された。暗灰褐色礫層はひじょうに固くしまっている。また、巻貝の腐った痕跡と考えられる黄灰色の土粒が果粒状斑点となって含まれている。

第4地点

本地点では、第3地点より統く落ち込み2をトレンチ北端から約7m検出した。また、それ以南では、大きく2層に分けた遺物包含層の上層だけが認められる。遺構については、西壁断面でピットを検出した。

第1層・第2層ともに第3地点と状況に相違はなく、遺物も出土していない。また、旧耕土上面でみられる歯跡の凹凸は、北壁ではほとんど確認されなかった。おそらく、かつて耕されていた畑の跡は、南北方向からかなり離れていたものと思われ、第3地点で発見されたS D 1の方向に沿うのではないかと推定される。

第3層も同様で、遺物もほとんど出土せず、わずかに出土する遺物は下層出土の遺物より時期の新しい中世のものである。

第4層は、上層が調査区域外にまで続いている。下層は南に向かってトレンチの北半にて終り、西に向かって落ち込んでいる。

第5層には、暗青褐色粘土層がトレンチ中央部に認められた。

本地点では、遺物包含層のうち落ち込み2がトレンチ中ほどで終っている。また、遺物包含層の上層にあたる層が調査区域外にまで続いて行くが、ここでは遺物は出土しなかった。これらのことから判断して、遺物包含層の限界と理解した。そのため、トレンチをさらに南に向けて延長する必要性もないため、調査を終了した。

第5地点

本地点は、遺物包含層の東端を確かめるべく拡張したトレンチである。試掘調査の結果によれば、T 11では遺物包含層は検出されて、その中に東端が存在することは容易に推定できた。調査は東に向かって約9.5mトレンチを伸したところで終了した。遺物包含層の堆積は、東に行くにつれてしだいに薄くなり消滅した。なお、遺構は検出されなかった。

第1層～第3層は、他地点と相違はない。旧耕土の凹凸についても、第4地点の北壁同様ほとんど確認できなかった。

第4層のうち、落ち込み2は東に向かって緩やかに上っている。また、埋土も色調がかなり薄くなり、特に下層の茶褐色粘質シルトには多量に含まれていた樹木の枝や葉がほとんどみられなくなった。

第5層では、黄褐色砂礫が検出されている。層の厚さは約20cmあり、貝殻が多く含まれていたほか、遺物は砾石などが出土している。

第6層は、東に向かってなだらかに上っている。

(前角和夫)

5. 遺 物

(1) 土 器

出土遺物のうち、古墳時代～平安時代前期の土器は、同一遺物包含層（第4層）中より混在した状態で出土している。ただし、時期的には混在しつつも、古式土器は第1地点を中心に調査地の北部にまとまりがみられるなど、多少出土状況に差が認められないでもない。ここでは、出土地点での比較や、各土器の詳細は遺物観察表にゆずり、同一遺物包含層中の土器を各々の特徴等から4期に分類し、各時期の概要を述べたい。

遺物包含層より上層に含まれる遺物は、量的にも少なく、時期も平安時代から室町時代におよぶ。これらについては、遺物包含層出土土器の概要のあと、上層出土の土器として一括して述べる。

a. 遺物包含層出土の土器

[Ⅰ期 古墳時代前・中期]

壺（1~4）は、やや突出した底部（24）をはじめ、平底の底部（25~29）が残る庄内式に比定できるものが大半を占めるが、量的には多くない。また、布留式の二重口縁壺（141）の小片も認められた。

壺は、庄内、布留式両期を通して地域色のあるものが混在している。器壁の厚いくの字状の口縁を有するもの（5、6）は、第V様式の畿内系壺の在地化したもの系譜に求められよう。受口状口縁を有する近江の壺（7~11）は、端部を外方へつまみ出す新しい時期のもので、体部外面にハケメ調整を施すもの（7~9）と、施さないもの（10、11）がある。前者は、おそらく（31）のような小さな平底を残し、後者は器体のカーブからみて丸底の可能性がある。ここでは前者を庄内式、後者を布留式に伴うものと考えている。畿内系の壺は、器壁の薄いくの字状の口縁を有し、その端部をわずかにつまみあげた庄内式壺（13~15）と、口縁部が内凹し端部を肥厚させた布留式壺（16、17）がある。庄内式壺のうち（13）は、わずかな口縁部の破片であるが、胎土からみて搬入品の可能性が強い。ただ（15）にみられるように、胴部が丸味をおび、外面もハケメ調整であり、庄内式としても新しい段階のものと考えられる。東海系のS字状口縁付壺（18~22）は、小破片を含めると比較的よく目立ち、量的には受口状口縁をもつ近江の壺と大差はない。壺には大小2種が認められるが、形態からみて時期幅があり、頭部内面にクシメを残す（18）の方が（19、20）にくらべ口縁部のつくりがシャープで、前者を庄内式、後者を布留式に伴うものと考えている。（21、22）は、東海系の壺の脚台であるが、（33）は湖北に分布する受口状口縁壺の脚台の可能性もある。北陸系の壺（23）はほとんどなく、口縁部外面に擬凹線文を施す月影式のものであるが、口縁部内面の立上りに明瞭な段をもっていい点注意をひいた。

（33）は、庄内式期の椀状をした台付鉢と考えたが、すでに述べたように在地の台付壺の脚台であるかもしれない。

（34）は、布留式の典型的な椀である。

高杯は、杯部が少なく、比較的残り易い脚柱部が多かった。（35）の杯部は外方へ口径が大きく広がり、深い庄内式の高杯である。しかし、端部にシャープさを欠き、器表の調整も難になっていることなどからみて、布留式に近い新しい時期のものであろう。脚部は、円形の透しを穿ったもの（36）と、透しをもたないもの（37）がある。ここでは透しのあるものは古い様相ととらえ、前者は庄内式、後者を布留式のものと考えている。（38）は、椀状の杯部をもち、脚の裙部が大きく聞く布留式の高杯であろう。この他、特徴的なものとして、杯の内面を装飾した東海系の高杯（154）も認められる。

器台は、第V様式から続く筒状のものがある。下半部のみ（40）で、口縁部を欠くが庄内式のものであろう。（41、42）の小型器台は、（34）の椀と共に布留式の指標となる器形であるが、小形丸底盆のみ出上していない。

〔II 期〕

須恵器の杯が量的にも多く、その変化も見やすいことから、杯を用いてII期をII-1期とII-2期に細別した。杯の形態を概観すると、蓋は天井部の棱が完全に消滅したので、時期決定の目安となる。II-1期の杯（82~84、86~88）は、II-2期の杯（89~95）にくらべて口径が大きく、たちあがりの高い点があげられる。

II-1期には、有蓋高杯（85）や透しのない脚部（134）をもつ高杯、長頸壺（129）などの須恵器と、口縁部内面にヘラ記号のある土師器の長胴壺（43）などがあげられているが、いずれも須恵器の杯ほど明確に時期決定は難しい。小片であるが端部外面が肥厚する須恵器の壺や、土師器の把手付き壺（44）や杯（50）などは、大きくII期の範囲でとらえられよう。

II-1期は、須恵器の杯や他の遺物から、600年前後の6世紀第4四半期~7世紀第1四半期を中心とする時期が考えられよう。それに対してII-2期は、II-1期に統く7世紀第2四半期を中心とする時期とみてよいで

であろう。ただ、II-1、2期とも飛鳥時代前期にありながら、まだ古墳時代より継続する器形が大半を占めている。ことにII-2期の須恵器の杯をみると、湖北地方においても宝珠つまみをもつ小形の杯が出現しているにもかかわらず共存していない。

〔III期〕

II期同様、須恵器の杯の変化で、III-1期とIII-2期に細別した。

III-1期の須恵器の杯は、蓋の頂部に宝珠つまみがつき内面にかえりをもち(96)、身は外方へしっかりと八の字状に開く高台のついた深いもの(97)である。身については、形態的に蓋よりやや後出的であるが、近接して出土しており、共に大きく損われておらず、口径に大差がないことなどからセットとした。また、高台のつかない杯(98~99)は比較的多い。内外面にハケメを残す土師器の壺(47)も、この時期のものであろう。

III-2期の須恵器の杯は、蓋内面のかえりが消滅した大きく深いものである(102~105)。高台のつかない杯(100~101)は、III-1期のものにくらべると浅くなり、内面の底部と体部の境がしだいに不明瞭となっていく。長頸壺(132)は、最大径が体部中位にあり、高台底面が水平になる。比較的高い高台をもつ台付鉢(135)は、あまり類例を見ないが、高台の形状の類似からこの時期と考えた。天井部に把手のついた平瓶(133)も、この時期のものであろう。土師器は、精良な胎土にヘラミガキや暗文を施した杯(51)がみられるようになる。(48)の壺も、III-1期と比較すると薄手になる。

III-1期は、7世紀第3四半期を中心とする時期が考えられる。それに対してIII-2期は、700年を前後する7世紀第4四半期~8世紀第1四半期を中心とする時期とみてよいであろう。このⅢ期より、須恵器、土師器とも在地色が払拭され、畿内中央部の土器と大差なくなる。

〔IV期〕

IV期になると、II、III期にくらべて須恵器の杯の形態変化が鈍くなり、代って土師器の杯や皿などに大きな変化が読みとれるようになる。そのためここでは、土師器の変化を基準にして細別を行った。

IV-1期の土師器の杯は、内面に暗文を施すもの(52)が少なからずあり、また口縁端部を丸く内傾させるなど特徴的なものも多い(53)。須恵器では、頸部に数段に波状文を施す壺(127)や、角張った高台がやや外方へふんばった杯(106)などがこの時期と考えられる。

IV-2期は、この時期より、畿内の土師器の杯と形態や製作技法に違いが顕著になり、近江の地域色が明確になる。器壁の薄い皿(68、69)や須恵器の皿を寫したような形態の皿(66)、器壁が厚ぼったく感じる口縁端を丸くおさめた杯(70)、あるいはIV-3期以降目立つクロコ形と思われる須恵器杯を模倣したような土師器の杯などもこの時期に出現しているのかもしれない。大、小の壺(46、49)も、この時期から次の時期にかけてのものと考えている。須恵器杯は、しっかりとした宝珠のついた、屈曲した口縁端部をもつ壺(110)に対し、身は高台にシャープさがなくなり高台径も小さくなる(111、112)。こうした杯は、IV-3期にも継続するものと思われる。また、(117)の杯蓋の口縁端部は、各時期を通して例がなく、あるいは北陸方面の土器の可能性がある。この他須恵器では、皿(139)や深鉢(168)などがある。

IV-3期は、須恵器模倣のロクロ土師器の杯(75~80)が主流となるが、面取りした脚をもつ高盤(72)も残っている。須恵器に代って灰釉陶器の椀(121、122)や皿(120)が出現する。灰釉陶器は、体部をヘラケジり成形し、高台も断面の角張ったシャープなもので、底部に糸切痕などはとどめていない。一方須恵器では、平底の壺(128)や、円筒形の無頸壺(136)など、これまでみられなかった新しい器形が加わっている。

IV-1期は、土師器の杯からみてやや幅があり、8世紀第3四半期から第4四半期にかけての時期。IV-2期は、

9世紀第1四半期を中心とする時期が考えられる。IV-3期は、9世紀中葉を中心とするが未まではいかないやや漠然とした時期幅を考えている。ただ下限については、貞觀15年(873)の木簡を伴出した高島郡高島町鴨遺跡の土器群より古い様相を呈していることによるものである。IV-3期で注意をひいたことは、綠釉陶器や無釉陶器はいうにおよばず、一般的には伴出する黒色土器がまったく認められなかったことがあげられる。

[墨書き土器]

墨書き土器は3点出土しており、須恵器、灰釉陶器、土師器各1点ずつ底部に文字が認められた。須恵器の杯(115)には「田村」とあり、おそらく地名で世紀北東の長浜市田村町付近をさすのである。灰釉陶器の碗(123)には「穴圓」とあり、人名ではないかと推定される。土師器は、墨の残りが悪く、しかも小破片のため判読できなかった。器壁の厚さ、色調などから古期のものであろう。

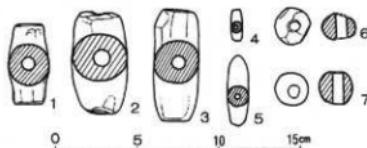
b. 上層出土の土器

平安時代の灰釉陶器をはじめ、平安時代末の常滑の大平鉢、鎌倉時代の常滑の壺、青磁碗。信楽の大平鉢、瓦器の火舎のものと思われる獸足、土師質土器の小皿などがある。

時代的には、平安～室町時代と各時期に渡っているが、近世の遺物は出土しなかった。

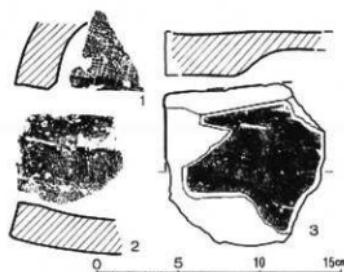
(2) 土 鐘

(1) が試掘時にT15より出土した他、すべては本調査時の出土である。形態から、球形のもの(6, 7)と円筒形のものと2種類に大別できる。円筒形の中でも、(4, 5)は小形である。

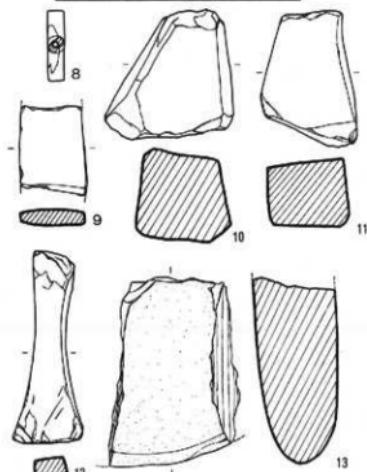


(3) 瓦

瓦は3点あり、遺物包含層の砂礫層中より出土している。地点別には、第5地点より丸瓦(1)、第2地点より平瓦(2)と用途不明瓦(3)が出土している。このうち(3)の瓦は、端部に行くにしたがって太くなり逆玉縁



第11図 瓦実測図



第10図 土鍼・石製品実測図

状になる。この瓦は軟質であり、他の2点は硬質である。瓦は小片のためその年代については決定し難いが、作りなどからみてⅣ期の土器に伴うものと考えている。しいて年代を特定するなら、平安時代前期のものではなかろうか。

(4) 石製品

菅玉（8）と砥石（9～12）と用途不明（13）のものが、遺物包含層中より出土している。

(5) 木製品

遺物包含層より出土した木製品は、量的には少なく、そのうち加工の明確なものは5点である。

(4) は、下方を欠失しているが、側面に少くとも2個以上の切込みが推定できることから、斎弔E^⑨の頭部かもしれない。斎弔とすればⅣ期と推定される。

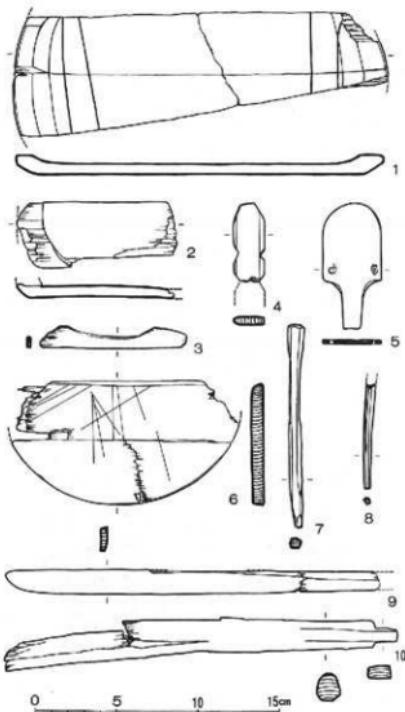
(1、2) は剣物の皿で、(1) は内底面に2カ所、底面に1カ所、使用時についたと思われる浅い傷がある。Ⅳ期と推定される。

(6) は曲物の底板で、刃痕が表面につく。Ⅳ期と推定される。

(3、7) は用途不明の木製品である。(7) は、両端を削って整えた浮子状のもので、共に時期不明。

上層からは、T12より箸の断片（8）、T17より杓子状の用途不明木製品（5）と刀状のもの（9）が出土している。(9) は、先端部が焼焦げており、もう一端は欠損している。T5より、一端に柄を作った何かの部材と考えられる板材（10）が出土している。

（高田宏司・兼康保明・前角和夫）



第12図 木製品実測図

6. まとめ

調査の結果、検出された遺物包含層は、トレンチより西側にある現在の集落の立地する浜堤上より廃棄され、それが浜堤縁辺部の湿地へ流入して堆積したものである。試掘調査と第12号小排水路の調査状況からみて、遺物包含層の広がりは、浜堤北西部の縁辺で東西約30m、南北約80m（北へのびるかどうかは、調査範囲外のため未確認）程の範囲と推定される。

発掘が水路敷の限られた面積の調査であったため、検出されたピットのならび方など十分に検討できなかったものもある。しかし、立地条件などから考えると、検出された構造は、杭の跡や自然地形の窪みなどであろう。そして、遺物を廃棄した遺跡の本体ともいべき生活の場は、おそらく現在の世継の集落と重複しているのであろう。浜堤上での調査は、これまで一度も行われていないが、調査地の西側に隣接する微高地の畠地には、それを証明するかのように須恵器や土師器など土器の破片が散在している。

遺物包含層（第4層）の状況は、古墳時代から平安時代前期までの遺物が混在して出土し、層位的堆積や地点別に時期が異なるなど縦年に亘るような出土状況ではなかった。そのため、土器の形式分類によって遺物包含層中の土器を4期に大別した。

I期は、古墳時代の古式土師器で、細別すると庄内式の新しい段階のものと布留式のものに分類できる。

II期は、古墳時代後期（6世紀第4四半期）から飛鳥時代（7世紀第2四半期）にかけての時期であるが、須恵器は古墳時代の様式を飛鳥時代まで継承している。須恵器の杯で分類すると、さらに2期に細別できる。

III期は、飛鳥時代（7世紀第3四半期）から奈良時代前期（8世紀第1四半期）にかけてのもので、2期に細別できるが、量的には奈良時代前期のものが圧倒的に多く、土師器の杯の内面に暗文を施すものが現われる。

IV期は、奈良時代後期（8世紀第3四半期）から平安時代前期（9世紀中葉）のもので、3期に細別できる。中でも細別された第2期より、畿内と土師器の杯や皿の形態、製作技法などに相違がみられるようになってくる。第3期になると灰釉陶器は出土するが、綠釉陶器、無釉陶器、黒色土器はまったく認められなかった。綠釉陶器のような特殊な土器はともかくとして、土師器と併せて、煮沸痕形態を構成している黒色土器の欠落は、不可解な現象である。

V期は、平安時代中期（10世紀中葉）のもので量的にはひじょうに少ないが、出土状況よりみて遺物包含層の堆積時期を示すものである。

遺物包含層より上部の層、あるいは地点を異にして、V期からそれ以降の平安時代から室町時代の土器や木製品などが少量ある。

遺物包含層より上部の層、あるいは地点を異にして平安時代～室町時代の土器や木製品が少量出土している。

以上出土した遺物をみると、まず遺物包含層のI期とII期の間に断絶がみられる。次にIII期以降IV期までは、調査面積に制約があり遺物の出土量に周期的なバラつきはあるが、8世紀中葉に縦年の空白がみられるものはほぼ一貫して土器形式の変遷を追うことができる。おそらくこのころから、世継の浜堤上に安定した生活の跡がうかがえるのである。また土器の器形の転換や、暗文を施した土師器の杯が認められるようになるなど、7世紀第3～4四半期を境に浜堤上の遺跡の性格が変質したのではないかと推定される。それは、8世紀代に至っても暗文を施す土師器の杯、皿が目立つことから、けっして湖辺の一村落とは言い難いのである。加えて、3片ではあるが瓦片が出土していることも大きな問題を投げ与えている。

調査の課題の一つでもあった寺院跡については、今回の試掘をも含めた調査範囲内には所在しなかった。水田中に残る「興福寺」の字名は、おそらくその所領が小字名として今まで残ったものであろう。

ただ出土遺物にみられるように、古瓦が3片出土していることから、遺跡の性格は別として、浜堤上に瓦を使用した建物があった可能性はきわめて強い。世継と同じような浜堤上に立地する米原町筑摩湖岸遺跡においても、やはりごく少量の平瓦が出土している。^⑨両遺跡の立地と歴史的背景、瓦の出土量などから推測すれば、伽藍の整備された古代寺院を想定するよりも、天野川流域の湊に伴う建物、あるいは御厨の建物に伴う瓦ではないかとも考えられる。「興福寺官署帳表」にみられる世継寺は、おそらく中世の寺院であり、伝承に言う天台寺院もあるいは小規模な堂舎から成っていたものであったかもしれない。共に歴史的にみて、Ⅴ期以降のことであり、今回の調査では確認するだけの資料は得られなかった。

(兼康保明)

註

- ① 近江町教育委員会中川通士氏の御教示による。
- ② 林屋辰三郎「古代芸能の成立と特質」(『中世芸能史の研究』岩波書店、1960) 76~79頁。
- ③ Ⅱ~Ⅳ期の分類については、次の報告書の編年を用いた。
「飛鳥・藤原宮発掘調査報告」Ⅱ(奈良国立文化財研究所、1978)
「平城宮発掘調査報告」Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ・Ⅷ・Ⅹ(奈良国立文化財研究所 1962・1965・1974・1976・1978)
- ④ 丸山寛平他「鶴遺跡」(高島町教育委員会・滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1980)
- ⑤ 兼康保明「滋賀県鶴遺跡出土陶磁」(『愛知県陶磁資料館研究紀要』2 愛知県陶磁資料館 1983)
- ⑥ 黒崎 直「斎寧考」(『古代研究』10 元興寺仏教民俗資料研究所考古学研究室 1976)
- ⑦ 中井 均「筑摩湖岸遺跡発掘調査報告書」(米原町埋蔵文化財調査報告書V 米原町教育委員会 1986)
17・18頁、図版14。
- ⑧ 須崎雪博「山の神遺跡発掘調査報告書」(大津市埋蔵文化財調査報告書(9) 大津市教育委員会 1985)
図版43、154~156。

第2表 世縫遺跡出土土器観察表

器 形	No	法 量(cm)	形 狩 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考	時 期
土 器 甕	1	口徑 14.9	頸部のくびれ部より口縁部は外反し、口縁端部を内寄させつまみ上げる。	内外面は横ナデ。	D区 残%	I期
	2	口徑 13.0	上方に真直ぐにのびる口縁部。	口縁部内外面は横ナデ。体部内外面はナデ。	B区 残%	"
	3	口徑 16.2	口縁部は外反し、口縁端部は外側に外板面を作る。	内外面は横ナデ。	C区 残%	"
	4	口徑 13.2	屈曲し、上方に外反する口縁部。口縁端部はやや外面肥厚する。	内外面横ナデ。	H区 残%	"
土 器 甕	5	口徑 15.4	器壁の厚いくの字状の口縁を有する。	内外面ともに刷毛。(6)は刷毛後横ナデ。	5 B区 残% 6 H区 残%	"
	6	口徑 14.2				
	7	口徑 15.3	受口状口縁を有する近江の甕。	口縁部内外面横ナデ、体部外面は刷毛を施すもの(7~9)と施さないもの(10~11)がある。内面は横ナデ。	7 H区 残% 8 F区 残% 9 G区 残% 10 G区 残% 11 C区 残%	"
	8	口徑 14.9				
	9	口徑 10.6				
	10	口徑 13.4				
	11	口徑 11.8				
	12	口徑 12.9	くの字の頸部から口縁端部を上方につまみ上げる。	口縁部内外面は横ナデ。頸部外面に波形と直線文を施す。	A区 残%	"
	13	口徑 13.9				
	14	口徑 15.2				
	15	口徑 15.3				
144						
	16	口徑 15.1	口縁部は内寄し、口縁端部を内面肥厚させた布留式甕。	口縁部内外面横ナデ。	16 I区 残% 17 I区 残% 142 C区 残% 143 C区 残%	"
	17	口徑 12.6				
	142	口徑 13.4				
	143	口徑 15.5				
	18	口徑 14.5	東海系のS字状口縁台付甕の口縁部。	口縁部内外面は横ナデ。(18)は頸部内面に横目を残し、体部内面は指ナデ。	18 H区 残% 19 H区 残% 20 H区 残% 145 H区 146 H区	"
	19	口徑 13.3		(20)は頸部に一条の沈線。体部内面は箒ナデか。	147 H区 148 H区	
	20	口徑 9.0				
	145	口徑 11.1				
	146	口徑 15.2				
21 22	147	口徑 10.2				
	148	口徑 14.6				
	21		東海系のS字状口縁台付甕の脚台。	外面は刷毛で(22)は部分的にナデ消し。内面は指ナデ。	21 C区 脚台上半 22 I区 残%	"
	22					
	23	口徑 14.3	北陸系の口縁部外面に擬四線文を施す甕。	口縁部内外面横ナデ。	C区 残%	"
土 器 甕	24	底径 8.0	やや突出した平底の底部。	内外面ナデ。底部外面に乾燥時の圧痕。	H区 残%	"
	25	底径 5.7	平底のもの(25~29)と大きく凹むもの(26)とやや凹むものとがある。	概ね内外面ナデであるが(25)の内面は刷毛後ナデ。	25 I区 残% 26 A区 残%	"
	26	底径 4.5		(26)の外表面は刷毛後ナデ。	27 I区 底部完存	
	27	底径 4.1		(30)の内面は刷毛。また(28)の底部外面には平行	28 T17 底部完存	
	28	底径 6.8			29 H区 底部完存	
	29	底径 4.1				

	30	底径 5.2		縦状の圧痕が残る。	30 拡張区 残%	I 期
土 師 器 甕	31	底径 3.3	小さな平底(31)と大きく凹んだ底部(32)。	内外面ナデで、(31)の外面は板状工具を使ってい るのか。	31 拡張区 底部完存	"
	32	底径 3.0			32 H区 残%	
	33		ほぼ直線的に開く脚部。	外面横ナデ。脚部内面ナデ。体部内面に放射状の板ナデ。	H区 脚部上半完存	"
土 師 器 椀	34	口径 15.4	半球形の体部より口縁部が2段に屈曲し、口縁端部は丸くおさめる。	内外面横ナデ。	H区 残%	"
土 師 器 高杯	35	口径 23.2	環部は外方へ大きく開き、深い。	全体に磨滅が激しいが、恐らく内外面とも横ナデであろう。	B区 环部ほぼ完存	"
	36		八の字状に開く脚柱部で三方透しである。	内面にしづら痕あり。	36 H区 脚柱部完存	"
	153				153 C区 脚柱部完存	
	37		直線的に開く脚柱部(37)と筒状の脚柱部(149・151)で共に透しはない。	外面ナデ。内面は箝削り。	37 T17 脚柱部完存	"
	149				149 T17 脚柱部完存	
	151				151 T17 脚柱部完存	
	38		短い脚柱部に大きく広がる腹部で八方透しである。	内外面ナデ。	C区 脚柱部完存	"
	39	幅径 12.8	低く大きく開く裾部。	内外面刷毛後横ナデ。	I区 残%	"
	154		杯の内面を施錠した東海系の高杯。	内外面横ナデ。	E区	"
上 師 器 器合	40	幅径 25.3	大きく外反しながら開く瓶部で、肩部はやや上方に拡張する。	外面は刷毛後ナデ。内面はナデ。	I区 残%	"
	41	口径 8.5	浅くて小さい受部に(42)は大きく広がる脚部がつく。恐らくどちらも三方透してあろう。	受部内外面及び脚部外面は横ナデ。脚部内面は(41)がしづら痕を残し、(42)は刷毛。	41 H区 残%	"
	42				42 G区 残%	
土 師 器 壺	140		口縁部は外反し、口縁部は上方において直立する。2本以上の棒状浮文を貼り付ける。		H区	"
	141		二重口縁	内外面横ナデ。	表様	"
土 師 器 甕	43	口径 21.6	口縁部は内寄り、口縁端部が内側するもの(43)、内外面に肥厚するもの(45)、外方が強い横ナデによりや回むるもの(46)がある。	口縁部内外面は概ね横ナデ。脚部内外面は概ね刷毛。(43)は口縁部内面にヘラ記号を有する。	43 J区 残%	II-1期
	45	口径 19.6			45 I区 残%	III 初
	46	口径 22.8			46 I区 残%	IV 期
	44	口径 18.6	脚部に把手の付く甕と思われる。	口縁部内外面は横ナデ。	H区 残%	II 期
	47	口径 13.5	口縁部は外傾し、口縁端部は丸くおさまる。	口縁部内面横ナデ。口縁部外面は刷毛後横ナデ。	拡張区 残%	III-1期
	48	口径 14.6	外反する口縁部で、口縁端部は上下にやや拡張し、外面に回輪を施す。	口縁部内外面横ナデ。脚部内外面刷毛。	拡張区 残%	III-2期
	49	口径 9.4	外反する瓶部を口縁部で	口縁部内外面と体部外面	I区 残%	IV 期

		内窓させる。	は横ナデ。体部内面窓割り。	
土師器 杯	50	口径 9.0 器高 3.4	小型の杯身	内外面ナデ。 H区 残%
	51	口径 17.8 器高 5.1	深くて大きめの杯身で、 口縁端部はやや外反する。	内面に放射状暗文を施し、 外面下方は窓割り。 III-2期
	52	口径 17.0	口縁端部は巻き込む様に 肥厚し、深いもの(52)と浅 いもの(53)	内面に放射状の暗文を施す。 S2 拡張区 残%
	53	口径 18.4		S3 拡張区 残%
	54	口径 14.6 器高 2.7	口縁部は直線的に立ち上 り、口縁端部はやや内面肥 厚する。	内面にラセン暗文を施す。 54 拡張区 残% 55 拡張区 残%
	55	口径 15.4 器高 3.6		"
	56	口径 12.1	口縁部は内窓する。	56 拡張区 残% 57 拡張区
	57	口径 12.2		"
	58	口径 11.8 器高 2.3	口縁部は内窓し、口縁端 部はやや外方へ屈曲してい る。	底部外面は不調整で(58) 底部外面に布目压紋が残る。 IV-3期
	150			150 拡張区
土師器 盤	59	口径 11.2 器高 3.3	口縁部はほぼ直線的に立 ち上がる。	底部外面は不調整。 IV期
	60	口径 12.0	口縁部は内窓し、口縁端 部は外面肥厚する。	内面横ナデ。 IV-3期
	61	口径 14.8 器高 2.3	口縁部は内窓ぎみに立ち 上り、口縁端部はやや内傾 する。	底部外面は不調整。 IV-1期
	62	口径 19.8	口縁部は外傾し、口縁端 部は外面肥厚する。	外面部底は不調整と思わ れる。 拡張区 残%
	63	口径 25.4	口縁部は内窓ぎみに立ち 上り、口縁端部は丸くおさ まる。	底部内面及び口縁部外面 に暗文。 J区 残%
	64	口径 14.8 器高 1.4	口縁端部はやや面取りを している様である。	底部外面は不調整。 IV-2期
	66	口径 14.8 器高 1.5		64 I区 残% 66 拡張区 残%
	65	口径 12.6 器高 1.6	口縁部は内窓し、上方に おいて外反する。	底部外面は不調整。 拡張区 残%
	67	口径 14.3 器高 1.5	口縁部は内窓し、器壁が やや厚い。	底部外面は不調整。 拡張区 残%
	68	口径 14.6	口縁部は内窓し、口縁端 部は丸くおさまる。	底部外面は不調整。 68 I区 残% 69 I区 残%
七 土 師 器 杯	69	口径 15.6 器高 1.7		"
	70	口径 14.5	口縁部は内窓し、上方で 若干外反している。	底部外面は不調整。 70 拡張区 残% 74 H区 残%
	74	口径 11.2		"
	75	口径 11.9 器高 2.3	口縁部はほぼ直線的に立 ち上る。	底部外面は不調整。 75 拡張区 完形 76 拡張区 残%
	76	口径 11.4		79 T17 残%
	79	口径 10.6 器高 3.0		"
	77	口径 12.4 器高 2.7	口縁部はやや外に開く。	底部外面は不調整。 77 I区 残% 78 H区 残%
	78	口径 11.0 器高 2.9		80 拡張区 残% 81 拡張区 残%
	80	口径 12.4 器高 2.9		"

	81	口径 13.2	(71) は7面、(72) は8面、(156) は細かく面取りを行う。			IV 期
土 師 器 高盤	71			71 J区 脚柱部完存	IV-2期	
	72			72 拡張区 脚柱部完存	IV-3期	
	156			156 拡張区 脚柱部完存		
	73	口径 23.6	ほぼ直線的に開く杯部で、口縁端部は外に張り出し若干面取りを行う。	内面は横方向、外面は放射状の暗文を施す。	拡張区 残1/4	IV-3期
土 師 器 鍋	155		JU縁部は外齊し、上方において屈曲度をます。	脚部内外面刷毛。	拡張区	
土 師 器 椀	157		楕の両高部と思われる。		157 拡張区	
	158				158 K区	
土 師 器 皿	159		合付皿の脚台と思われる。		拡張区	
土 師 器 不明	152		口縁端部は内側し、外面に断面三角形の凸唇を貼り付ける。	脚部外面に蝶が付着。	T16	
須 恵 器 杯蓋	82	口径 12.7	口縁部はやや内齊しながら下りる。	天井部上方を箆削りしている。	82 I区 残1/4	IV-1期
	83	口径 11.0 器高 3.6			83 T17 残1/4	
	84	口径 11.6 器高 2.7			84 I区 残1/4	
須 恵 器 高杯	85	口径 11.8	有蓋高杯の杯部で、ほぼ水平の受部に上方において屈曲する立ち上り部をもつ。二方透しである。	杯部内部中央部のみ丁寧な仕上げナデ。	85 J区 残1/4	II-1期
	162				162 T17	
須 恵 器 杯身	86	口径 10.7 器高 3.3	受部はほぼ水平で、立ち上り部はやや内齊している。	外面下方を箆削りしている。	86 T17 残1/4	II-1期
	87	口径 11.2 器高 3.5			87 T17 残1/4	
	88	口径 10.0 器高 3.1			88 H区 残1/4	
須 恵 器 杯蓋	89	口径 10.6 器高 3.9	小型の杯蓋。	天井部上方を箆削りしている。	89 I区 残1/4	II-2期
	90	口径 9.6 器高 3.7			90 T17 残1/4	
	91	口径 10.0 器高 3.1			91 I区 残1/4	
須 恵 器 杯身	161	口径 9.8	受部はやや上方に屈曲し、立ち上り部はやや内厚である。	内外面横ナデ。	T17 残1/4	
	92	口径 9.4 器高 3.1	小型の杯身。	外面下方を箆削りしている。(94) は底部に2条の箆記号。	92 T17 残1/4 93 J区 残1/4 94 I区 残1/4 95 J区 残1/4	II-2期
	93	口径 8.6 器高 3.3				
	94	口径 8.9 器高 2.9				
	95	口径 9.3 器高 3.2				
須 恵 器 杯蓋	96	口径 15.6 器高 3.1	内面のかえりが退化しかけている過半な杯蓋。	天井部上方を箆削りしている。	H区 残1/4	III-1期

須恵器 杯身	97	口径 13.6 器高 4.6 高台径 8.3	ハの字状に開くしっかりした高台。	内外面ロクロナデ。	G区 完形	Ⅲ-1期
	98	口径 9.8 器高 3.6	高台のつかない深い杯身。	(99) の底部の一部に範 削りが残る。	98 拡張区 ほぼ完 形 99 拡張区 痕%	Ⅲ-1期
	99	口径 13.6 器高 4.9				"
	100	口径 11.6 器高 3.2	浅くて大きな杯身。	底部外面は不調整。	100 拡張区 残% 101 I区 痕%	Ⅲ-2期
須恵器 杯蓋	101	口径 13.2 器高 3.8				"
	102	口径 17.2 器高 4.6	大型で深い杯蓋。	天井部は不調整。	102 拡張区 残% 103 H区 痕%	"
須恵器 杯身	103	口径 18.0 器高 3.9				"
	104	口径 16.3 器高 4.4 高台径 10.6	浅くて大きめの杯身に低い高台が中心よりにつく。	底部外面は不調整。	104 拡張区 残% 105 H区 痕%	"
	105	口径 17.6 器高 4.3 高台径 12.7				"
	106	口径 14.4 器高 4.7 高台径 10.2	深く大きめの杯身に低い高台部。	底部外面は不調整。	106 I区 高台部 完存、他は% 107 拡張区 ほぼ 完形	IV-1期
須恵器 杯身	107	口径 15.4 器高 5.4 高台径 10.0				"
	108	口径 11.8 器高 3.9 高台径 7.6	ほぼ直線的に開く口縁部 で、口縁部上方でやや外反 する。	底部外面は不調整。	H区 痕%	IV-1~2 期
	109	口径 14.0 器高 3.1	浅くて大きめの杯身。	底部外面は不調整。	拡張区 痕%	"
須恵器 杯蓋	110	口径 11.7 器高 2.6	口縁部で屈曲して横のつ く杯蓋。	天井部外面は不調整。 重ね焼き痕が残る。	拡張区 痕%	IV-2期
須恵器 杯身	111	口径 11.4 器高 4.4 高台径 7.5	ほぼ直線的に開く口縁部。 幅広の低い高台部。	底部外面は不調整。	111 拡張区 高台 部完存 口縁部%	IV-2~3 期
	112	口径 11.5 器高 4.1 高台径 7.6			112 拡張区 完形	"
須恵器 杯身	113	口径 12.0 器高 4.0	高台のつかない杯身。	底部外面は不調整。	113 H区 痕% 114 拡張区 痕% 115 拡張区 痕% 116 拡張区 痕%	"?
	114	口径 11.9 器高 3.0				IV-3期
	115	口径 12.2 器高 4.4 高台径 8.4	やや深く大きめの杯身に 低い高台部	底部外面は不調整。	拡張区 痕%	IV-2~3 期
	116	口径 11.2 器高 3.6 高台径 9.0	やや小さめの高台が底部 中心よりにつく。	底部外面は不調整。	拡張区 痕%	"?
須恵器	117	口径 14.2	扁平な杯蓋。	(117) は天井部の一部	117 拡張区 痕%	IV 期

杯蓋	160	口径 1 6.8		に範削りが残る。	転用範 160 T17 残% 163 T 4	
	163					
	118	口径 1 3.8 器高 1.7				
	119	口径 1 6.0 器高 1.1				
灰釉陶器皿	120	口径 1 4.4 器高 2.4 高台径 5.9	口縁部はやや外反する。 高台部は断面台形状で、内側に段がつく。	皿部下半及び底部外面は範削り。	拡張区 完形	IV-3期
灰釉陶器椀	121	口径 1 4.0 器高 4.7 高台径 6.6	口縁部はやや外反する。 高台部外面はやや外反し、(121)は内面に段がつく。	脇部下半及び底部外面は範削り。	121 拡張区 完形 122 T16 残%	"
	122	口径 1 3.0 器高 4.6 高台径 6.0				"
	123	高台径 7.4	口縁部はやや内弯し、高台部はやや高めの高台である。	底部外面は範削り。	123 J区 残% 178 J区 残% 180 拡張区 残% 181 C区 182 J区 残%	"
	178	口径 1 4.4				
	180	高台径 6.1				
	181					
	182	高台径 7.2				
	124	口径 1 0.9 器高 2.4 高台径 5.8	体部はやや内弯ぎみに立ち上り、低い高台がつく。	底部外面は範削り。	124 J区 残% 179 J区 残%	V期
	179	高台径 7.4				
	164	高台径 7.0	断面方形の高台(164)、	底部外面は系切後高台貼付時にナデ消し。(183)のみ高台接地面は棒状具により固ませている。	164 T17 残% 183 F区 残% 184 J区 高台部完存 185 J区 残%	
	183	高台径 6.0	やや三ヶ月形の高台(183)			
	184	高台径 6.1	三角形の高台(185)等がある。			
	185	高台径 7.7				
須恵器甕	125	口径 1 6.4	口縁部はゆるやかに外反し、口縁端部は外面肥厚する。	脇部外面は叩き。	拡張区 残%	II-1期
	126	口径 2 1.4	口縁端部は外面下方に拡張する。	口縁部外面はロクロナデ。	拡張区 残%	II-III-1期
	127	口径 3 8.4	口縫部は外反し、口縫端部で上方に屈曲する。	口縫部外面に波状文を施す。	127 I区 残% 175 I区 176 I区	IV-1期
	128	底径 1 7.2	平底の底面。	脇部外面は叩き。	I区 残%	IV-3期
	169		口縫部は外反し、口縫端部で上方に屈曲する。		I区	
須恵器壺	129	口径 7.5 器高 1 9.2	などらかに外反しながら立ち上る長頸壺	口縫部外面に絞り痕を残す。時計回りの13本1単位の割実列点文。	H区 残%	II-1期
	130		口縫部の器壁が非常に厚い。脇部上方にて肩が張る。	脇部外面沈線より下方に範削り。	拡張区 図の部分のみは完存	Ⅲ期?
	131	高台径 1 2.6	高台部は近くの字状に開く。透しは四方と思われる。透し下方の高台端部に切り込みを残す。	脇部外面は弱い範削り。透しは外方より内方に透った後に上方にあげながらねいたものと思われる。	J区 残%	III-1期
	132	高台径 8.7	算盤玉状の体部。ハの字型に開く高台。	脇部外面下方は範削り。	T17 残%	III-2期
須恵器	133		やや肩の張る体部。	(133) 脇部外面は範削	133 拡張区 残%	"

平瓶	177			り、底部外周は非常にツルツルしている。(177) 外面は平行叩き後カキ目を、内心は同心円の叩き。	177 拡張区	
須恵器 高杯	134		無蓋高杯で、脚部はラッパ状に開く。	内外面ロクロナデ。	134 I区 脚部完存	II-1期
	167				167 拡張区	
	173				173 I区 脚部完存	
須恵器 鉢	135	口径 24.6 器高 14.0 高台径 17.3	半楕円状の体部に、細くて長い高台部がつく。	胸部外面下半より底部にかけて窓削り。	H区 残%	III-2期
須恵器 無頸蓋	136	口径 12.2	口縁部は内傾し、口縁端部は浅く凹んでいる。	外面中程より下方に粗い窓削り。	拡張区 残%	IV-3期
須恵器 脚付盤	137	口径 19.4 器高 6.7 脚台径 9.0	大きく深い盤に、小さな脚台がつく。	(137) の杯底部外面は窓削り。	137 H区 底部% 脚台部%	III-1期
	138	脚台径 9.3			138 拡張区 残%	"
須恵器 皿	139	口径 14.8 器高 1.9	外傾して立ち上る口縁部。	底部外面は不調整。	拡張区 ほぼ完形	IV-2期
須恵器 壺	170		胸部は内窓し、底部は平底ぎである。	胸部外面は窓削り。 底部の盛吸は厚い。	T17	
	172		底部(172)と口縁部(174)。	(172)は胸部外面に粗い窓削り。	172 拡張区 174 拡張区	
	174					
須恵器 鉢	168		体部は直線的に外方に立ち上り、口縁端部は外に面をもつ。	体部下方は粗い窓削り。	拡張区	IV-2期
須恵器	171		口縁部と思われるが、あるいは脚部の柄になるかもしない。	内外面ロクロナデ。	拡張区	
常滑 大平鉢	186		ほぼ長方形の高台がつく。	胸部外面に粗い窓削り。	186 H区	中世
	188				188 D区	"
	189				189 D区	"
常滑 壺	187		(187)と垂下するもの(190)がある。	(188)の胸部には叩きが残る。	187 E区	"
	190				190 T16	"
	193				193 E区	"
信楽 大平鉢	192		口縁端部が外面肥厚する。	内外面ロクロナデ。	T16	"
青磁 碗	191			外面に連脊が入る。	H区	"

(高田宏司)

II. 長浜市金剛寺遺跡

1. はじめに

本報告は、県営は場整備事業神田地区加田西第2工区にともなう金剛寺遺跡の昭和61年度における発掘調査の成果を収めたものである。

金剛寺遺跡は長浜市加田町に所在する。遺跡は加田集落の西側に広がる水田に位置する。

金剛寺遺跡の名称は、天平宝寺6年（762年）に大和大安寺の僧安澄により創建され、大治4年（1129年）に再興された金剛寺という寺に由来する。しかし、その所在は、遺跡の付近に存在するとみられるが、建てられたとされる正確な位置は、明らかでない。

今回のは場整備事業では、切土工事により2箇所の塚（鏡山、掩木山）が削平され、さらに排水路敷設予定線が、遺跡内を縦横に貫くなど、工事により影響をうける地点について、事前に発掘調査を実施することにした。

昭和61年4月15日から9月24日まで、現地調査をおこない、ひきつづき整理調査を実施した。



阿弥陀如来立像
(阿弥陀寺)



小坂神社(大正9年6月建立)

2. 位置と環境

金剛寺遺跡は、長浜市加田町に所在する。遺跡は、伊吹山脈から流れ出す姉川により形成された沖積平野上に立地する。

加田町には、中々山、平塚、亀岡など新世代第四紀洪積世（200万年前）以前に形成された小丘陵群が存在し、隣接する田村町には、同じ小丘陵である田村山があり、加田町の東には、山東町との境界に横たわる横山丘陵がある。

① 加田町は、姉川扇状地の扇端の南縁辺部にあたり、加田の集落は東の田村、北東の大成亥、南の近江町長沢、宇加野の集落に比べて、標高は高く、約95.00mを測る。このため、姉川の分流も加田の約1.5km北東の永久寺集落から湖岸の下坂浜をむすぶ小河川以南には存在しない。

小丘陵群の南側の裾から、南の沖積地にかけて広がる金剛寺遺跡の本年度調査区においては、弥生時代の溝であるSD001、SD002、遺物を含まない溝、と合せて3本の河川を検出したが、いずれも短い期間存在しただけのものと思われ、遺物を含まない溝（第3トレーン中央部検出、埋土は砂礫層である）は、洪水等の一時の増水時に形成されたと思われる。

以上のような地理的条件から、加田町の水利は悪く、近世文書等によると、江戸時代においては、永久寺の村（姉川の分流沿いあり、地下水も豊富に湧く）から、用水路を引いて、水を分けてもらっていた。しかし、かんばつ時には、加田の水田では深刻な水不足が生じたようである。

中世以前においても、水利の点では周辺に比して、悪かったであろうと思われる。そのため、加田付近では規模な集落遺跡は検出されていない。



神田溜池

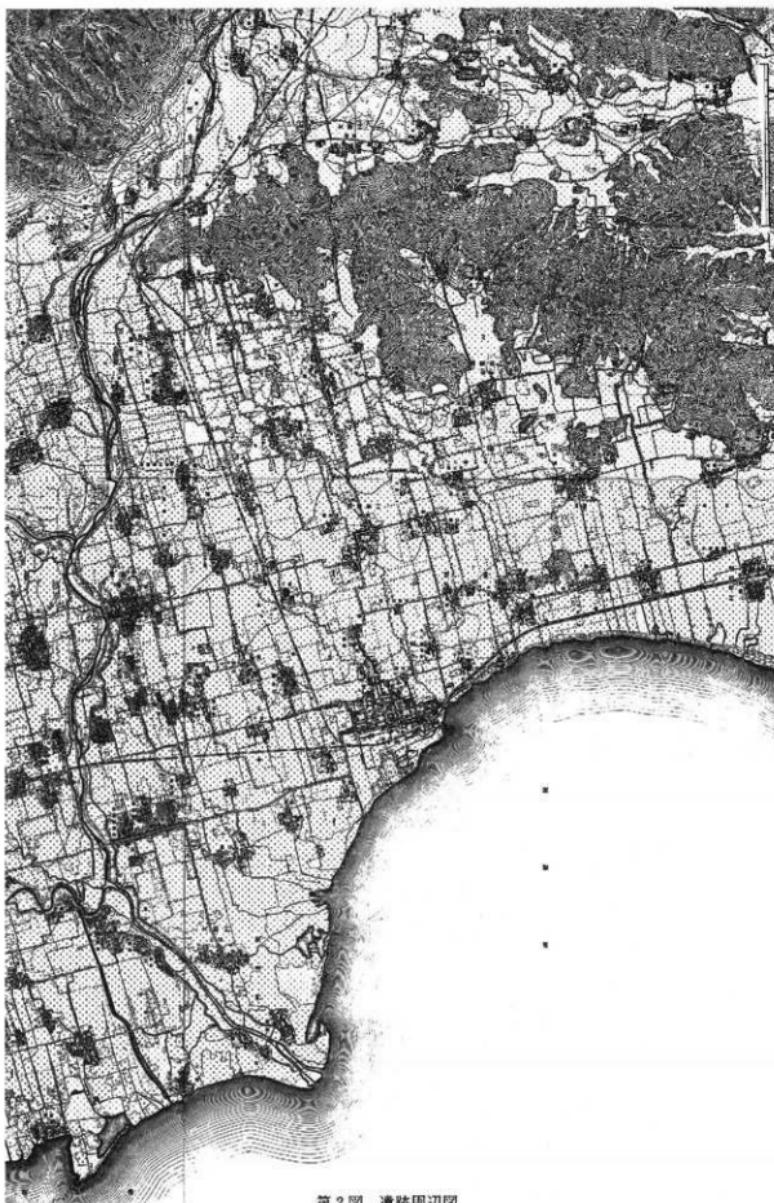


豊島作右衛門石碑
(亀岡山上、明治35年建立)



- (長沼市) 1 下ノ郷東遺跡 2 小沢城跡 3 賀源寺遺跡 4 相模東遺跡 5 十里町遺跡 6 稲田遺跡 7 新庄馬場遺跡 8 神居切遺跡 9 泉町西遺跡 10 紗覚寺遺跡 11 地蔵遺跡 12 口分田北遺跡 13 野瀬最終 14 国友遺跡 15 麦前遺跡 16 滝安古墳群 17 极木百坊遺跡 18 松原古墳群 19 加納遺跡 20 越前冢遺跡 21 大塚遺跡 22 神戸遺跡 23 大月遺跡 24 乘合寺遺跡 25 上坂城跡 26 正蓮寺遺跡 27 嘉立遺跡 28 一丁田遺跡 29 地藏室遺跡 30 北船町遺跡 31 南吳屋町遺跡 32 本覚寺遺跡 33 御藏坊遺跡 34 高田遺跡 35 紗覚院遺跡 36 新放生寺遺跡 37 八幡東遺跡 38 川崎遺跡 39 山階遺跡 40 川崎兩造跡 41 鳥守立遺跡 42 長浜北高遺跡 43 阿弥陀遺跡 44 小原遺跡 45 元寺遺跡 46 正信寺遺跡 47 宮司東遺跡 48 八田初造跡 49 石仏遺跡 50 西通寺遺跡 51 一乗寺遺跡 52 常昌寺遺跡 53 丸岡遺跡 54 佐賀寺遺跡 55 神ヶ谷遺跡 56 八日山遺跡 57 中町田遺跡 58 十桜寺遺跡 59 檜原寺遺跡 60 無量光寺遺跡 61 宮川障壁遺跡 62 宮司遺跡 63 宝室遺跡 64 大東北遺跡 65 大東遺跡 66 大辰巳遺跡 67 内明寺遺跡 68 菊町遺跡 69 矢正寺遺跡 70 南高田遺跡 71 東高田遺跡 72 地福寺遺跡 73 福滿寺遺跡 74 篠田寺遺跡 75 大亥友遺跡 76 畿田遺跡 77 永久寺遺跡 78 東光寺遺跡 79 西徳寺遺跡 80 長因寺遺跡 81 正光寺遺跡 82 永保町遺跡 83 竜公御湖岸遺跡 84 平方湖岸遺跡 85 神宮寺遺跡 86 神町遺跡 87 下坂湖岸遺跡 88 塚町遺跡 89 下坂城遺跡 90 高橋遺跡 91 寺田遺跡 92 安導寺遺跡 93 金光寺遺跡 94 多田幸寺遺跡 95 田村遺跡 96 前川遺跡 97 前五反田遺跡 98 金剛寺遺跡 99 大堂鄉遺跡 100 福林寺遺跡 101 七觀星敷遺跡 102 阿弥陀寺遺跡 103 明嚴遺跡 104 法華寺遺跡 105 織堂遺跡 106 青葉坊遺跡 107 本庄遺跡 108 常喜城跡 109 東屋敷遺跡 110 熊間北遺跡 111 熊間山遺跡 112 熊間社遺跡 113 熊間山西遺跡 114 森ノ木古墳群 115 四面山遺跡 116 榊田遺跡 117 釈迦堂遺跡 118 御山遺跡 119 宮施寺遺跡 120 布勢菜遺跡 121 天神遺跡 122 中山古墳群
(近江町) 123 長沢城跡 124 福寺遺跡 125 長尺開跡 126 長尺遺跡 127 西火打遺跡
(浅井町) 128 涙ヶ神社遺跡 129 菊姫寺遺跡 130 三田遺跡 (虎姫町) 131 宮衛遺跡

第1図 周辺遺跡分布図



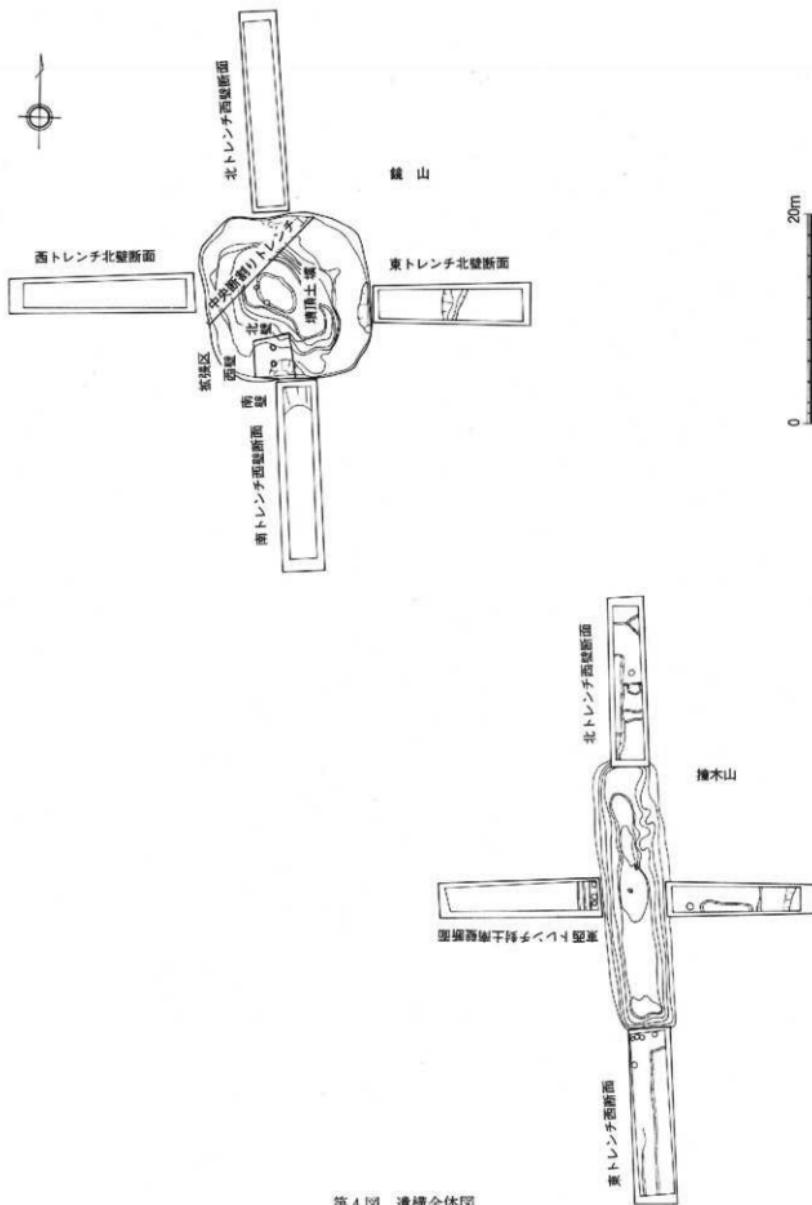
第2図 通路周辺図



第3図 遺跡位置図



0 200m



坂田郡において、条里の大がかりな再構成がおこなわれる平安後期（10、11世紀）においては、加田の地でも条里区割がおこなわれている。平安時代後期には、旧来、田畠等に利用されていなかった山野、狭い渓谷などが、開墾され、耕地が全国的に拡大しており、坂田郡の条里の再構成時には、水利の悪い加田にも条里田畠が生まれたのである。

17世紀の初頭（慶長年間）、水不足の解消のため、加田の領主豊島作右衛門は、加田の集落の東の亀岡、松岡の2つの丘陵の谷間に神田溜池を造り、それにより、加田二十町歩の田を養われたという。しかし、それによつても、水不足が完全に解消しなかったことは、前述の永久寺からの導水を見ても明らかである。^③

加田に残る寺は、鎌倉時代に創建の起源をもつものと、室町時代に起源を持つものがある。

鎌倉時代創建のものは興善寺、得法寺、妙立寺、阿弥陀寺などで、室町時代のものは安明寺、雲西寺、薫徳寺、心絆寺があげられる。

得法寺は、創建時は天台宗であったが、室町時代に浄土真宗に改宗している。妙立寺も創建時は天台宗であったが、鎌倉後期に日蓮宗に改宗しており、日蓮宗に改宗したころ、加田の鎮守である八坂神社の神宮寺になったとされている。

加田の、小字名には寺に関係のある名称が多い。以下あげてみると、「阿弥陀寺、寺町、堂の前、東揮坊、東揮師堂、古堂、皆別当、寺田、仏堂、焰魔窟」などである。

阿弥陀寺については、小字「堂の内」に所在する峠（鏡山）が、阿弥陀寺の鐘楼の跡と伝えられ、小字「堂の内、阿弥陀寺」を中心に大規模な伽藍を有していたと伝えられる。

この阿弥陀寺の系譜を引く現阿弥陀寺（天台宗）は少し離れた加田の集落内に所在し、小堂を一字残すのみである。本尊は、寄木造の阿弥陀如来立像で、その製作技法から、鎌倉時代（14世紀）のものと考えられている。

加田には、長浜より息長村岩脇に通ずる街道（北国街道の脇街道）があり、そこに一里塚が設置されたとの伝承があるが、はっきりとした位置は特定できない。

3. 遺構

(1) 鏡山

堂の内という小字を有する一町方園の水田内には、地元で鏡山、壇木山と呼んでいる2箇所の小墳丘がある。

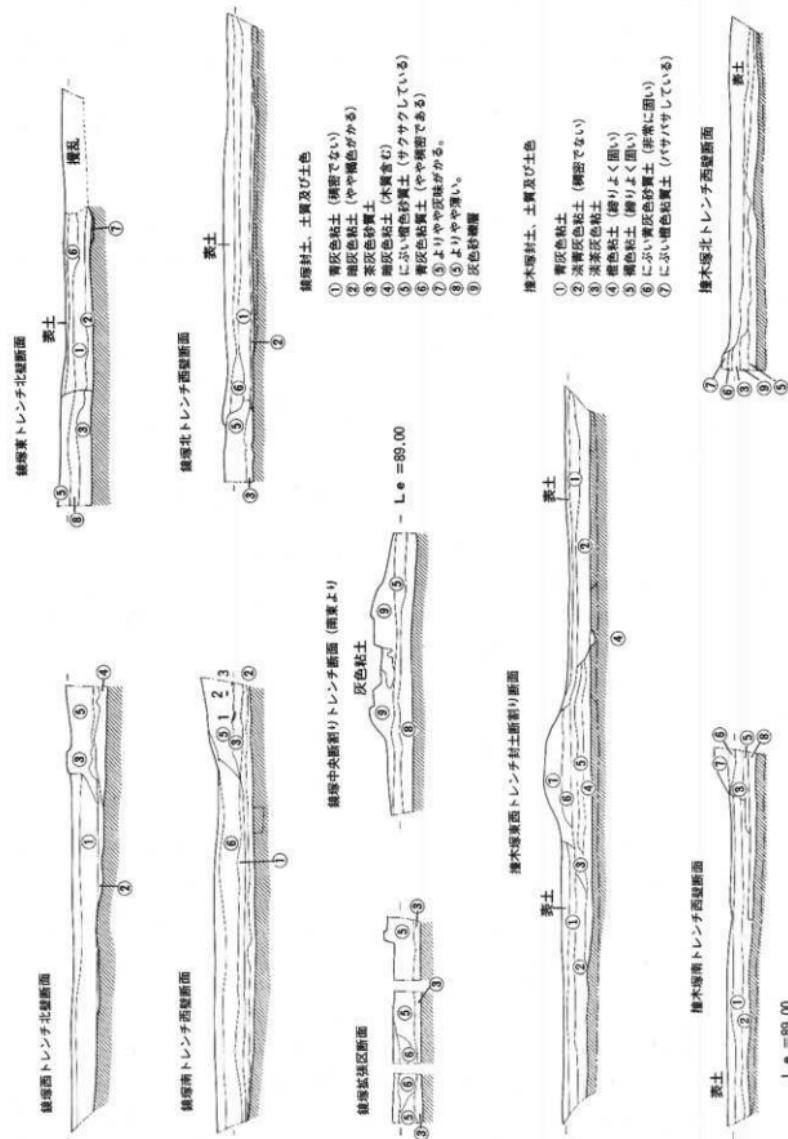
鏡山の方は、現水田面から約70cmの高さを持ち、主軸が東北方向を向く楕円形で、現水田面に接する基底部で測ると、長軸約5.5m、短軸約3.0mである。鏡山造築時の旧地表面は現水田面より約50cmの深さにあり、鏡山の墳丘の裾も現水田下にもぐり込んでいる。

以上のことから鏡山の造築時の高さは1.2m程度あったと思われる。

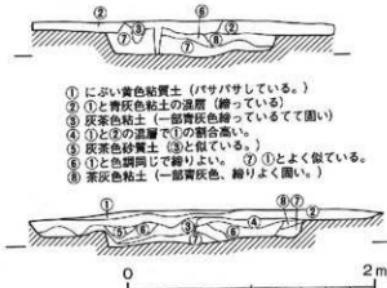
鏡山の封土は、下層（にぶい橙色砂質土）と上層（灰色砂礫層）の2層に分かれる。両層とも締まりは悪く、特に下層はサクサクしており、築造時によくつき固めながら盛上げたという状態とはいえない。

上層からは、白瓷系陶器碗（山茶椀）6個体、白瓷系陶器皿1個体が出土している。

墳丘の南部の、現水田下の旧地表面上から土師質皿51枚が直径1m程の範囲内に集中して置かれた状態で出土した。墳丘の土層断面より観察すると、土師質皿は旧地表面に直接置いて、その上に封土をかぶせたことが確認された。（拡張区部分）



第5図 土層断面図



第6図 鏡塚頂土壌埋土断面

を有していたと思われる。

撞木山の封土のうち、最上部のにぶい橙色粘質土は練りが悪くバサバサしている。第2層目ににぶい黄灰色砂質土は、かなりよくつき固められたらしく、非常に練りがよい。第3層、第4層も第2層ほどではないが、よく固められて、練りもよい。

また下層部にいくにつれて、封土上面の幅が広がっており、最下層においては幅12.5mを測る。

出土遺物は、鏡山に比べて少なく、また細片が多い。注目されるものとしては、第2層(黄灰色砂質土)から、大きな玉縁を有する白磁碗が出土している。

(3) 小結

鏡山の封土は、つき固めながら築造したようにはみえず、一気に土を盛上げて築造したものであろう。

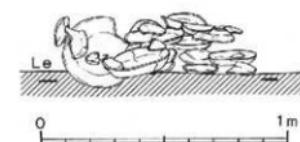
封土から出土した白瓷系陶器碗(山茶碗)と白瓷系陶器皿の年代については、ほとんどが底部のみの残片であ

るため明確に年代決定をしがたいが、12世紀末の生産窯出土陶片に類似している。

基底部から一括して出土した、土師質皿は墳丘築造前に、墳丘の立地面である旧地表面に敷並べられており、その上に封土を盛って墳丘を築造している。土師質皿の封土下への埋納については、塚を築くさいの祭祀行為と思われる。

土師質皿のうち大半は、口径が10cm内外、器高は1.5cm程度のもので、口径が15cmを越えるものは2点だけである。土師質皿は口縁内外面がヨコナデ調整され、他は未調整である。これらの土師器の年代は12世紀末と思われる。

撞木山は鏡山と違い、封土を版築状につきかためながら築造している。遺物は少なく実測可能なものとしては、白磁碗1点のみである。これは、12世紀後半から13世紀中葉のものである。



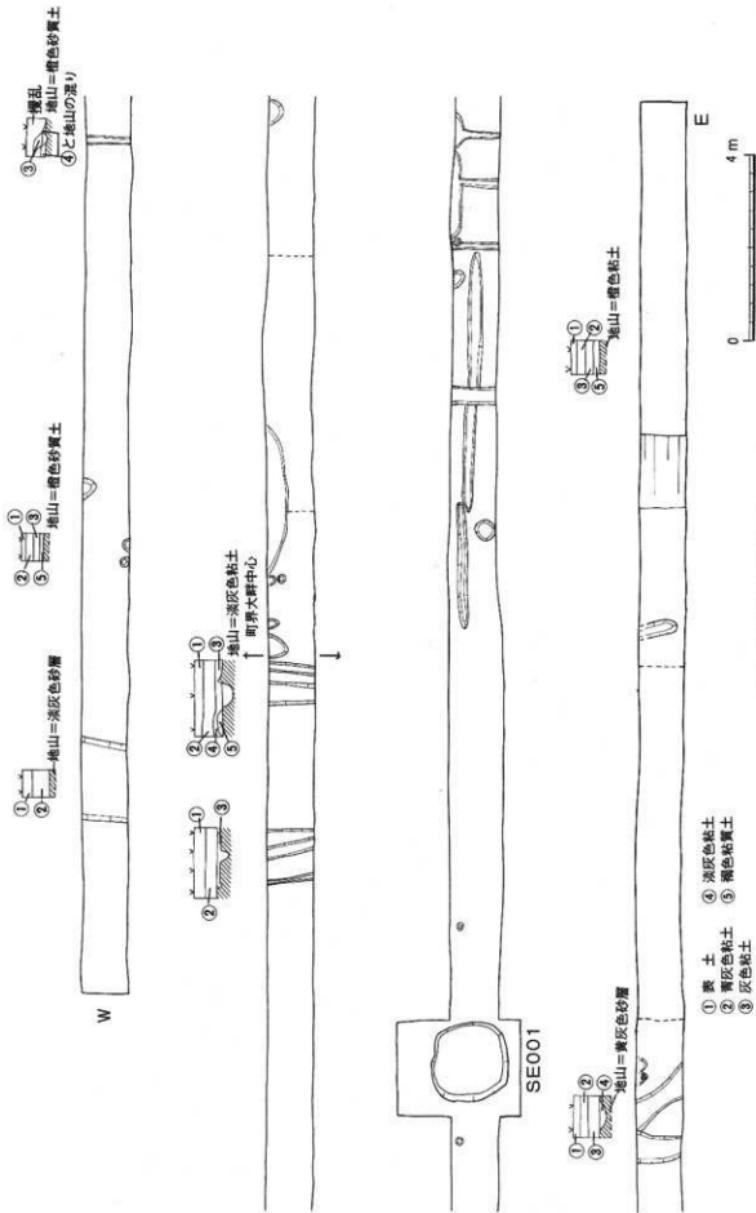
第7図 鏡塚基底部土師器皿出土状況(拡張区)

墳頂部の土壤は、地元の人の話によると、数年前まで柿の木が立っていたようで、その根の跡であると考えられる。

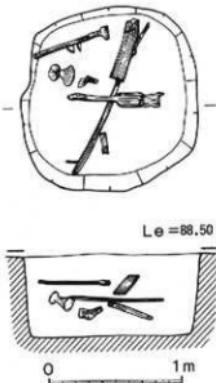
(2) 撞木山

撞木山、鏡山の南西約24mのところに所在する。現地表上に現われた部分は、長辺12.5m、短辺3.3mの長方形で、高さは約0.5mである。

しかし、鏡山と同様、現水田下に裾部が約60cmもぐり込んでおり、築造時は旧地表面から約1.1mの高さ



第8図 造構全体図(第2トレシチ)



第9図 S E 001遺物実測図

以上のことから、この2つの塚は、12世紀末頃あいついで築成されたことが分かる。

(4) 排水路敷設線に設けたトレント

第1トレント、第3トレント、第4トレント、第5トレントについては、第3トレントにおいて、遺物を含まない自然河川跡を検出した外は、遺物包含層も遺構も検出できなかった。

本報告においては、遺構の確認された第2トレント、第6トレント、第7トレントの遺構、遺物について述べてみたい。

第2トレント

第2トレントは、鏡山、塙木山の所在する小字「堂の内」から西隣の「上必入」にかけて、現況条里の一町方画の北辺部に設けられており、幅約1m、長さ約91mを測る。遺構面は地表面下50~60cmの地点に広がっている。

遺構は、耕作時のスキ痕、シケヌキの跡などと共に、現況の条里町界大畔の西側に隣接して、旧来の町界を区画したと思われる溝と畔が検出されている。

S E 001は、トレントのほぼ中央部にある井戸跡である。開口部は、ややひずんだ円型を呈し、直径は1.4m程度である。壁面は垂直に近い角度で掘込まれており、深さは60cmを測る。埋土は灰色シルト一層である。基底部からの涌水は著しく、地山は灰色砂礫土である。

S E 001は、浅い井戸であるが数多くの種類の遺物が出土している。以下述べてみると木器では、木製グワ(2本)、高床倉庫用いる階段(1段のみ残存)、土器では、弥生土器(壺、壺、鉢、器台、高杯)、石器では砥石、投弾³²が出土している。

第6トレント

第6トレントは、小字「東中々」の条里の一町方画の北辺部に沿って通っており、幅約1m、長さ約150mを測る。溝跡(S D 001)を検出部分については幅を2mに広げて拡張区としている。

トレントの北部(中々山の南隣を廻っている部分)では、地表下約50~60cmの遺構面でシケヌキ、土壤、ピットなどを検出しているが、各遺構から遺物は出土していない。しかし、トレント北部には、遺構面直上に薄い遺物包含層があり、奈良時代の須恵器杯身、土器器變、古墳時代の須恵器杯蓋が出土している。

溝S D 001については、調査区が狭いせいもあり全容がはっきりしないが遺構面は南方向へ傾斜しており全面的に遺物が分布している。特に遺物が多いのは、西半部で、土器溜りが10箇所程みられる。このことから、S D 001は、第6トレント拡張区を東北東方向から西南西方向へ横ぎっており、その岸に土器が堆積していたと考えられる。

出土遺物は、弥生土器(壺、壺、高杯、鉢など)が多量に出土している。

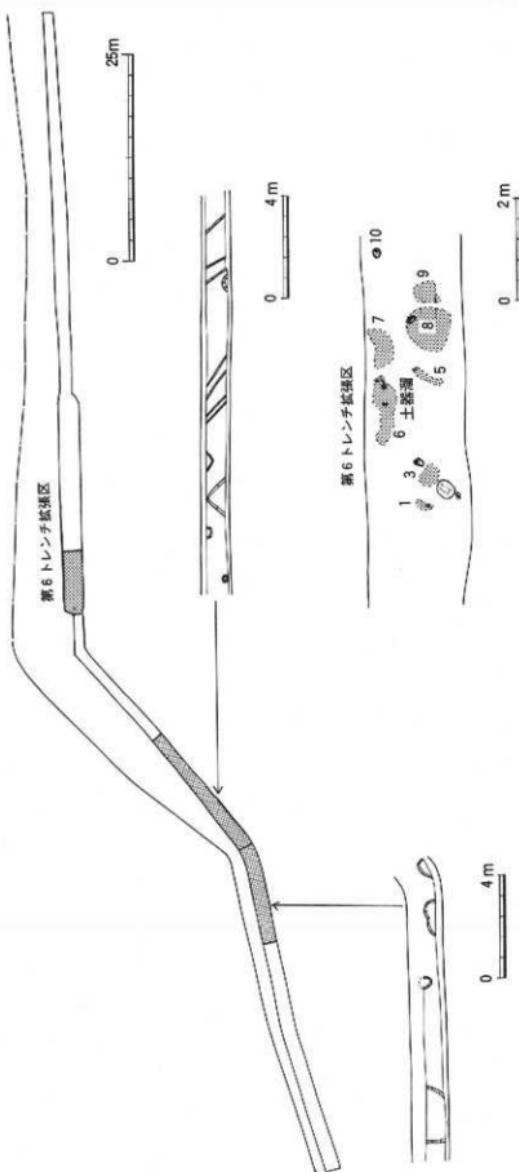
第7トレント

第7トレントは、第6トレントの東の延長上に位置する幅約2m、長さ約75mのトレントで小字(平塚前)の南辺に沿って設けられている。

トレントの北に隣接する高さ5m程の頂部の平坦な小丘陵が(平塚)で、加田西地区の墓地として、江戸時代から埋葬がつづいている。



第10図 進路位置図



第11図 遺跡全体図(第6トレンチ)

第7トレンチの遺構面は、地表下約50cmの地点に広がっている。

遺構は、畔痕、シケヌキ痕とともに、弥生土器が出る溝 S D 002が検出された。しかし S D 002の全容は、S D 001同様はっきりしないため、壁面の断面図をもとにして S D 002の規模を明らかにしたい。

北壁断面においては、トレンチ西端から東へ18mの地点において溝の東の肩がみられる。溝底は、西端で標高89.07m、東の肩では、89.40mであり、西から東へダラダラとのぼり勾配をとる。

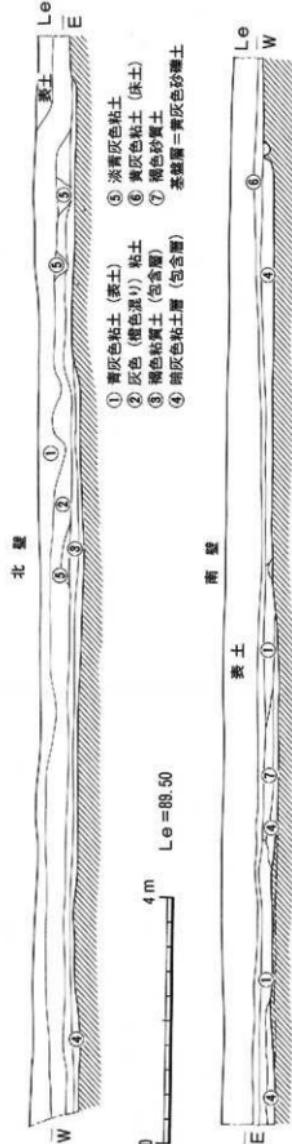
南壁においては、西端から東へ1.6mの地点で西の肩が現われている。

このことから、S D 002は、西北方向から南東方向へ流れる溝であることが分かる。

出土遺物は、弥生土器(壺、甕、器台、高杯など)が、S D 002全般から多量に出土するが、特に西端付近から集中的に出土している。

(5) トレンチ小結

S D 001と S D 002については、幅2mの細長いトレンチで検出したため、遺構の全容や流水の方向を十分



第12図 第7トレンチ河川土層断面図

把握することができなかった。

出土遺物については、S E 001出土のものは、土器、木器、石器とも残りがよく、土器の調整もよく分かるが、S D 001、S D 002出土土器は全体に磨耗著しく、調整のわりににくいものが多い。これは、S D 001、S D 002出土遺物が上流から流れ下って来たものが多いからである。

遺物のくわしい観察は「遺物観察表」にゆずり、遺構出土遺物については、主要なものをピックアップして述べてみたい。

S E 001

図版20-1（以下20-1と略）は、尾張系S字状口縁壺の中で最も古いタイプのものである。^⑦

他の壺（20-2、3、4）のうち（20-2、3）は口縁が「く」の字状に外反するもので（20-3）は外面が、叩き目と刷毛目。（20-4）は外面すべて叩き目が残る。

鉢類（20-9、10、11）はいずれも口縁端部が、外方に鈍い稜を残し、直立する形態のものである。

これら土器の年代は、上述の特徴から、弥生第V様式でも最も新しいもので庄内式土器の直前に位置するものである。^⑧

木器のうち、木製ワクは2例とも身部の上面に段をつけ、土がすぐいやさしいようにしている。

木製ハシゴは一段だけの出土であるが、階の部分に固く、使いべりしにいく「フシ」の部分をあてるなど、工夫がこらされている。

S D 001

S D 001の遺物については（22-42）のバレス壺の出土が目を引く、^⑨ 口縁内面と体部外面に赤彩されており、浅井和宏氏の分類によるC類にあたる。C類は、東海地方西部では、欠山期の土器に併行して現れる。

長頸壺22-41は、第V様式の最も新しい段階に見られるものである。

S D 002

器台、高杯、鉢類が多くS E 001、S D 002にあった「く」の字状口縁の壺が見られない。

鉢は、口縁端部外面と肩部外面に列点文を有するものであり、同じ弥生V様式の範疇の中で、S E 001やS D 001の土器より、やや時代の遅るものであると考えられる。

4. おわりに

金剛寺遺跡においては、2時期の造構が確認された。

弥生時代造構については、生活用具が多く出土したS D 001の周辺に住居跡のある可能性もあるが、今回は確認されなかった。

S D 001、S D 002出土遺物は、出土状況から考えて、上流である大辰巳、鴨山遺跡方面から流れ下って来たもので、溝の存在期間は、出土遺物が弥生V様式後末期に限定されることから、短期間であったと思われる。

塚については、10~11世紀の坂田郡条里の再構成を含めて、古代末期の山野開墾の波が加田の地に及ぶ中で築成されたものと思われる。

長浜平野には数多くの塚（小墳丘）が実在しているが、それらの年代を把握することは、古代、中世の宗教、経済史を研究するうえで重要なポイントとなろう。

註

- ① 「国道8号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書」（滋賀県教育委員会 1973）
- ② 角上寿行、田中勝弘『県管かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ 一長浜市金剛寺遺跡一』（滋賀県教育委員会 財団法人滋賀県文化財保護協会 1984）
- ③ 青木吉藏『神田古文化史』（長浜古文化協会 1953）
- ④ 田口昭二『美濃窯における白瓷と山茶碗』（美濃陶磁歴史館報Ⅱ 1983）
- ⑤ 横田洋三『平安京左京四条三坊十三町一長刀鉢町遺跡一』（平安京跡研究調査報告第11輯 財団法人古代学協会 1984）
- ⑥ 横田賢次郎、森田勉『大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—』（九州歴史資料館 研究論集4 1978. 4）
- ⑦ 赤塚次郎「S字甕について」（『欠山式土器とその前後』第3回東海埋蔵文化財研究会資料 1986）
- ⑧ 用田政晴、奈良後哉、古田秀則『県管かんがい排水事業関連遺跡調査報告書Ⅱ-3、一長浜市大辰巳遺跡一』（滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1985）
- ⑨ 浅井和宏「バレス壺について」（『欠山式土器とその前後』第3回東海埋蔵文化財研究会資料 1986）
- ⑩ ⑨と同じ

第1表 金剛寺遺跡出土土器観察表

器種種類	法 量	形 態 ・ 技 法 の 特 徴	色 調	胎 土 ・ 燒 成	備 考
弥生甕 20-1 13-1	口径18.8cm	口縁部ごく浅く凹むS字状口縁を呈する 体部外面は紙方にハケ目。五点の輪 指描を施す。口縁外面ヨコナデ。口縁内部 ヨコナデ。輪部本部コピによるタナデ	淡褐色	1mm前後の砂を多く含む 良好	第2トレ50m付近 SE001(上層) 860602
弥生甕 20-2	口径22.8cm	口縁部は「く」の字状に開く。端部の断面 は三角形。施釉部は外方へつまみ出して いる。窓部内面は強くヨコナデされる。 体部外面は板ナデ。体部内面ヨコナデ。口 縁部内面はヨコ方向に刷毛目が施される	外 灰黃褐色 内 淡褐色	1mm前後の砂を多く含む 良好	第2トレSE001 最下層 860611
弥生甕 20-3	口径21.4cm	口縁部は「く」の字状に開く。口縁部は 外方へつまみ出している。最大体部窓は は中央にもつ。体部窓下半部は紙方にハ ケ目。体部中央から上位まで左下りのタ タキ。口縁部は右下りのタタキ目。 内面体部は左上りのナデ。口縁部左下り窓 部は左方向のハケ目	褐色 外 スス多量に付着 内 スス半量に付着	1~2mmの砂を多く含む 良好	第2トレ SE001
弥生甕 20-4 13-2	底部径6.6cm	外面底部は右上りのタタキ。他はほぼ水平 なタタキ。内面底部は左上りのナデ。他 は上方へのハケ目。底部と体部は分割成形 し接合している	暗黃褐色 外 面 ス ス 付 着	1mm程度の砂含む 良好	第2トレSE001 860609
弥生小型甕 20-5	最大体部径 10.2cm	外面は左上りのヘラミガキ。内面はナデ	淡赤褐色 外 面 朱 を 施 さ れ た 型 跡 有	胎 土 に ク サ リ レ キ を 含 む 良 好	第2トレSE001 860604
土師器環 环部 20-6	口径27.0cm	口縁部は内面気泡に上外方へのびる。端部 は少し外へつまみ出す。内・外面はヘラミ ガキ。窓部内外面はヨコナデ	によく 褐色 外 面 黑 斑 有	1mm前後の砂粒を多く 含む やや軟	第2トレSE001 860609
弥生甕口縁 20-7	口径11.5cm	口縁部は上外方へのびる。端部は少し外へ つまみ出す。口縁部内面は上方へナデを施す。 窓部は刷毛目。内面はナデ	淡褐色	1mm前後の砂粒を多く 含む 良好	第2トレSE001 860609
弥生甕口縁 20-8	口径15.2cm	口縁部は上方へつまみ上げられ、内側す る長い面を有する。口縁内外面はヨコナデ 施す。窓部外面に刷毛目残す。外間にス ス付着	外 黑褐色 内 暗茶色	1mm前後の砂粒を多く 含む 良好	第2トレSE001 860609
土師器鉢 20-9	口径19.4cm	底部は丸形。口縁部は上外方へのび、端部 は上へ立ち上がり外側する長い面をなす。 外側体部はヘラナデ。内面はヨコナデ。口 縁内外面はヨコナデ	外 黒色 (ス付着) 内 焼 色 内面下部に炭化物付	1mm以上の砂粒を少し含む 良好	第2トレ SE001 860609
土師器鉢 20-10 13-5	口径17.6cm	口縁部内外面ともヨコナデ。体部内面はヨ コナデ。外面は斜方内の刷毛目。20-9よ りも体部が強っている	外 暗褐色 (ス付着) 内 褐色	1mm前後の砂を少し含む 良好	第2トレSE001 860609
弥生鉢 20-11	口径22.6cm	口縁内外面ヨコナデ。体部内外面ヨコナデ	外 暗褐色 (ス付着) 内 淡褐色	1mm程度の砂を多く含む 良好	第2トレSE001 860609
弥生底鉢 20-12	底部径6.0cm	外面は刷毛目。内面は板ナデ	外 スス付着 内 明褐色	1mm前後の砂多く含む 良好	第2トレ SE001 860609
弥生甕 20-13	底部径4.3cm	内面は不定方向の刷毛目。外面は成形時の 指痕を残す	外 淡赤褐色 内 茶褐色	1mm前後の砂粒を多く 含む 良好	第2トレ 51m付近 SE001(上層) 860528
弥生底鉢 20-14 13-7	底部径5.7cm	外面窓方向のハケ目。内面は放射状のナデ 底部外面は削って整えている	外 暗褐色 内 灰黃色	1mmの砂多く含む 良好	第2トレSE001 860609
つぶて 20-15 13-9	口径3.8~ 4.3	全体に風化している。砂岩底径約4cm	灰色		第2トレ450m付近 SE001上層 860602

器種等区分	法量	形態・技法の特徴	色調	胎土・焼成	備考
ト 石 20-16 13-8	全長10.3cm	使用度がみられる。粘土岩	緑灰色		第2トレSE001 860609
弥生高环 21-17 13-4	口径10.2cm 高 8.8	受部内面横方向のヘラミガキ、外面は板ナ ド、中 頭ヨコナデ、脚部内面は横方 向のヘラミガキ、下位は横方向のヘラミガ キ、脚部下位はやや内凹する	にふく淡褐色	1mm以下の砂粒少し含む 良好	第2トレSE001 860604
弥生高环 21-18 13-4	底径13.8cm	外面底部は横方向のミガキ。脚部は縦方向 のミガキ。内面は左方向の側毛目を施す。 脚部下位はやや内凹する	淡褐色	1mmの砂粒を少し含む 良好	第2トレSE001 860604
弥生高环 21-19		外面は縦方向のヘラミガキ。内面、シリ 目がみられるがヘラケズリでほとんど消え ている。脚部下端に外方から穿った3孔が ある。脚部外側に粗いハケ目を施し接合 を強化している	淡褐色	1mm前後の砂粒少し含む 良好	第2トレSE001 860609
弥生高环 21-20		脚部外面ハケのちヘラミガキ。内しぼり目 が残るがヘラケズリにより消されている。 外面はヘラミガキ。脚部下端に外方から穿 った3孔がある	外 墓灰褐色 内 明褐色	1mm以下砂粒少し含む 良好	第2トレSE001 860609
弥生高环 21-21		脚部外面は3回の単位で縦方向のヘラミガ キを施す。脚部下端に外方から3孔を穿つ	外面 暗茶色と暗褐色 内面 暗黄褐色	1mm以下の砂粒を含む 良好	第2トレ50m SE001付近 遺構表面に白色層
弥生脚部 21-22	底径17.0cm	脚部外面ヨコハケのちヘラミガキ。内面上 半部縦方向のヘラケズリ、下部ヨコハケ	外面 暗褐色(黒斑有り) 内面 淡褐色	1mm前後の砂粒を多く 含む 良好	第2トレSE001 底下端山頂上 860611
弥生高环脚部 21-23	口径18.2cm	环部外上位ヘラミガキ、下部ヨコナデ 内上部ヘラミガキのちヨコナデ、下部ヨコ ナデ。口縁端部は下方へ張り出す	淡灰色	1mm以下の砂粒を少し 含む。クサリレキを含む 良好	第2トレSE001 860609
白磁壺 21-24 13-6		ほぼ上方に立ち上る体部。内外面施釉、底 部は露胎	外面 粉白綠灰色 内面 にふく褐色	「す」が入っている 底部附近焼け	第2トレンチ 町界アゼ遺構面上 表様
上部高环 21-25 15-4	口径27.0cm	口縁内外面ヨコナデ。体部外表面形成時の押 き目の中から剥毛目を施す。内面はナデ	灰黄色	2mm位の砂を多く含む	第6トレンチ遺構面 860704 第1コナー
土師器环 21-26	口径18.0cm	外面ヨコナデ。内面には施文 口縁端部は上方へつまみ出す	赤褐色	白い砂を少し含む	第6トレンチ遺構面 860704 第1コナー
須恵器环壺 21-27 15-7	口径14.2cm	口縁部は外下方に向く。露胎内側は内傾す る面をもつ 天井部はナデ	青灰色	密 良好	第6トレンチ 860704 第6トレンチ遺構面
須恵器环身 21-28 15-8	口径13.5cm	はり付け高台 口縁部は少し外反する	内面 にふく橙色 外面 灰色	2mm位の砂少し含む 焼成不良やわらかく	第6トレンチ 860704 第6トレンチ遺構面
須恵器环身 21-29 15-10	高台径9.6cm	はり付け高台 高台はやや外に向く	青灰色 断面赤褐色	密 良好	第6トレンチ 860704 第6トレンチ遺構面
弥生壺 21-30	口径14.2cm	I 縫部を少し立ち上がらせる。口縁内外面 ヨコナデ。体部内外面は剥毛目を施した 後に列点の退化した割目をします	橙色 外表面スッペ	1mm大の砂少し含む 軟	860708 SD001
弥生鉢 21-31	口径16.1cm	-30と同タイプ	明褐色 外面スス付着	密 良好	第6トレ SD001 860708
弥生壺	口径17.8cm	口縁端部上方につまみ上げる。内面ナデ、	灰黃褐色 外面にスス付着	2mmの縫を含む	第6トレ

器種種別	法 量	形 態 ・ 技 法 の 特 徴	色 調	胎 土 ・ 焼 成	備 考
21-32 16-3		頭部に刷毛目施す。外面口縁ヨコナテ後列点文を刻す。体部刷毛目。体部外面上端に乱れた列点文を刻す。		全体に磨耗著しい	860708 SD001
弥生高环部 21-33	口径 25.0 cm	全体に磨耗	にふい 橙色	密 良好	第6トレ SD001最下層
弥生高环 21-34	口径 28.0 cm	全体に磨耗、剥離、風蝕有り	にふい 橙色	クサリレキを含む 良好	第7トレ SD002
弥生高环 21-35	口径 10.7 cm	全体に磨耗、少し外に開く裾部をもつ。上端に円孔を穿っている	淡褐色	密 良好	第6トレ 860708 SD001
弥生高环 21-36	脚径 13.0 cm	全体に磨耗、剥離少し内凹する裾部をもつ円孔を穿つ	にふい 橙色	くさり跡少し含む あまり	第6トレ 860704 SD001
弥生高环底部 21-37		体部内面ハケ、底部は円錐充てんにより仕上げる。外面ハケ。脚部内面ナデナデ	外 淡褐色 内 暗黄色	1mm前後の砂を多く含む 良好	第6トレ 860708 SD001
弥生高环 21-38	口径 10.6 cm	全体に磨耗、脚部はやや外に開く。中位よりやや上に3孔を穿つ	にふい 橙色	砂を多く含む 甘い	第6トレ 860708 SD001最下層
弥生高环 21-39	脚径 13.3 cm	全体に磨耗。外に大きく開く裾部。裾部部に深い凹面を有する。脚部境界部に三方から円孔を穿つ	明褐色	くさり跡、長石を含む	第6トレ SD001
弥生高环 21-40	脚部 13. cm	全体に磨耗、外に大きく開く裾部。裾部外側にミガキを一定程度残す。脚部境界部に三方から円孔を穿つ	灰褐色、ミガキ部分はにふい 橙色	1mm程度の砂粒を多く含む	第6トレ 860708 SD001
弥生壺 22-41 16-1	口径 9.0 cm 高 16.6 cm	体部は椭円形を呈す。口縁部は外方に開く。端部付近では少し内凹する。体部外表面はヨコ方向のラミガキ。脚部外表面は縦方向のヘラミガキ。底部内面はシゲ目、他はナデ	外に にふい 橙色 内面 暗黄色(口縁) 一部黒色(体)	1mm以下砂を少し含む 良好	SD001 第6トレ 860711
弥生壺 22-42 16-2	口径 8.6 cm 高 13.2 cm	底部圓錐状の平底を呈す。体部の最大径部は、中央よりやや下位にもつ。口縁部は少し外し、端部はより下方へ集中する。端部外面で3条の状線をめぐらす。底部内面には削突乳頭文。肩部には玉茎のクシ横文と列点文	にふい 黄褐色。外側体部(肩部以下) 内面口縁部失形(暗赤色)	1mm前後の砂を少し含む 良好	第6トレ SD001 860708
弥生壺 22-43	口径 14.0 cm	肩部に左上りの叩きを施す。内面はヨコハケのちナデ	赤褐色	不良	第6トレ最上層 860704 SD001
弥生壺 22-44	口径 13.0 cm	口縁部を上方へつまみ上げる。口縁部外表面は左上りの刷毛目、内面は横方向の刷毛目	にふい 黄褐色	2mm位の砂を含む 良好	第6トレ 860708 SD001
弥生壺 22-45	口径 16.0 cm	口縁部内面はナデによる凹部を有す。体部外表面に斜方向の刷毛目を有する	外 明褐色 内 暗黃灰色	1~2mmの砂粒を含む やや軟	第6トレ 860709 SD001
弥生壺 22-46	口径 12.8 cm	口縁部外表面はナデ。内面はヨコハケのちナデ	淡黃褐色	良好	第6トレ 860708 SD001
弥生壺 22-47	口径 12.2 cm	口縁部むらやかに外反する。端部内面に一条の状線をめぐらす。体部縁のち斜めのハケ目	にふい 赤褐色	1mm前後の砂を多く含む	第6トレ 860704

器種標記版	法 量	形 態・技 法の特 徴	色 調	胎 土・焼 成	備 考
弥生妻 22-48	口径 22.4 cm	口縁端部を上方へつまみ上げる。体部はヨコハケ及び列点文。内面はハケ目	暗褐色	1~2 mm 大の砂を多く含む	第6トレ 860708
弥生妻 22-49	口径 20.4 cm	口縁端部を上方へつまみ上げる。口縁内面ヨコナデ。腹部内面ヨコハケのヨコナデ、体部外面ヨコハケ、或形時の指圧痕残る。口縁端部内面に退化した列点文を刻む。腹部外側ナメハケ、肩部ヨコハケ、体部外側タテハケのち列点文を隠す	暗黄色	1~5 mm 大の砂を少し含む 良好	第6トレ 860708
弥生妻 22-50	口径 21.4 cm	口縁端部を上方へつまみ上げる。口縁内面ヨコハケ、口縁端部ヨコナデ、腹部周辺ナメハケ、肩部ヨコハケ、体部斜撲の上よりタテハケ、風化著しい	淡黄色	1~2 mm 大の砂を多く含む 良好	第6トレ 860708
弥生妻 22-51	口径 19.2 cm	くの字形に縁外側頸部付近タテハケを残す 体部内面不正方向のナデ	外 明褐色 内 灰褐色	1~2 mm 大のくさり 穂、長石を含む 良好	第6トレ 860708 SD001
弥生妻 22-52	口径 13.2 cm	I型端内側の沈線、I型内ヨコナデ、体部内不正方向のナデ。体部タテハケ、下方にヒリのハケ目	IC, I+II 黄褐色	1~2 mm 大の砂を多く含む	第6トレ 最上層 850703 SD001
弥生妻 22-53	I型 12.8 cm	くの字形口縁、口縁端部は下方に肥厚する 上縁はつまみ上げられる。口縁に刷毛目を施す。体部内側はナデ、外側ハケ	II+III 黄褐色 外表面ス付着	1~2 mm 大の砂を含む 良好	第6トレ 860708 SD001
弥生妻 22-54	口径 15.6 cm	くの字形口縁、口縁端部は下方に肥厚。 口縁外側内面刷毛目を施す	暗黄色 外表面ス付着	1~2 mm 大の砂を多く含む	第6トレ 860708 SD001
弥生妻 22-55	口径 16.6 cm	口縁端部下方に肥厚する。内外面に刷毛目を施す。体部上端内面は板方向にナデる	暗黄色 外表面ス付着	1~2 mm 大の砂を少し含む 良好	第6トレ 860708 SD001
弥生瓶 22-56	底径 4.4 cm	磨耗著しい。底部中央に1孔を穿つ	にぶい灰茶色 断面灰褐色		第6トレ 860708 SD001
弥生妻 22-57	底径 5.0 cm	内面ナデ、外面ハケのちナデ、磨耗著しい	内 灰褐色 外 灰黑色「スス」付着	くさり砂を含む	第6トレ 860708 SD001
弥生妻 22-58	底径 3.6 cm	外面ハケのち一部ナデ。内面板ナデ	暗黄色 外面に風塵有り	胎土良好 焼成軟	第6トレ 860708 SD001
弥生妻 22-59 16-5	底径 4.4 cm	内面ナデ、外面ハケ。底部IC1孔を穿つ	にぶい褐色 断面灰褐色	焼成は非常に良い	第6トレ 860708 SD001
弥生妻 22-60 16-9	底径 5.1 cm	外面ナデ、内面板ナデを施す	外 灰褐色 内 暗褐色	1 mm 大の砂を多く含む 良好	第6トレ 860708 SD001
弥生底部 23-61 16-7	底径 6.3 cm	底部外側に粘土ヒモ急上り痕有。外面に刷毛目残る。全体に磨耗著しい	外 淡褐色 斜面有り 内 こげ茶色	1 mm 大の砂を多く含む 良好	第6トレ 860708 SD001
弥生底部 23-62	底径 5.0 cm	外面刷毛目、内面板ナデ後ナデ	灰褐色	2 mm 位の砂を含む 良好	第6トレ 下層 860708 SD001
弥生底部 23-63	底径 2.7 cm	外面ハケのちナデ 内面ヨコハケのち放射状の刷毛目	外 にぶい褐色 内 灰褐色	良好	第6トレ 最下層 860708 SD001
弥生妻 23-64	底径 6.0 cm	体部外側ハケ目、内面ナデ 底部外側ヘラカズリ	にぶい黄褐色 外面風塵有り	1~2 mm 大の砂を少し含む 軟	第6トレ 860708 SD001

器種種別	法量	形態・技法の特徴	色調	胎土・焼成	備考
弥生型 23-65 13-8	底径 4.9 cm	外面タキ目模様内面ナデ調整	外 淡茶色 内 淡茶灰色	1mm砂を多く含む 良好	第6トレ 860708 SD001
弥生底部 23-66 18-1	底径 5.7 cm	外面ナデ、内面刷毛目	外 淡茶色 内 暗灰色	くさり砂を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生底部 23-67	底径 3.7 cm	底部外面指印痕あり	にぼい褐色	密 良好	第6トレ 最下層 860708 SD001
弥生型 23-68	底径 5.4 cm	底部と脚台は一緒につくり、円盤状を完成して仕上げる。底部内外面に刷毛目、脚部内面に指印痕ある	にぼい褐色	1~2mm砂を多く含む	第6トレ 860708 SD001
弥生型 23-69	底径 7.1 cm	脚台部と体部は一緒につくり、円盤状を完成して仕上げる。脚部内外面に刷毛目を施す	暗茶色	1mm砂を多く含む 良好	第6トレ 860708 SD001
弥生短筒型 23-70	口径 8.4 cm	口縁部外面ヨコナデ、肩部は内面脚台え、外面粗い刷毛日本体部内外面ナデ	暗黄褐色	1mm砂を少し含む 良好	第6トレ 860708 SD001
弥生短筒型 23-71	口径 17.1 cm	环帯部は大きく括り、口縁部は折曲げられ蓋下し、狹い前をつくる。外側に2条の沈線を刻む。内面は内側向外方にヘラミガキする内外とも磨耗著しい	にぼい褐色	密 良好	第7トレ SD002
弥生型 23-72	口径 24.6 cm	口縁部は折曲げられ蓋下し面につくる。外側に4条の凹線を刻む。口縁内面には小さな刺突孔による列点又はクシ傷を交換を使って、あやすき状の文脈を刻む。内面磨耗著しい	にぼい褐色	石英、蛭石を含む (1~2mm) 良好	第7トレ SD002
弥生長筒型 23-73	口径 6.8 cm	進部外面はぼい褐色ナデにより凹んでいる。外而縱方向のミガキ	外面にぼい褐色(丹塗り) 内面にぼい褐色 断面は黒灰色	密 良好	第7トレ SD002
弥生型 23-74	口径 17.7 cm	口縁部直徑に上口に厚壁。口縁部外面クシ抜き文、内面ヘラによる幾何文を刻む	にぼい褐色	緻密 良好	第7トレ SD002
弥生型 23-75		内面タケ方向のナデ、外而ナデのちねり	外而丹ぬい赤褐色 内面にぼい褐色	細砂を少し含む 良好	第7トレ 860718 SD002
弥生型 23-76	口径 8.9 cm	口縁部は上方につまみ出される。内外面ヨコナデ調整	灰黃白色	長石を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生底部 23-77	底径 4.4 cm	全体に磨耗、底部外面に指印痕が残る	にぼい褐色	2mm砂を含む 良好	第7トレ SD002
弥生底部 23-78 18-5	底径 5.0 cm	内面ハケ目を放射状に施す。外而ナデ調整	灰黃褐色	1~2mm砂を含む 良好	第7トレ SD002
弥生底部 23-79 18-4	底径 3.4 cm	底部外面に指印痕あり、内面ナデ調整	にぼい褐色	密 良好	第7トレ SD002
弥生底部 23-80 18-3	底径 6.0 cm	内面ナデ、外而ハケのちナデ、全体に磨耗著しい	外 にぼい褐色 内 黑灰色	密 良好	第7トレ SD002
弥生型 23-81	底径 3.8 cm	内面不均力のハケ、外而ハケのちナデ一部ハケを残す	褐色	密 良好	第7トレ SD002
弥生底部	底径 6.0 cm	内面墨書きに刷毛目を施す。外而磨耗	にぼい黄褐色	1~3mm砂を含む	第7トレ

器種・部位	法 量	形 態・技 法の特 徴	色 調	胎 土・焼 成	備 考
23-82				良好	SD002
弥生底部 23-83	底径 5.0cm	内面ナデ、外面一部ハケ目残る。全体に磨 耗著しい	外面褐色、内面にぶら黄褐色	密 良好	第7トレ SD002
弥生底部 23-84	底径 5.0cm	内外面共、磨耗著しい	にぶら褐色	5mm位の礫を少し含む 良好	第7トレ SD002
弥生底部 23-85 18-2	底径 5.0cm	全体に磨耗、一部に黒斑残る	にぶら褐色 一部黒色	くさり礫を含む 良好	第7トレ SD002
弥生底部 23-86	底径 3.0cm	底径は3.0cmと非常に小さい。内面に放射 状の刷毛目を残す	淡黃褐色	くさり礫を含む 良好	第7トレ SD002
弥生底部 23-87	底径 3.6cm	体部のタチアガリは非常に低い。体部下端 にヘラケズリされる	淡黃褐色	砂を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生底部 23-88	底径 8.2cm	外面不定方向のナデ、内面底部に指圧窓 れる	内面暗灰色、外表面色	1~8mmの小石を多く 含む 良好	第7トレ SD002
弥生舞台 23-89	底径 7.6cm	脚、体境界部は粗くユビナデされ凹凸がで きる。これは、円盤状跡を丸てる際、 接合の速度を高めるためである。脚部内面 にぶら成型跡が残る	にぶら赤褐色	2cmのレキ多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生舞台 23-90 18-12	底径 8.0cm	同 上	暗灰褐色	2cmまでのレキを含む 良好	第7トレ SD002
弥生舞台 23-91 18-11	底径 7.4cm	脚部内面斜面状ハケ体部内面板ナデ、外 面ハケのちナデ。脚、体境界部外面上に粘土 を触触して接合力を高めている	にぶら褐色	1~2mmの礫を含む 良好	第7トレ SD002
弥生舞台 23-92 18-16	底径 6.7cm	脚部内面は横方向の刷毛を引き出し、外 面は縦方向の刷毛	にぶら赤褐色	2mmの砂を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生舞台 23-93	底径 6.1cm	台面内面横方向のハケ、外面はナデ。体部 内面横方向の軽ナデ	外表面暗灰色 体部内面黒色	1~2mm程度の礫を含 む 良好	第7トレ SD002
弥生舞台 23-94 18-13	底径 7.5cm	ほぼ平坦な底部より脚部がはじめに外傾し 再び内傾する形で外方にやはり出している。 端部は丸くおさめる。外面ハケ、脚部内面 ナデ	淡褐色	くさり礫を含む 良好	第7トレ SD002
弥生舞台 23-95 18-14	底径 7.0cm	平坦な底部よりほぼ垂直に体部立ちあが る。脚部は若干外反きみに外方へなりだし 端部は地盤と平行となる。外、内面共に ナデ	にぶら灰褐色	1~2mm程度の砂を含 む 良好	第7トレ SD002
弥生舞台 23-96 18-15	底径 5.6cm	ほぼ平坦な底部より脚部がまっすぐ外方に なりだしている。端部は丸くおさめる 磨耗著しい	褐色	1~2mmの砂を多く含 む 良好	第7トレ SD002
弥生壺 24-97	口径 20.5cm	上端部はやや外反きみになめ上方にのび 下端に粘土をたして面をつくり、クシ併合 文、さざみ目を施す。内面ともにヘラミ ガキ	にぶら黄褐色	緻密 良好	第7トレ SD002
弥生高坏 24-98	口径 18.0cm	底部、脚部欠損、口縁はおぼしまっすぐな め上方にのび下端に粘土をたして大きく垂 下させ面をつくり、クシ併合文を施す。浮文を 付ける。全体に磨耗しているため不明	赤褐色	くさり砂を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生高坏 24-99	口径 17.1cm	底部、脚部欠損、口縁はやや外反きみにな め上方にのび下端に粘土は上下につまみだすた	淡赤褐色	密 良好	第7トレ SD002

器種種別	法量	形態・技法の特徴	色調	胎土・焼成	備考
		めにはぼ塗面をもち、クシ描文を施す内・外面ともにヘラミガキ	-	-	
弥生高环 24-100	口径18.5cm	底部、脚部欠損。口縁はほまっすぐなめ外方に立ちあがり端部は若干下方につまみだし、ほぼ塗面をもち。内部脚後尾ミガキ端部凹凸ミガキ、底面は左上りのハケ目	にぼい黄褐色	密 良好	第7トレ SD002
弥生高环 24-101	口径18.5cm	底部、脚部欠損。口縁はほまっすぐなめ上方に立ちあがり端部は下つてつまみだし、下方におじする形となっている。内・外面ともにヘラミガキ	赤褐色	密 良好	第7トレ SD002
弥生高环 24-102	口径18.3cm	底部、脚部欠損。口縁は大きく反してなめ上方に立ちあがり端部は下方を若干つまみだしにはぼ塗面をもち、クシ描文を施す	外面赤褐色(丹焼り) 内面にぼい橙色	砂が多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生高环 24-103	口径19.7cm	底部、脚部欠損。口縁はやや外反してなめ上方に立ちあがり端部は下方を若干つまみだしにはぼ塗面をもち。内・外面共にヘラミガキ	にぼい橙色	密 良好	第7トレ SD002
弥生高环 24-104	残高 3.2cm	环底部のみ残存中央部に円盤状跡を充てんでいる。底部下に開口し縦く破損の跡がある。底部内面に1cmに6本の割りあいでヨコ×タメ、外側はナゲのちナダ	にぼい明褐色	1~2mmの砂を含む 良好	第7トレ SD002
弥生高环 24-105	残高 3.4cm	底部のみ残存。厚めの円盤状跡を充てんでいる。全体に磨耗著しい	にぼい褐色	くさり砂を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生高环 24-106 18-8	脚部径 12.3cm	口縁部のみ残存。脚部はラッパ状に広がり端部は脚部内面で丸する。細部4箇所穿孔するが、うちの1つは位置がずれており埋めもどしている。脚部内面はナゲ、外側はヘラミガキ	にぼい黄褐色	密 良好	第7トレ SD002
弥生高环 24-107 19-4	口径26.0cm	口縁部のみ残存、内寄する脚部より、口縁は外反して立ちあがる。全体に磨耗しているため直観不明	黒灰色とにぼい赤褐色	細砂を多く含む 不良	第7トレ SD002
弥生高环 24-108	口径26.6cm	口縁部のみ残存、内寄きの体部よりやや外反してなめ上方に縦縫が立ちあがり端部は丸くおさめる。全体的に磨耗しているため直観等は不明	乳白色	1~2mm位のくさり砂 細砂を多く含む	第7トレ SD002
弥生高环 24-109	口径26.5cm	口縁部のみ残存、口縁は体部よりほぼ直線的に外方へのびる。端部内側に若干つまみだしている。全体的に磨耗しているため直観等は不明	淡い赤褐色	長石を含む 良好	第7トレ SD002
弥生器台 24-110 17-5	口径19.8cm 器高 5.8cm 脚部径 11.4cm	脚台は長い平錐状で脚部はやや内寄してある。受け部は接合部よりほまっすぐにどの隙間に丸くおさめる。受け部内面はナゲ、脚部C3ヶ所のすかし孔あり、脚部内面に逆立方向のハケ目	内面 明褐色 外側 桃褐色	2mmまでのくさり砂、 長石を多く含む	第6トレ SD002
弥生高环 24-111 18-9		环底部・脚柱部のみ残存、环底部は円盤状の栓を充てんでいる。脚柱は若干細めではほぼ直線に下がり幅はラッパ状に広がる。环底部・外側脚部外側にヘラミガキ、脚部内面ナゲ	にぼい褐色	密 良好	第7トレ SD002
弥生高环 24-112		底部・脚柱部のみ残存。环底部は円盤状栓により充てんされる。脚柱はなめ外方にまっすぐのびる全般的に磨耗しているため直観等は不明	褐色	長石を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生高环 24-113		底部・脚柱部のみ残存。ほぼ直線に下方へのびる脚柱よりほぼ直角に外反して体部が立ちあがる。底部は平坦で円盤状栓を充てんする	にぼい黄灰色	密 良好	第7トレ SD002

器種種類区分版	法 量	形 態・技 法の特 徴	色 調	胎 上・焼 成	備 考
弥生高环 24-114		脚柱部のみ残存。平坦な底部よりなめ外方に脚柱がほさまっすぐ伸びて広がる。脚柱内面にしまり目あり外面上に脚座斑があるが全体的に磨滅が著しくその他は不明。	淡褐色	密不良	第7トレ SD002
弥生高环 24-115		脚柱部のみ残存。平坦な底部よりほぼ直に脚柱がひくび幅間はへの字状に広がり先端に近づくほど端手になる。全体的に磨滅しているための文様等は不明。脚内部にシボリ目のある。	褐色	2mm位の砂を含むやや不良	第7トレ SD002
弥生高环 24-116		脚台の一端のみ残存(ほぼ直)に下方へのびる脚柱よし。脚部かしらの片穴に広がる。粘土を二重巻として太くしている。脚部外面上一部ハケ目、他は磨滅のため不明。	淡褐色	細い砂を含む良好	第7トレ SD002
弥生高环 24-117		底部・脚柱部のみ残存。ほぼ平行な底面よりやや外反するに脚柱がなめ外方にはりだしている。接合部外面上に粘土を補強している。脚部外面上の一部にヘラミガキ痕がある。全体に磨耗著しい。	灰褐色	砂を多く含む良好	第7トレ SD002
弥生高环 24-118	底径 12.0cm	脚台部のみ残存。縦に向かってやや外反するにハコ穴(ひらき)脚部はつぶみ出して丸くおさめる。外表面はタテ方向のヘラミガキ、内面はハケのちナダ	淡褐色	くさり礫を多く含む良好	第7トレ SD002
弥生高环 24-119	残高 7.3cm	脚台の一端のみ残存。脚柱から脚部に向かってだらんに外反していく。内面は脚柱部はわりと厚く板に向かうほどどうするかなる外表面ヘラミガキ、内面はナダ	淡灰褐色	密良好	第7トレ SD002
弥生高环 24-120	残高 9.9cm	底端・脚台の一端のみ残存。脚柱部はほぼ直に下方へのび、裾がひくび幅間に広がる。脚柱は脚柱よりなめ前方にまっすぐのびる。脚柱部内面にシボリ目残る。外表面ヘラミガキ、内面ヨコハケ	淡灰褐色	密良好	第7トレ SD002
弥生高环 24-121		脚柱部はへの字に開く、脚柱部前面にシボリ目残す。外表面ヘラミガキ、内面脚部底面はミガキと思われる。脚部前面はナダ内面脚部にナナメハケ目、残存部下位に円孔3箇所を穿つ	にじむ褐色	2mm位の砂を多く含む良好	第7トレ SD002
弥生高环 24-122		脚柱部が円筒形で横部はへの字に開く。脚柱部外面上はミガキ、環部内面はミガキ残存部下位に3箇所孔を穿つ	淡褐色	緻密良好	第7トレ SD002
弥生高环 24-123		脚柱部が円筒形、脚柱部外面はヘラミガキ内面はナダ、残存部下位に三方向に円孔を穿つ	にじむ褐色	緻密良好	第7トレ SD002
弥生高环 24-124	底径 14.8cm	脚部はへの字に開く。外表面磨滅を繰り返すがミガキの痕有り。内面ハケ目、残存部上位に円孔を穿つ	淡褐色	密良好	第7トレ SD002
高环 24-125	脚部径 16.2cm	脚部はへの字に開き、中位で段をつけて大きく開く。外表面たて方向のミガキ、内面はナダ、脚部上位に円孔を穿つ	にじむ赤褐色・部灰褐色(裏面)	くさり礫を多く含む良好	第7トレ SD002
弥生壺 25-128	口径(推) 15.5cm	L型は外方に開き、喉部は真上につまみ上げ丸くおさめる。肩部から口縁部にかけて「く」の字状に組出する。口縁部外面上に列点文を施す。全面ナダ	灰褐色	砂を多く含む良好	第7トレ SD002
弥生壺 25-129	口径(推) 14.9cm	口縁は外方に開き、喉部は真上につまみ上げ丸くおさめる。外縁面に列点文あり、肩部にクシ彫文。その下方に列点文もある。他内外面ナダ	明褐色	くさり礫、長石を多く含む良好	第7トレ SD002
弥生壺 25-130	口径(推) 17.6cm	肩部から口縁部にかけてくの字状に弧曲し、口縁は外方に開き、喉部は真上につまみ上げる外縁面に列点文の退化した刻み目あり肩部に6、7条のくし引き直線文、その下	黄褐色	くさり礫、長石を多く含む良好	第7トレ SD002

器種類別	法量	形態・技法の特徴	色調	胎土・焼成	備考
		方に列点文の退化した跡み目がある。他内外面共ナデ			SD002
弥生型 25-131	口径15.0cm	口縁部は外窓にひびく。端部は上方へつまみ出す			
弥生型 25-132	口径18.0cm	口縁部は「く」の字状に開き、端部付近で少し下方へ立ち上がる。口縁部端部内面に列点文を施す。肩部にクシ彫文があり、その下端に接して列点文があり	におい褐色 外面一部にスス付着	くさり繩、長石を含む やや粗い 良好	SD002
弥生型 25-133	口径19.5cm	肩部から口縁部にかけて、くの字にS曲し 口縁部は外窓に開き、端部は外傾した面をもって丸くおさめる。外面にすす付着。口縁部に列点文、肩部にクシ彫文、その下方に列点文がある。他全面ナデ	明褐色	くさり繩、長石を多く 含む 良好	第7トレ SD002
弥生型 25-134 19-1	口径16.5cm	肩部から口縁部にかけて、くの字にS曲し 口縁部は外窓に開き、端部は直上につまみださ れ丸くおさめる。外面には列点文、肩部にクシ彫文、その下方に列点文がある。他全面ナデ	におい褐色	くさり繩を含む 良好	第7トレ SD002
弥生型 25-135 19-3	口径19.1cm	肩部から口縁部にかけて、くの字にS曲し 口縁部は外窓に開き、端部は直上につまみださ れ丸くおさめる。口縁部外面に列点文有。 肩部にクシ彫文、その下方に列点文を 刻む。他全面ナデ	明褐色	くさり繩を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生型 25-136 17-9	口径16.8cm	口縁部と肩部一部のみ残存。肩部より口縁に かけて大きく外反し、それに応じて内腹 になる。端部は少しにつまみあげる。口 縁部外面に列点目有。肩部ハケのちナデ、 他全面ナデ	におい黄褐色	くさり繩、長石2mm位 のものを多く含む	第7トレ SD002
弥生型 25-137	口径19.5cm	口縁部と肩部の一部のみ残存。肩部より口縁に かけて大きく外反し、それに応じて内腹 になる。端部は少しにつまみあげる。口 縁部外面に列点目有。肩部ハケのちナデ、 他全面ナデ	灰褐色	1~2mmの繩を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生型 25-138 17-9	口径16.7cm	口縁部と肩部のみ残存。肩部より口縁で外 反しに腰がたちあがり、端部は上方につま みあげる形で内腹して丸くおさめる。 口縁部外面に列点目有。肩部外面に板ナデ の痕有	灰褐色	2mm位の繩を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生型 25-139	口径16.1cm	口縁部と肩部のみ残存。肩部よりくの字形 にまで口縁に開き、端部は上方につま みあげる形で丸くおさめる。口縁部外面に に、におい列点目有。肩部クシ彫文、他全面 ナデ	淡褐色 外面にスス付着	くさり繩を含む 良好	第7トレ SD002
弥生型 25-140 19-2	口径12.9cm	口縁部と肩部のみ残存。肩部よりくの字形 にまで口縁に開き、端部は上方につま みあげる形で丸くおさめる。口縁部外面に に、におい列点目有。肩部クシ彫文、他全面 ナデ	におい褐色	長石を含む 良好	第7トレ SD002
弥生型 25-141	口径20.7cm	口縁は短く外反し、口縁部は外につまみだした ため外傾する凹面をもつ。口縁外面ナデ。 底部内面ハケ目。内面ナデ	におい黄褐色	くさり繩を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生型 25-142	口径17.3cm	口縁は外に開き、端部は上方へ折り曲げら れる。内外面ナデ	淡黃褐色	くさり繩、長石を多く 含む 良好	第7トレ SD002
弥生型 25-143	口径16.9cm	口縁は外に開き、端部は上方へ折り曲げら れる。内面にヨコハケ目、端部内面 はヨコナデ	におい褐色	砂粒を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生型 25-144	口径15.9cm	口縁は外に開き、端部は上方へ折り曲げ、 上端は内傾する凹面をつくる。内外面ナデ 調整	褐色 外面にスス付着	くさり繩、長石を含む 良好	第7トレ SD002

器種判別番	法量	形態・技法の特徴	色調	胎土・焼成	備考
弥生壺 25-145	口径 17.7 cm	口縁は外に開き、端部は上方につまみ上げる。端部外面に列点文を刻む。外面にすす付着。内外面ナガ調整	灰褐色	くさり跡、長石を含む 良好	第7トレ SD002
弥生壺 25-146	口径 16.4 cm	口縁は外に開き、端部は上方につまみ上げ外傾する面をつくる。肩部前面に粘土巻き上げあり。内外面ナガ調整	にぶい橙色	くさり跡を含む 良好	第7トレ SD002
弥生壺 25-147	口径 15.2 cm	口縁は外に開き、端部は上方につまみ上げし、外傾する面をつくる。口縁外面に刻目を施す。内外面ナガ	淡黄褐色 外面にスス付着	砂を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生壺 25-148	口径 16.8 cm	口縁は外に開き、端部は上方へ折り曲げ、上端に平坦な面をもつ。端部外面に刻目有 内外面ナガ	淡黄褐色	1~2 mmの砂を含む 良好	第7トレ SD002
弥生壺 25-149	口径 16.6 cm	口縁はゆるく内凹し、端部は丸くおさめる。 内外面ナガ	にぶい橙色	砂を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生壺 25-150	口径 16.6 cm	口縁は張をもって上方へ外反し、端部は丸 くおさめる。口縁外面に内ヶ文を施し、 端部外面はヨコナガ。内ヶへの後ナガ	黄褐色	1~2 mmの砂を多く含 む 良好	第7トレ SD002
弥生壺 25-151 19-8	頸部径 13.4 cm	器壁は厚く。頸部ですばまっており、胎線 文に竹青文が組み合されて施文される	にぶい灰褐色	5 mm位の石を刻む 良好	第7トレ SD002
弥生壺 25-152 19-9	口径 13.5 cm	二重口縁。上方部のみ残存。口縁は外上方 に伸び、端部に内方につまみ上げ外傾する 面をつくる。内面はナガ、外面はミガキ、 上縁下部に竹青文あり	黄褐色	緻密 良好	第7トレ SD002
弥生壺 25-153 19-6	口径 13.2 cm	口縁は肩部からくの字状に屈曲し端部は張 をもって直ぐ外反しながら立ち上がる。端 部は丸くおさめる。体部前面に指印痕あり 内外面ナガ調整	橙色	緻密 良好	第7トレ SD002
弥生壺 25-154	口径 11.7 cm	口縁は上方で強く屈曲し、水平に伸びる。 端部は下方へ丸めこむ。内外面ナガ	にぶい橙色	1 mmの砂を含む 良好	第7トレ SD002
弥生壺 25-155	口径 13.8 cm	二重口縁、器壁は厚い。口縁はゆるく外 反し、端部が外傾する面をもつ。内外面磨 耗著しく調整不良	淡褐色	くさり跡を含む 良好	第7トレ SD002
弥生壺 25-156	口径 14.0 cm	肩部からくの字状に屈曲し、端部はやや内 凹ぎみに上方に折り曲げられ、端に水平の 面をもつ。外面に列点文、肩部外面にクシ 括き直線文を刻む。体部前面に網毛目の痕 有り	淡褐色	緻密 良好	第7トレ SD002
弥生壺 25-157 17-8	口径 14.0 cm	口縁は弱く外反しながら伸びる。端部は下 方外へつみ出され外傾する面をつくる。 端部外面に列点文あり。他はヨコナガ調整	黄褐色	くさり跡、長石を含む 良好	第7トレ SD002
弥生壺 25-158	口径 14.3 cm	口縁は弱く外反しながら伸びる。端部は下 方へつみ出され外傾する面をつくる。 端部外面に列点文。頸部外面にくし括き直 線文を刻む	にぶい黄褐色	1~2 mmの砂多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生壺 25-159	口径 15.0 cm	口縁は弱く外反しながら伸びる。端部に外 傾する面をもつ。内外面ナガ	にぶい黄褐色	くさり跡を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生壺 25-160	口径 13.4 cm	口縁はくの字状に屈曲し、端部は上方に折 り曲げられ、外側に面をつくる。端部外面に 退化した列点文を刻む。内外面ナガ	灰褐色	1~2 mm位の砂を含む 良好	第7トレ SD002
弥生壺 26-161 17-7	口径 17.2 cm	肩部はゆるく内凹し、口縁はわずかに内凹 ぎみに伸び。端部は上方に折り曲げられ、上 端に狭く頭をもつ。1 縦端部前面に退化し た列点文有り。肩部にクシ彫文その下方に 退化した列点文有り。体部内面ヨコハケ、	淡黄褐色	1~2 mm大の砂粒を多 く含む やや軟質	第7トレ 860717 SD002

器種類型版	法 量	形 態・技 法 の 特 徴	色 調	胎 土・燒 成	備 考
		口縁内外面ヨコナデ			
弥生茎 26-162	口径 18.8 cm	口縁は外に開き、端部外下方につまみ出され、外傾する側面をつくる。内面はハケのちナデ、外面ナデ	にぼい 橙色	1~2 mmの砂を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生茎 26-163	口径 21.7 cm	口縁は外に反し、端部は丸くおさめる。内外面ヨコナデ。全体に磨耗著しい	淡黄褐色	くさり跡を含む 良好	第7トレ SD002
弥生茎 26-164 17-4	口径 13.7 cm	肩部の張りは弱く、口縁は外に開き、端部は丸くおさめる。口縁外外面ナデ、底面部上面に凹凸目、下位ハケ後ナデ、外面敵密なラミガキ	外面 淡褐色 内面 黒灰色	くさり跡を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生茎 26-165	口径 21.2 cm	口縁は外に開き、端部は外下方につまみ出し、外傾する凹面をつくる。口縁外端面に刻目有り。内端面に指圧痕あり。外面はハケ目、内面ナデ	にぼい 橙色	2 mmの石を少量含む 良好	第7トレ SD002
弥生手捻土器 26-166	最大体口径 20.6 cm	張りの強い屈曲をもち、2条の尖唇をつけその部位に刻文を刻む	灰褐色	鐵需 良好	第7トレ SD002
土器器皿 26-167 12-9 667-192	口径 8.9 cm 器高 1.15 cm	口縁は内窓しつつ、外上方に伸びる。端部は丸くおさめる。口縁外外面はヨコナデ、底面部外面は指圧およびナデ消し、底面部内面はヨコナデ	淡褐色	南 くさり跡含む 良好	土器皿 860614 鐵需埋納土器
土器器皿 26-168	口径 9.0 cm 器高 1.35 cm	底部は平坦にのび、口縁は内窓しながら外上方に伸びる。端部は丸くおさめる。口縁内外面はヨコナデ、底面部内面は指圧およびナデ消し、底面部内面はヨコナデ	淡褐色	密 良好	土器皿 860614 鐵需埋納土器
土器器皿 26-169	口径 9.3 cm 器高 1.35 cm	底部は少しに向かって上がり気味に伸びる口縁は内窓しながら外上方に伸びる。端部は丸くおさめる。口縁外外面はナデ、底面部内面は指圧およびナデ消し、底面部内面はヨコナデ	淡黄褐色	街 くさり跡含む 良好	土器皿 860614 鐵需埋納土器
土器器皿 26-170	口径 9.1 cm 器高 1.2 cm	口縁は内窓しながら外上方に伸びる。端部は丸くおさめる。口縁外外面はナデ、底面部内面は指圧およびナデ消し、底面部内面はヨコナデ	にぼい 橙色	南 良好	土器皿 860614 鐵需埋納土器
土器器皿 26-171	口径 9.6 cm 器高 1.6 cm	底部は平坦で、中央が上がっている。口縁は内窓ぎみにのびる。端部は丸くおさめる。口縁外外面はヨコナデ、底面部内面は指圧およびナデ消し、底面部内面はヨコナデ	淡灰褐色	密 良好	土器皿 860614 鐵需埋納土器
土器器皿 26-172	口径 9.35 cm 器高 1.8 cm	底部は平坦にのび、口縁は内窓ぎみにのびる。端部は丸くおさめる。外面底面部指圧痕およびナデ消し、口縁外外面はヨコナデ、内面調整不鮮	淡褐色	南 良好	860619 鐵需埋納土器
土器器皿 26-173	口径 9.2 cm 器高 1.67 cm	口縁は内窓ぎみにのびる。強いナデのため凸凹が生ずる。口縁外外面はヨコナデ、外面底面部は指圧痕およびナデ消し、内面ナデ	淡灰褐色	密 良好	土器皿 860619 鐵需埋納土器
土器器皿 26-174	口径 9.4 cm 器高 1.6 cm	底部は中央に向かって上がりぎみに伸びる口縁は内窓しながら外上方に伸びる。端部は丸くおさめる。口縁外外面はヨコナデ、底面部内面は指圧およびナデ消し、底面部内面はヨコナデ	淡灰褐色	密 良好	土器皿 860614 鐵需埋納土器
土器器皿 26-175	口径 8.6 cm 器高 1.32 cm	底部はやや外反し、口縁は内窓しながら外上方に伸びる。端部は丸くおさめる。口縁外外面はヨコナデ、底面部内面は指圧およびナデ消し、底面部内面はヨコナデ	淡褐色	密 良好	土器皿 860614 鐵需埋納土器
土器器皿 26-176	口径 9.5 cm 器高 1.73 cm	底部は強いナデのため凸凹が生ずる。口縁は内窓ぎみに外上方に伸びる。口縁外外面はナデ、底面部内面は指圧およびナデ消し、内面調整不鮮	にぼい 橙色	南 良好	土器皿 860614 鐵需埋納土器

土器種類	法量	形態・技法の特徴	色調	胎土・焼成	備考
土師器皿 26-177	口径 9.8 cm 器高 1.52 cm	口縁は内窩ぎみに外上方に伸びる。端部は丸くおさめる。口縁内外面はヨコナデ、底部外面は指圧およびナデ消し、底部内面乱ナデ	淡橙色	密 良好	土器皿 860614 鏡形理納土器
土師器皿 26-178	口径 9.7 cm 器高 1.5 cm	底盤は中央に向かって上がりぎみに伸びる。口縁は内窩ぎみに外上方に伸びる。端部は丸くおさめる。口縁内外面はヨコナデ、底部外面は指圧およびナデ消し、底部内面ナデ	淡橙色	密 良好	土器皿 860614 鏡形理納土器
土師器皿 26-179	口径 9.8 cm 器高 1.5 cm	底部は平坦から外反窩ぎみに伸びる。口縁は外方に開く。端部は丸くおさめる。口縁内外面はヨコナデ、底部外面は指圧およびナデ消し、底部内面不詳	淡橙色	密 良好	土器皿 860614 鏡形理納土器
土師器皿 26-180	口径 9.2 cm 器高 1.6 cm	底盤は平坦で、口縁は内窩ぎみに外上方に伸びる。端部は丸くおさめる。口縁内外面はヨコナデ、底部外面は指圧およびナデ消し、底部内面不詳	にじむり 橙色	密 良好	土器皿 860614 鏡形理納土器
土師器皿 26-181	口径 10.3 cm 器高 1.28 cm	口縁は内窩ぎみに外上方に伸びる。端部は丸くおさめる。口縁内外面はヨコナデ、底部外面は指圧およびナデ消し、内面乱ナデ	淡橙色	密 良好	土器皿 860614 鏡形理納土器
土師器皿 26-182	口径 11.2 cm 器高 1.5 cm	底盤は平坦で、口縁は内窩ぎみに外上方に伸びる。端部は丸くおさめる。口縁内外面はヨコナデ、底部外面は指圧およびナデ消し、内面乱ナデ	淡橙色	密 良好	土器皿 860614 鏡形理納土器
土師器皿 26-183	口径 10.2 cm 器高 1.2 cm	口縁は内窩ぎみに外上方に伸びる。端部は外傾する面をもつ。口縁内外面ヨコナデ	にじむり 橙色	密 良好	土器皿 860614 鏡形理納土器
土師器皿 26-184	口径 9.4 cm 器高 1.55 cm	口縁は内窩ぎみに外上方に伸びる。端部は丸くおさめる。口縁内外面ヨコナデ	橙色	密 良好	土器皿 860614 鏡形理納土器
土師器皿 26-185	口径 9.8 cm 器高 1.3 cm	口縁は内窩ぎみに外上方に伸びる。端部は丸くおさめる。口縁内外面ヨコナデ	黄橙色	密 良好	土器皿 860614 鏡形理納土器
土師器皿 26-186	口径 10.4 cm 器高 1.4 cm	口縁は内窩ぎみに外上方に伸びる。端部は丸くおさめる。口縁内外面ヨコナデ	淡橙色	密 良好	土器皿 860614 鏡形理納土器
土師器皿 26-187	口径 10.3 cm 器高 1.85 cm	底盤は中央に向かって上がりぎみに伸びる。口縁は内窩ぎみに外上方に伸びる。端部は丸くおさめる。口縁内外面はヨコナデ、底部指圧食およびナデ消し、内面乱ナデ	淡橙色	密 良好	土器皿 860614 鏡形理納土器
土師器皿 26-188	口径 11.2 cm 器高 1.98 cm	底盤は平坦で、口縁は内窩ぎみに外上方に伸びる。端部は丸くおさめる。口縁内外面はヨコナデ、底部指圧食およびナデ消し、内面乱ナデ	淡橙色	密 良好	土器皿 860614 鏡形理納土器
土師器皿 26-189	口径 11.7 cm 器高 1.9 cm	口縁は内窩ぎみに外上方に伸び、端部は丸くおさめる。口縁内外面ナデ	淡橙色	密 良好	土器皿 860614 鏡形理納土器
土師器皿 26-190	口径 12.8 cm 器高 2.55 cm	口縁は内窩ぎみに外上方に伸びる。端部は丸くおさめる。口縁内外面ナデ	にじむり 橙色	密 良好	土器皿 860614 鏡形理納土器
土師器皿 26-191	口径 14.8 cm 器高 1.55 cm	底部は平坦であり、口縁は内窓しながら外上方に伸びる。端部は丸くおさめる。口縁内外面はナデ、底部外面は指圧およびナデ消	淡橙色	密 良好	土器皿 鏡形理納土器

器種等記述版	法 量	形 態・技 法 の 特 徴	色 調	胎 土・焼 成	備 考
		し、内面調整不詳			
土師器皿 26-192	口径 16.8 cm 器高 2.6 cm	底部は平坦であり、口縁は内湾しながら外上方にのびる。端部は丸くおさめる。口縁はまっすぐ外上方にのびる。口縁外面はナデ、底部外面は指圧、およびナデ消し、内面調整不詳	におい褐色	密 良好	土器皿 鉛灰陶土十素
山茶碗 26-193 12-4	高台径 7.5 cm 高台高 0.6 cm	底部は中央にむかって上がり気味にのび、高台は逆台形で、貼付けである。重ね焼きのあと有り、内面に自然釉がかかるている	淡灰色	密 良好	南トレンチ 鉛灰封土 ②
山茶碗 26-194 12-1	高台径 7.5 cm 高台高 0.68 cm	底部は平坦であり外周に断面逆三角形の高台が乳突している。高台内に糸切痕有。見込みにナデ調整痕有り。疊付にモミ痕有り	黄灰色	密(縫を含む) 良好	鉛灰封土
山茶碗 26-195 12-2	高台径 8.6 cm 高台高 0.5 cm	底部はやや中央に向かって下がり気味にのびており外周に断面逆三角形の高台が貼付している。高台内に糸切痕有	黄灰色	密 良好	鉛灰封土
山茶碗 26-196 12-6	高台径 8.3 cm 高台高 0.5 cm	底部は中央にむかって下がり気味にのび外周に断面逆三角形の高台が貼付している。高台内に糸切痕有	淡灰色	密 良好	鉛灰封土
山茶碗 26-197 12-5	高台径 7.6 cm 高台高 0.5 cm	底部は平坦である外周に断面逆三角形の高台がはりついている。口縁は内湾気味にのびる。高台内はナデ調整。疊付にモミガラの痕を残す	淡灰色	密 良好	南トレンチ ① 鉛灰封土
山茶碗 26-198 12-7	高台径 9.6 cm 高台高 0.6 cm	底部はやや中央に向かって下がり気味にのび外周に断面逆三角形の高台が貼付している。高台内に糸切痕有	黄灰色	密 良好	鉛灰封土
土師質灰器 26-199 15-9	底面部 6.2 cm	底部は平坦であり外側は垂直に切り立ってから底部が外上方にまっすぐのびる	淡褐色	粗(砂縫を多量に含む) 良好	塗灰山南トレンチ高 ④
山茶碗 (小皿) 26-200 15-6	口縁 8.4 cm 器高 2.6 cm 底部径 5.2 cm	底部は中央にむかってやや上がり気味にのびており大きくなり反した底部より外反して口縁が立ちあがる。端部は丸くおさめる	灰色	密 良好	塗木塚封土
山茶碗 26-201 15-12	高台径 (推) 8.2 cm 高台高 0.6 cm	底部は平坦であり断面逆三角形の高台が外周に貼付している。疊付にモミ痕有	灰色	密 良好	塗木塚封土
陶器 鉢 26-202 12-8	瓶高 5.6 cm	まっすぐに外上方にのびた底部より水平に段がつきそれより縁が内湾気味にのび、端部は丸くおさめる。内外面に泥をかける。底面・美濃窓	内外面 茶褐色 断面 灰色	密(2 mmの縫を含む) モグサ土 良好	埴須部 鉛灰封土
土師質器皿 26-203	底面部 5.0 cm	底部は平坦でありそれから底部から外上方向へまっすぐに立ちあがる	橙色	粗(5.0 mmまでの砂縫を多量に含む) 良好	埴木塚封土
白磁碗 26-204 15-5	瓶高 2.7 cm	口縁はまっすぐにのび端部はヘラ削りによる玉縁成形となっている	蝶灰色 輪-白色 素地-淡灰色	密	塗木塚第2層 上面 タタキ面 216
木製クワ 27-205	柄 4.8.5 cm 網幅 3.4 cm	身部分に段を有する			SE 001
木製クワ 27-206	柄 4.5 cm 網幅 4.0 cm	身部分に段を有する			SE 001
木製ハシゴ 27-207		一段のみ残存している			SE 001

図 版



試掘調査風景（西より）



世継の集落と遺跡全景（東より）



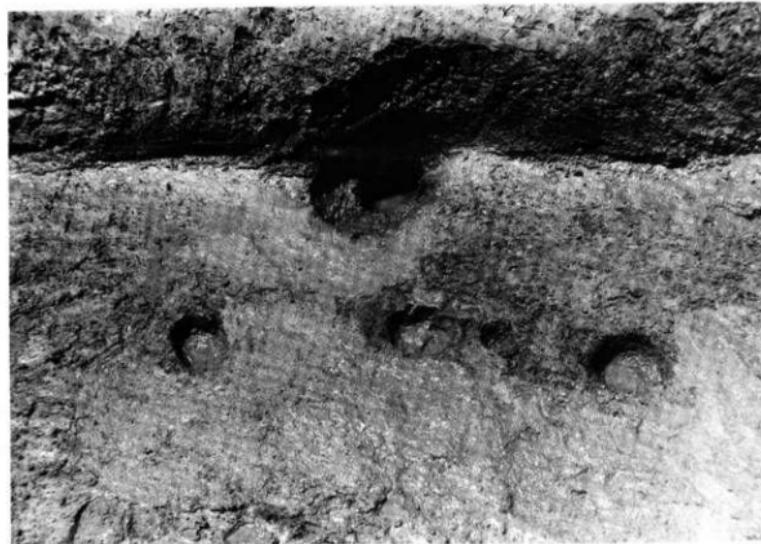
筑摩神社並七ヶ寺繪圖（筑摩神社所蔵）



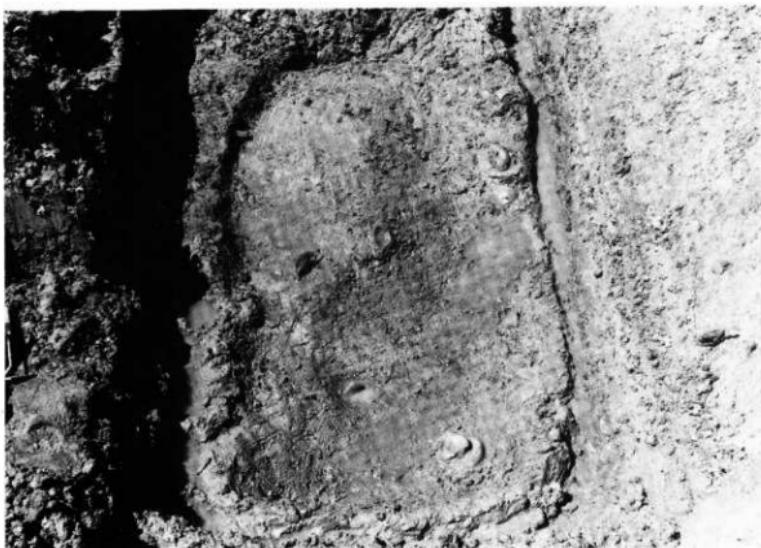
T 2・小溝



畦畔及び土層



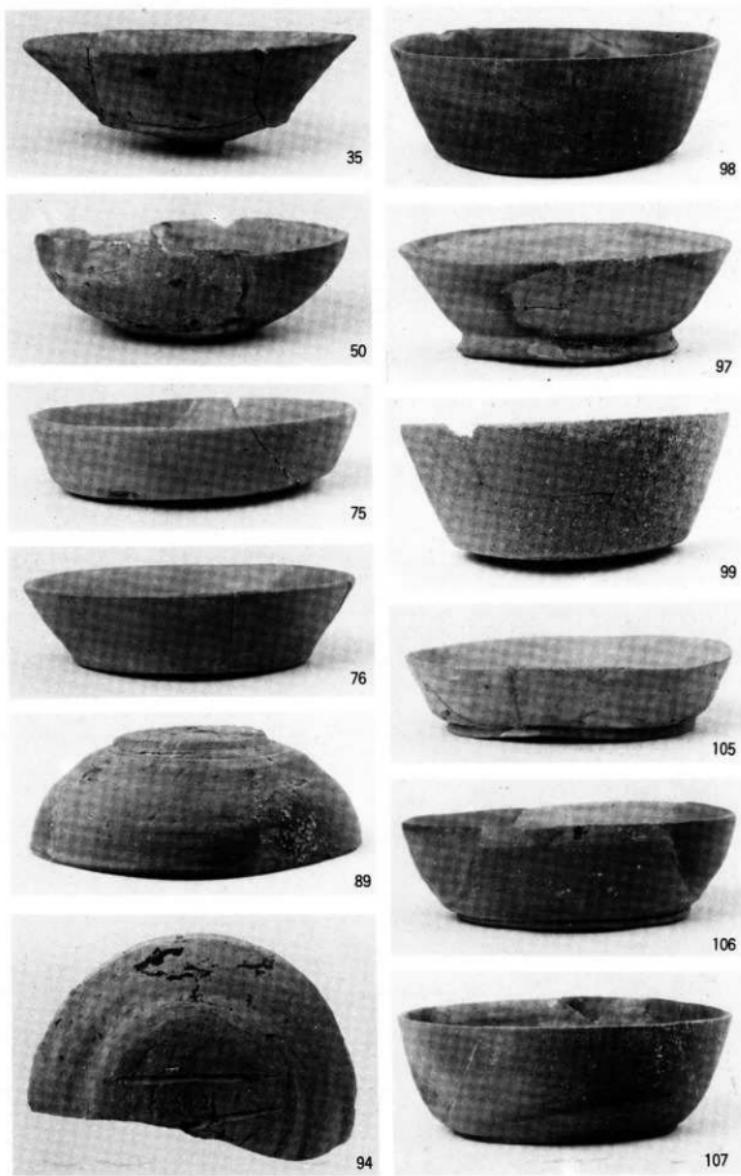
遺構検出状況・ピット



遺物出土狀況

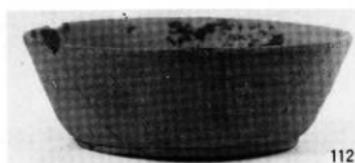


遺物出土狀況





108



112



115



118



120



122



121



124



129

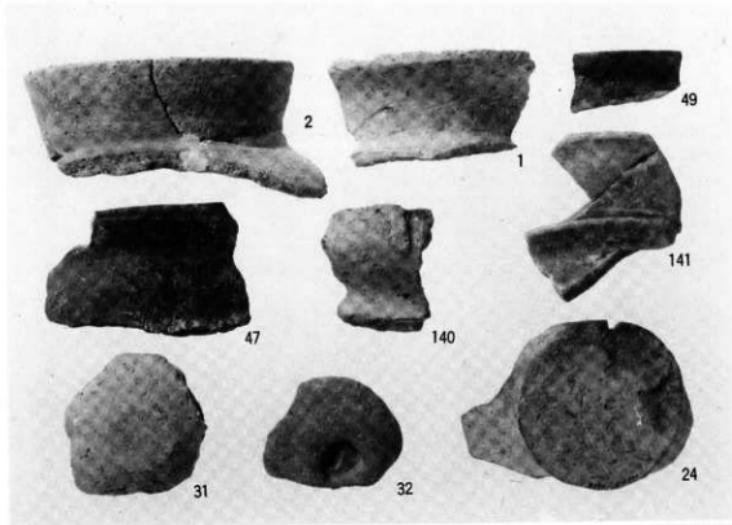
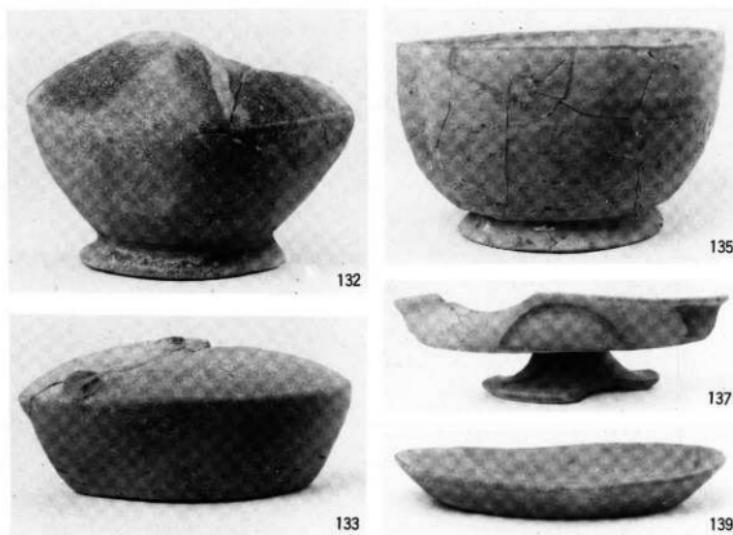


130

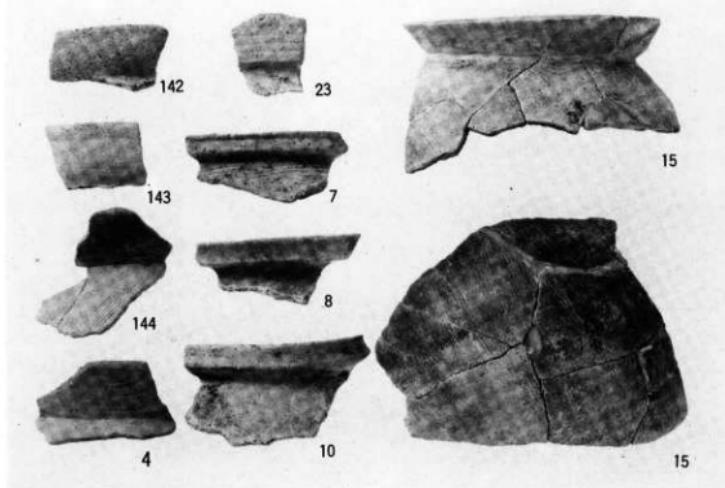


131

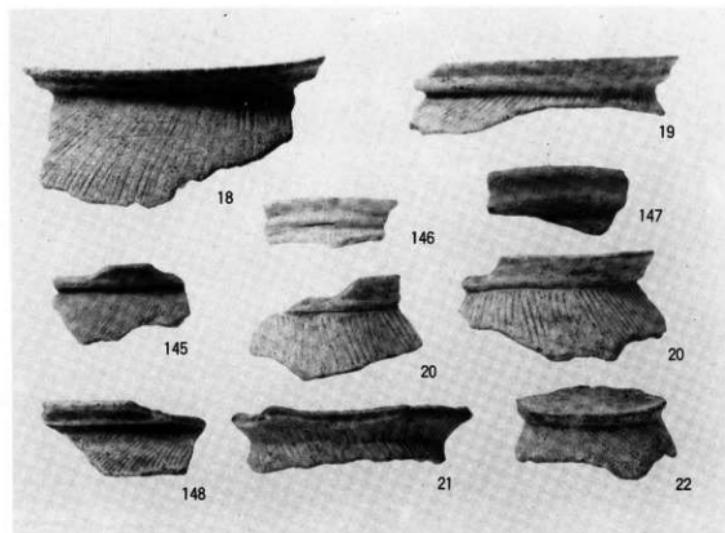
圖版七 世縫遺跡（遺物）



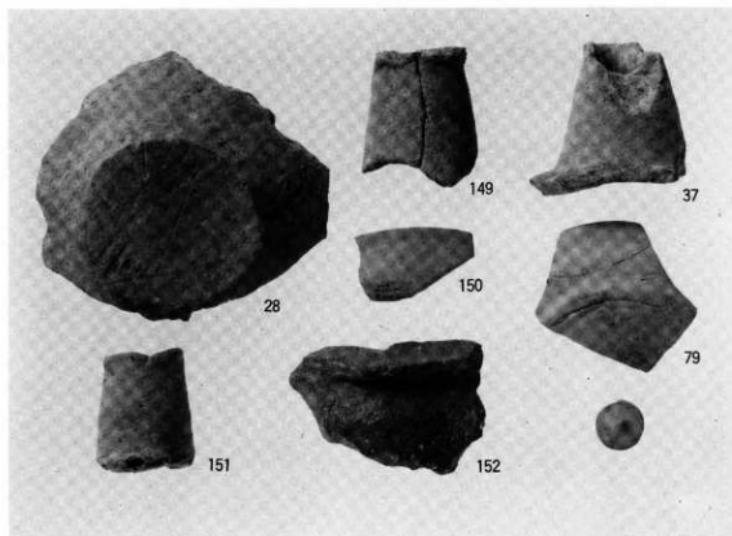
古式土師器



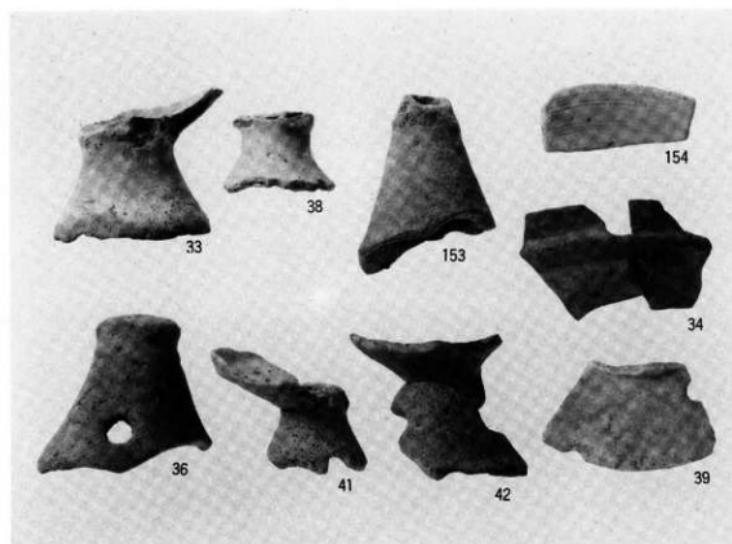
古式土師器



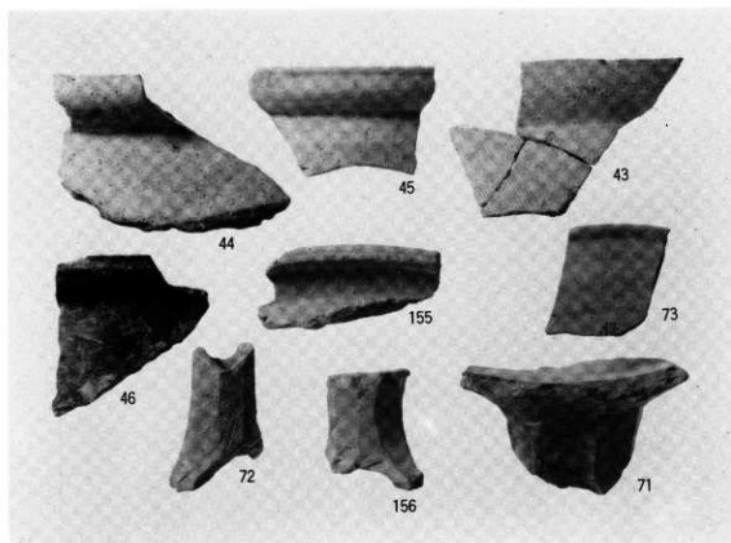
古式土師器



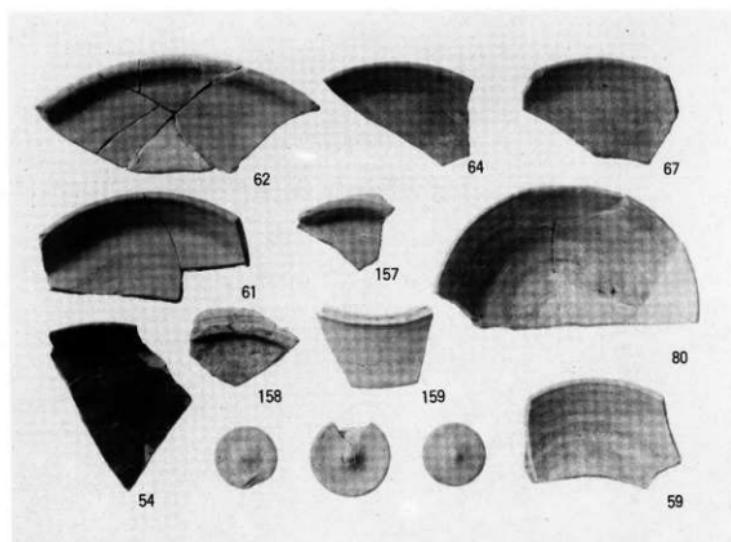
古式土師器・土師器



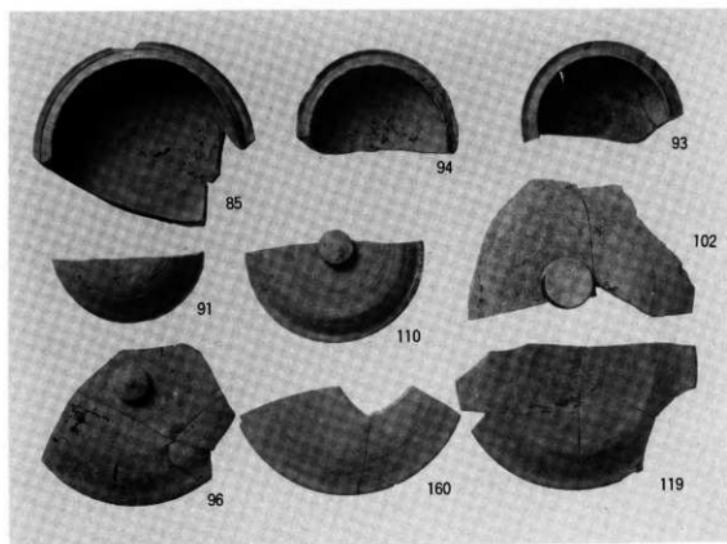
古式土師器



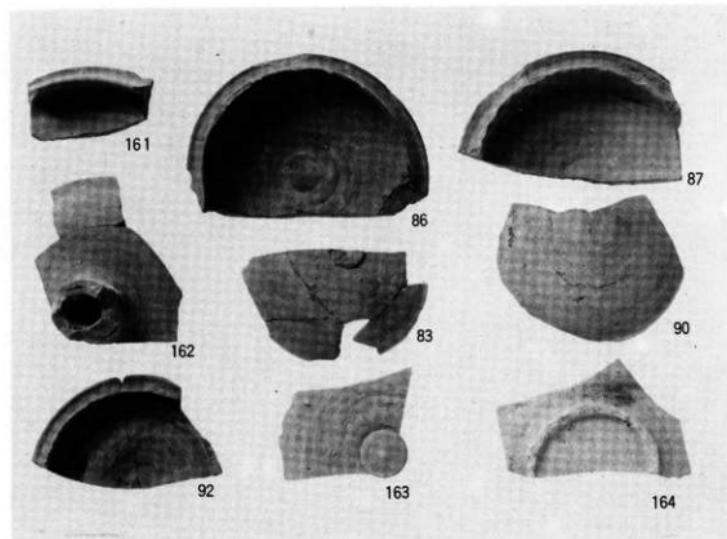
土師器



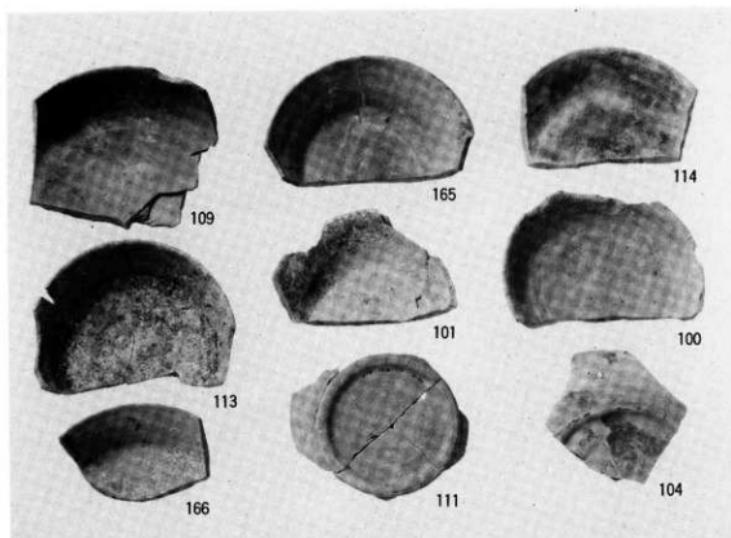
土師器



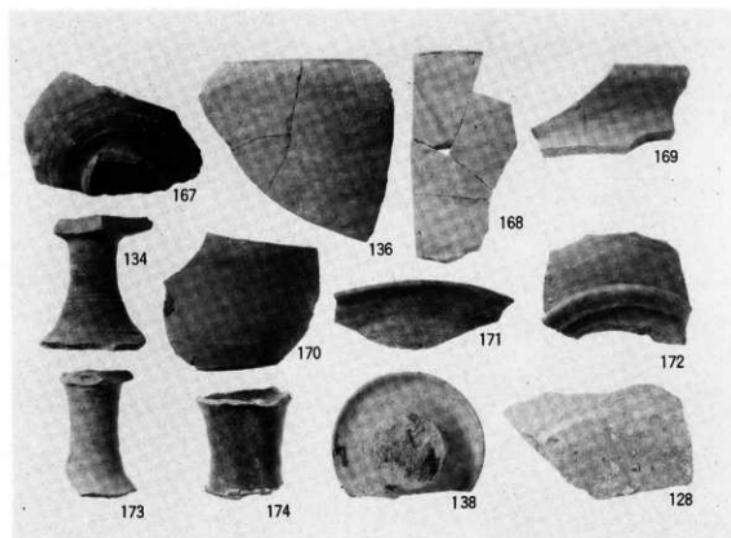
須惠器



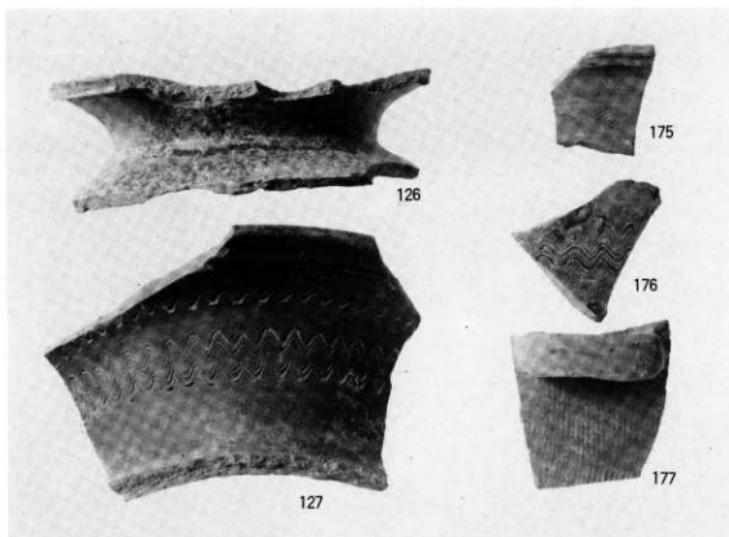
須惠器・灰釉陶器



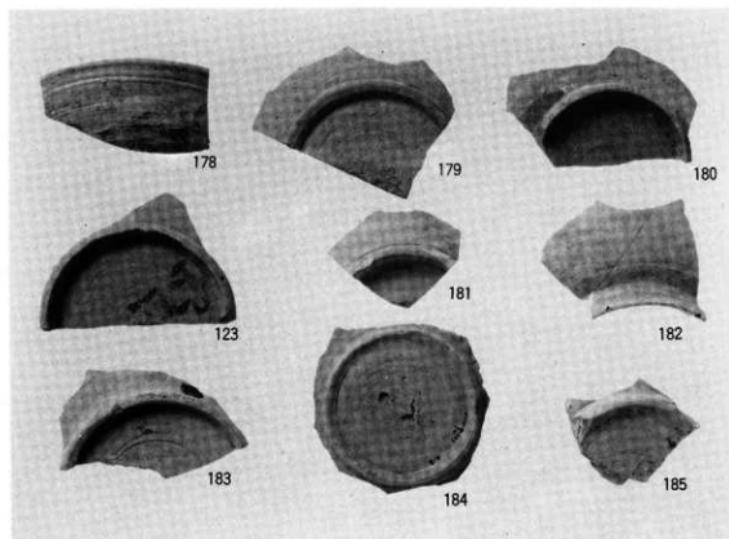
須恵器



須恵器

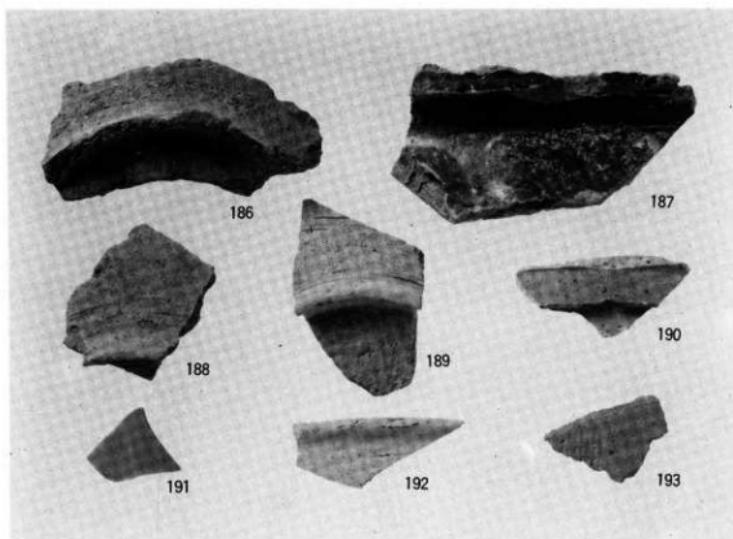


須惠器

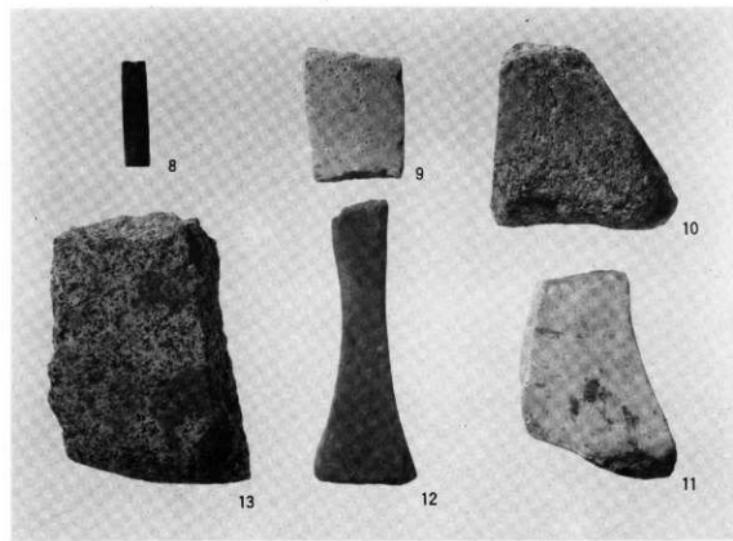


灰釉陶器

圖版一四
世継遺跡（遺物）

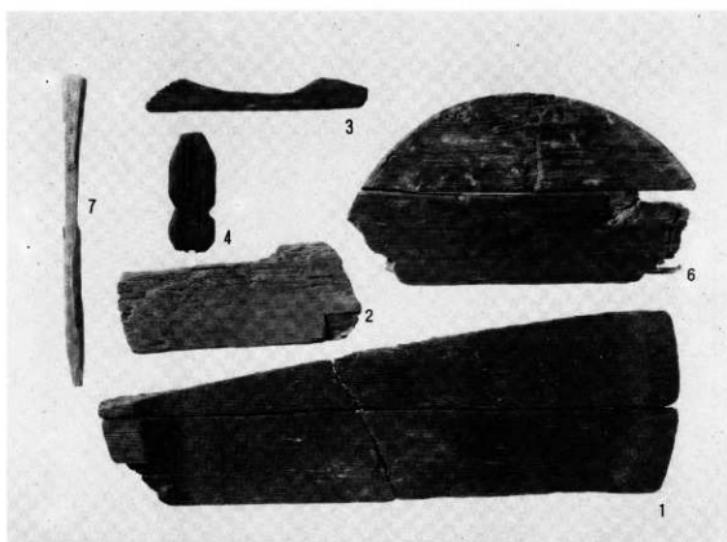


陶器・磁器

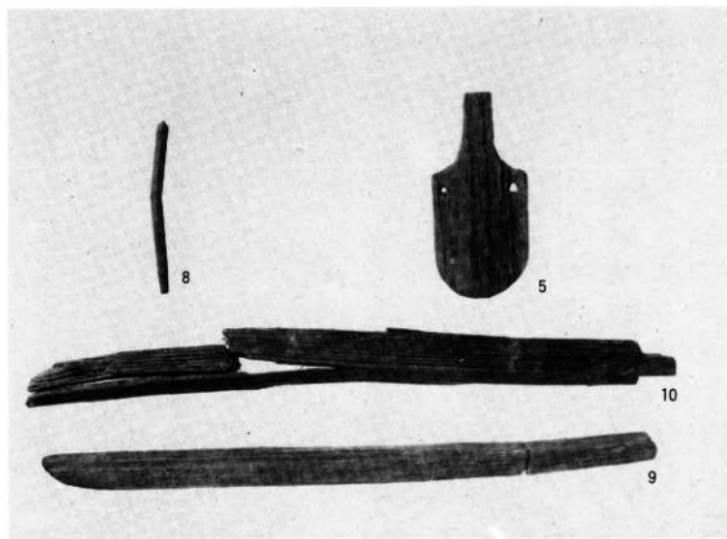


石製品

圖版一五 世継遺跡（遺物）

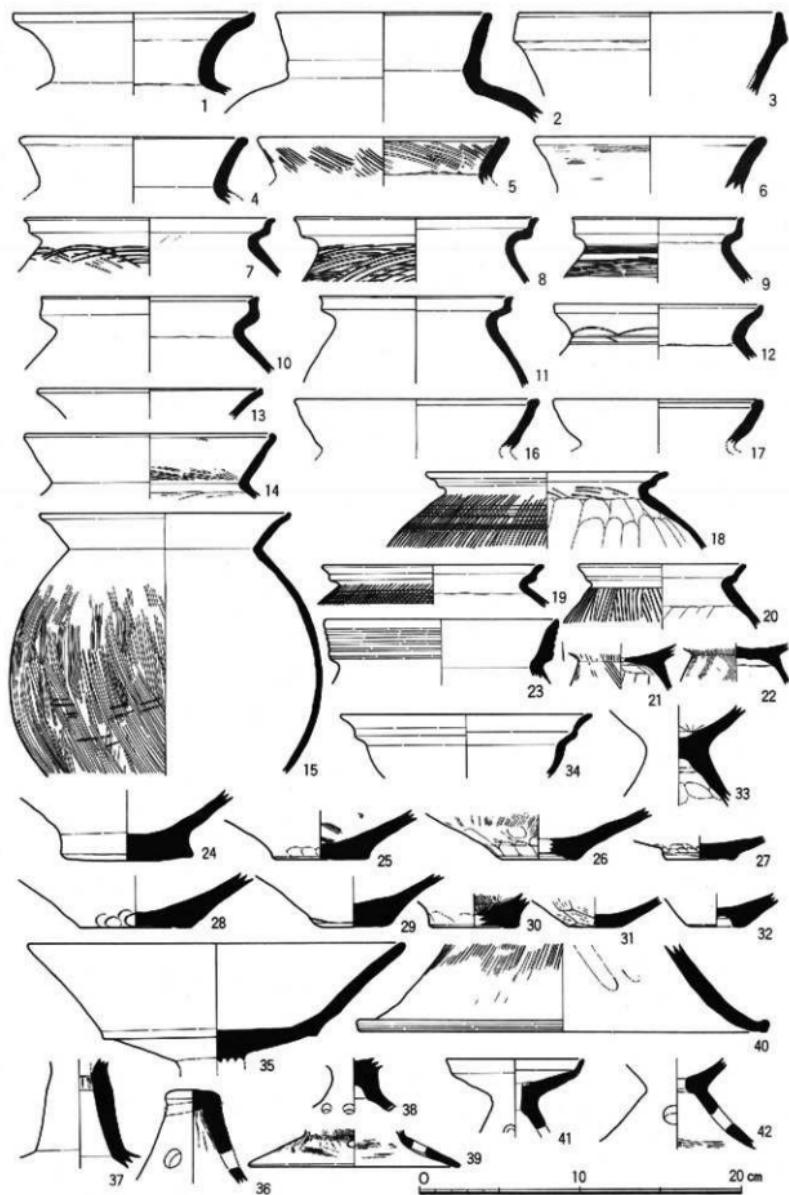


木製品

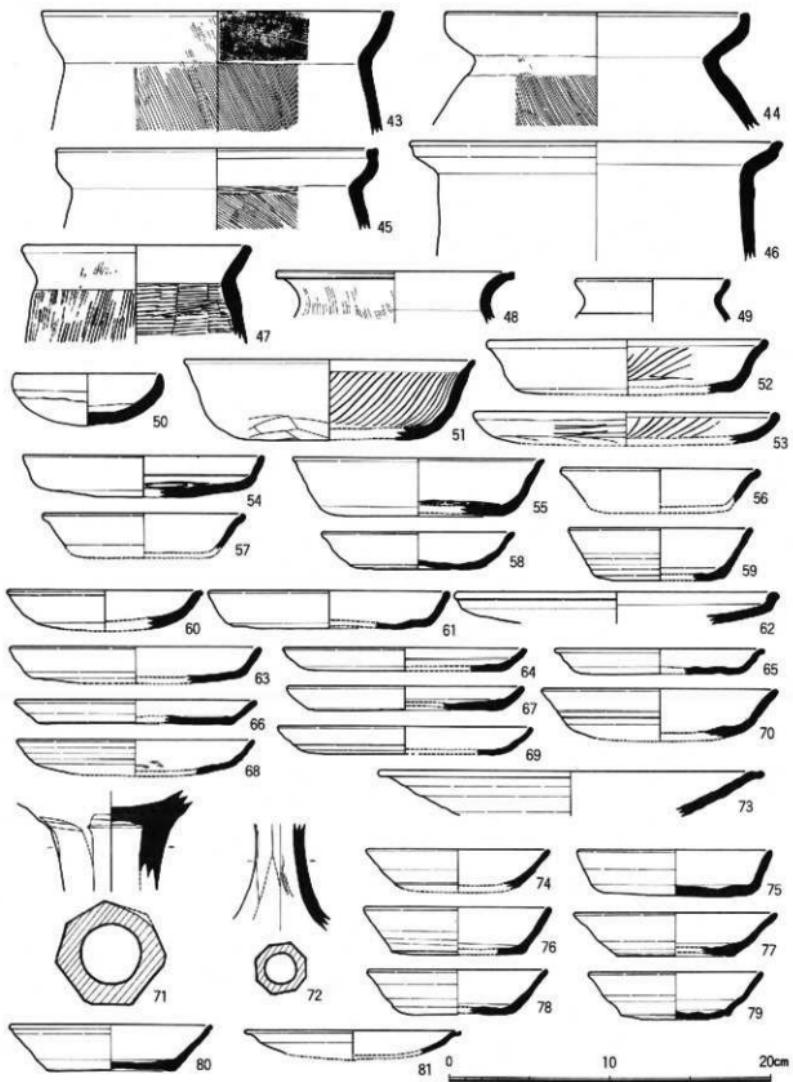


木製品

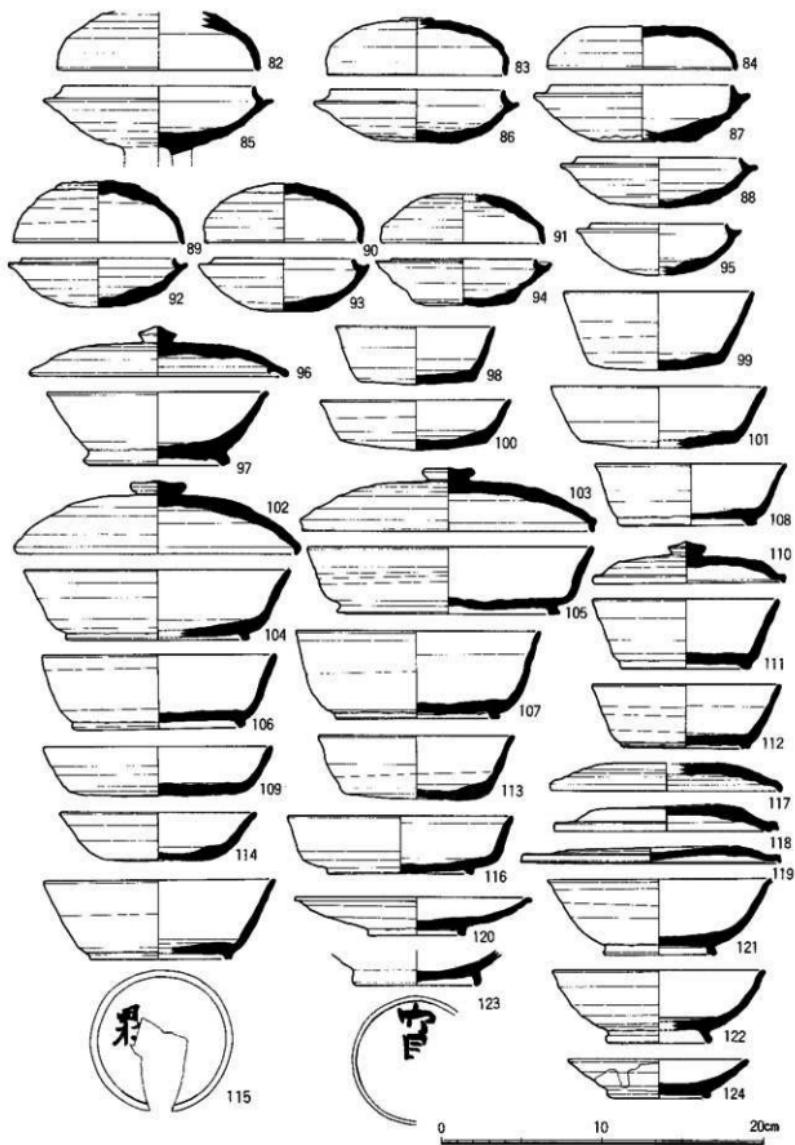
図版一六 世継遺跡（遺物実測図・古式土師器）



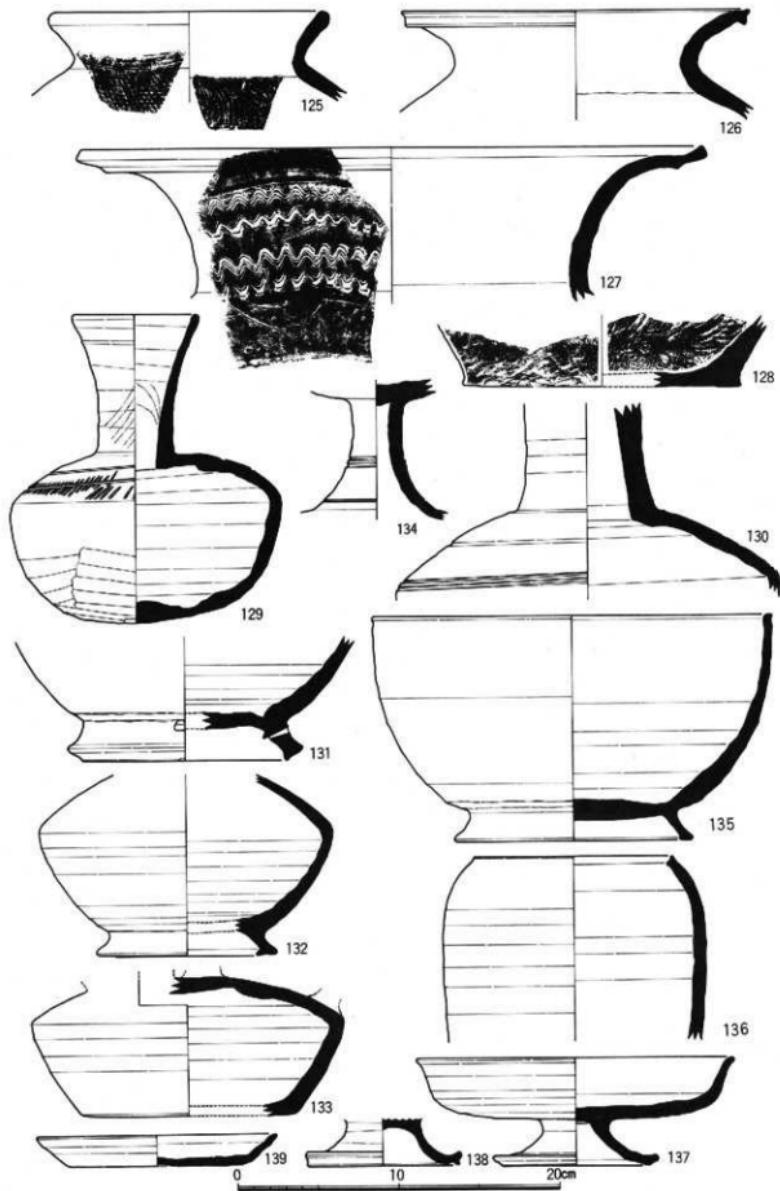
図版一七 世継遺跡（遺物実測図・土師器）

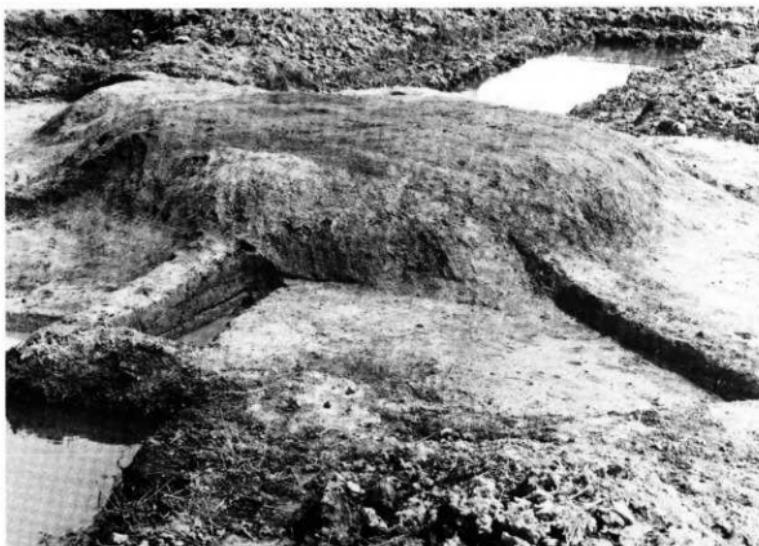


圖版一八 世継遺跡（遺物実測図・須恵器、灰釉陶器）

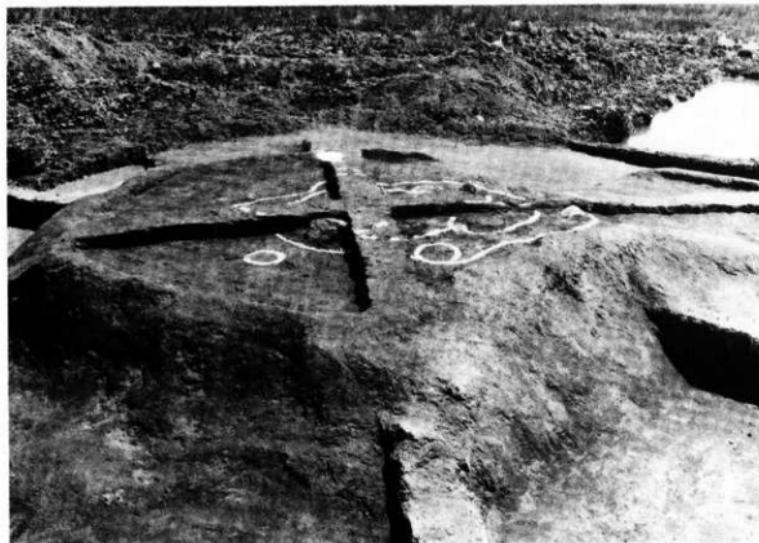


図版一九 世羅遺跡（遺物実測図・須恵器）





鏡塚全景（南東より）



墳頂部掘下げ状況（北東より）



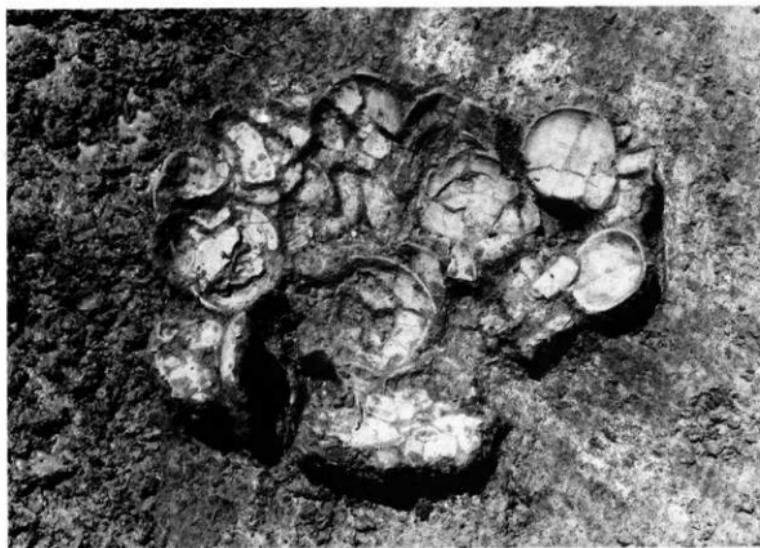
鏡塔墳頂部土壤掘下げ状況（南西より）



鏡塔断面図



基底部土師質皿出土状況



上段の拡大写真



第1トレンチ（北より）



第2トレンチ中央部（西より）



SE001遺物出土状況（南より）



SE001遺物取上げ後（南より）



SE001 遺物出土状況（西より）



SE001 遺物出土状況（拡大）



第6 トレンチ掘削前（東より）



第6 トレンチ西部（東より）



第6 トレンチ中央部（北より）



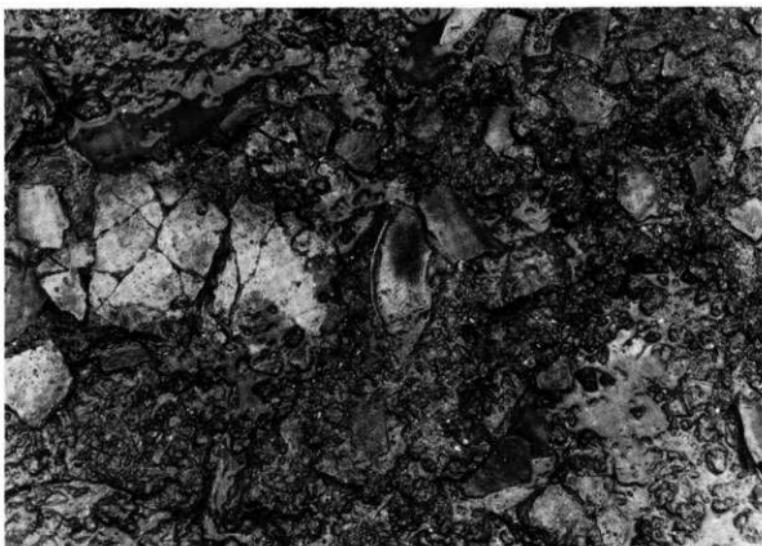
第6 トレンチ東部自然河川（西より）



第6 トレンチ東部自然河川（東より）



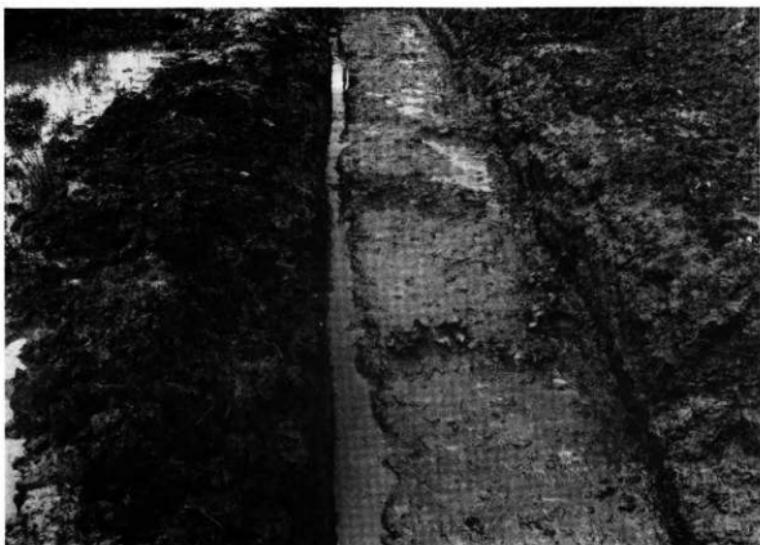
第6 トレンチ東端



第6 トレンチ自然河川土器出土状況



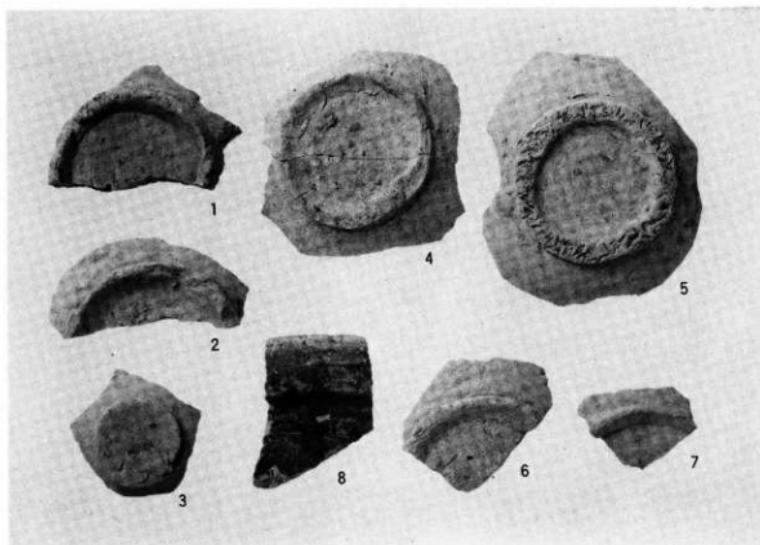
第7 トレンチ掘削前



第7トレンチ自然河川（西より）



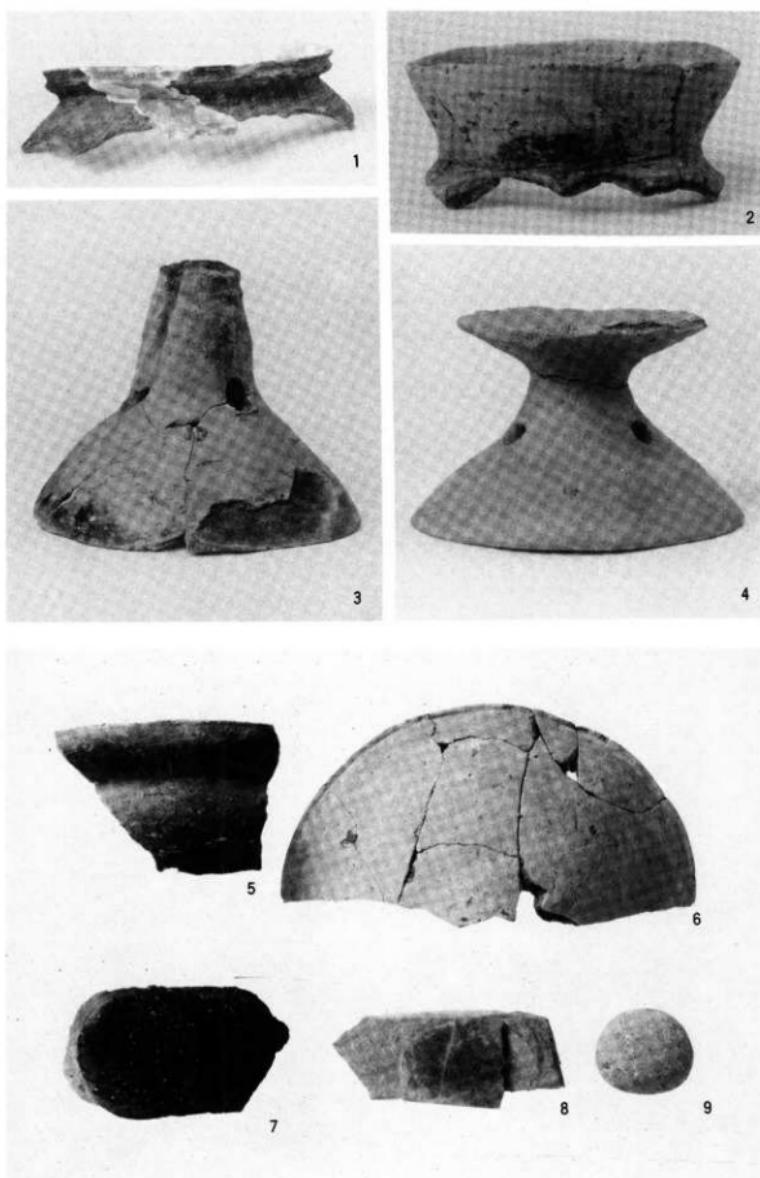
第7トレンチ東部（西より）



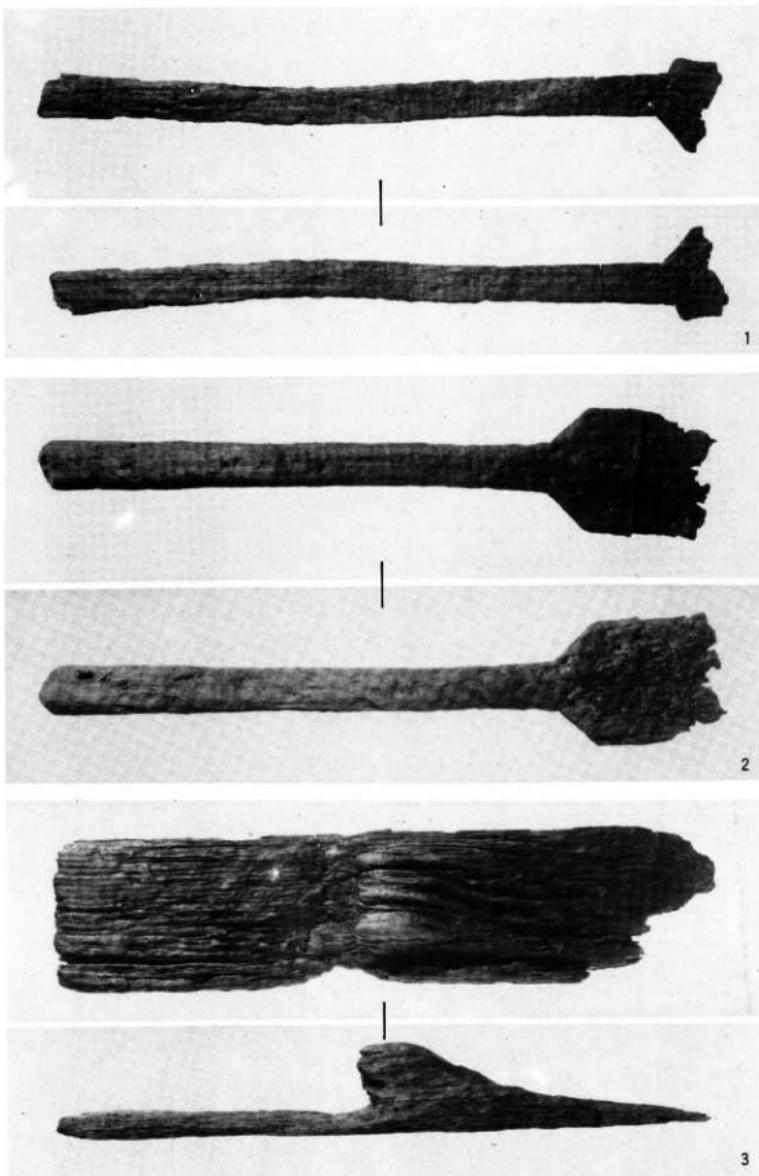
鏡塚封土出土土器



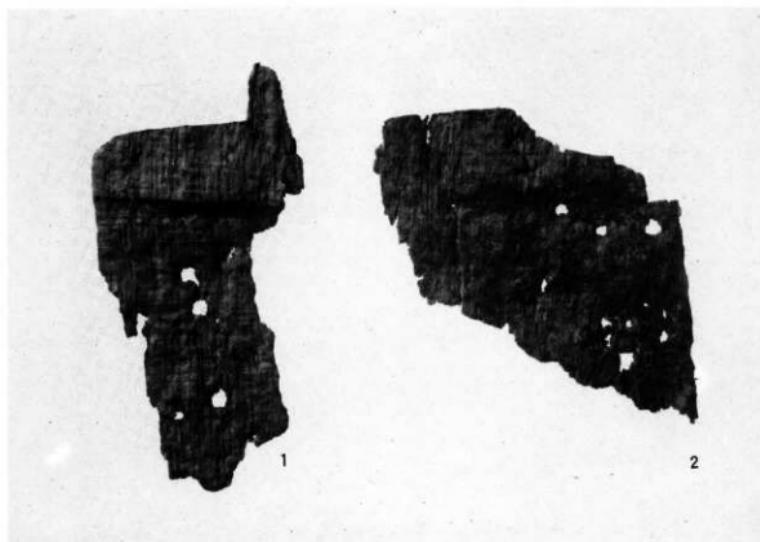
鏡塚基底部出土土師質皿



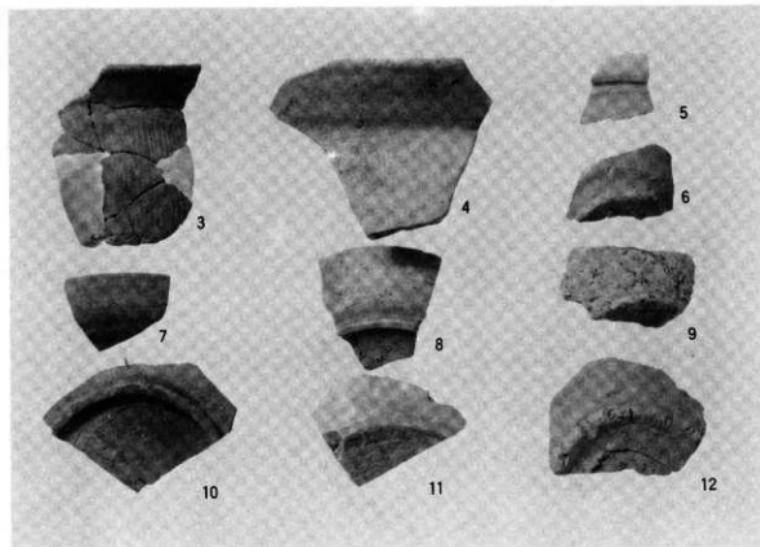
SE 001 出土遺物



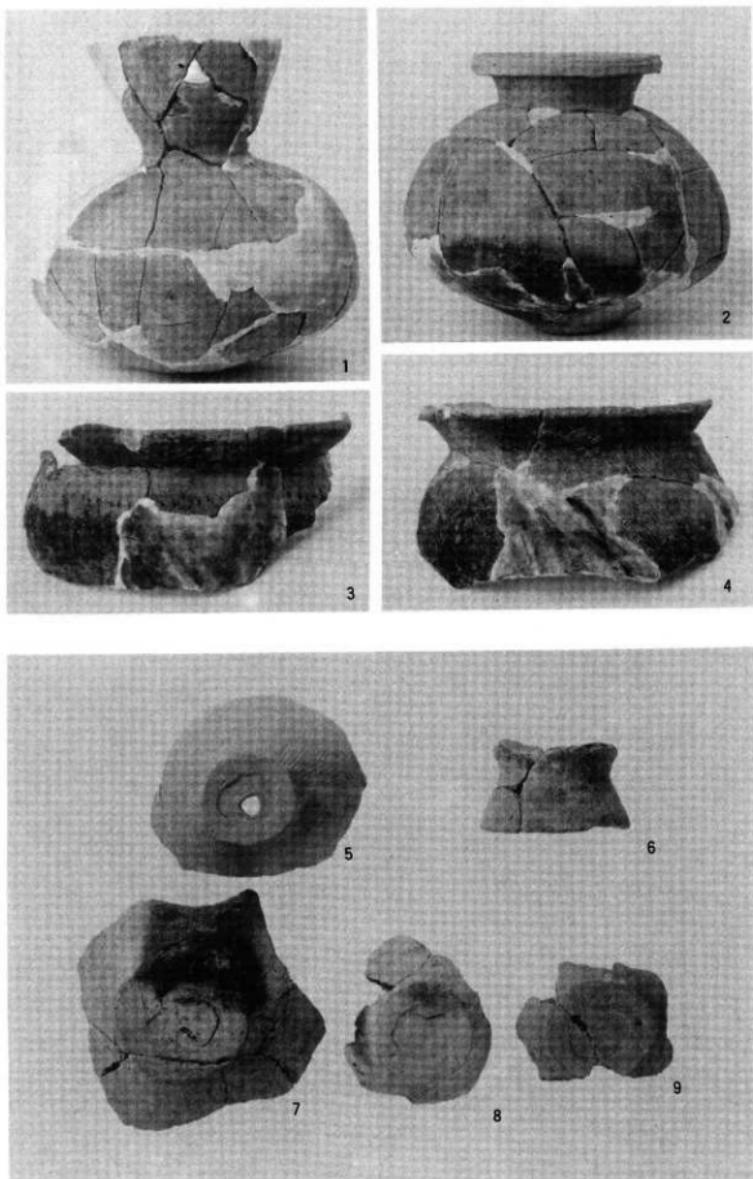
SE 001出土遺物（木器）



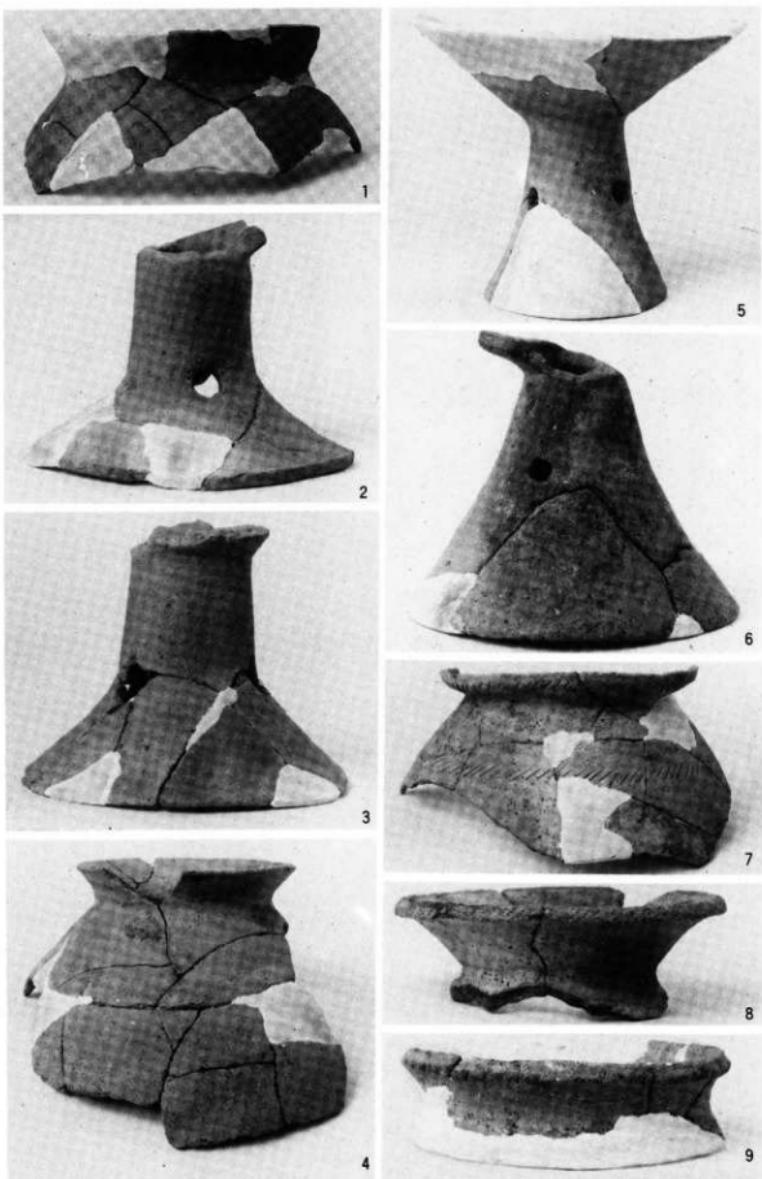
SE 001出土遺物（木器）



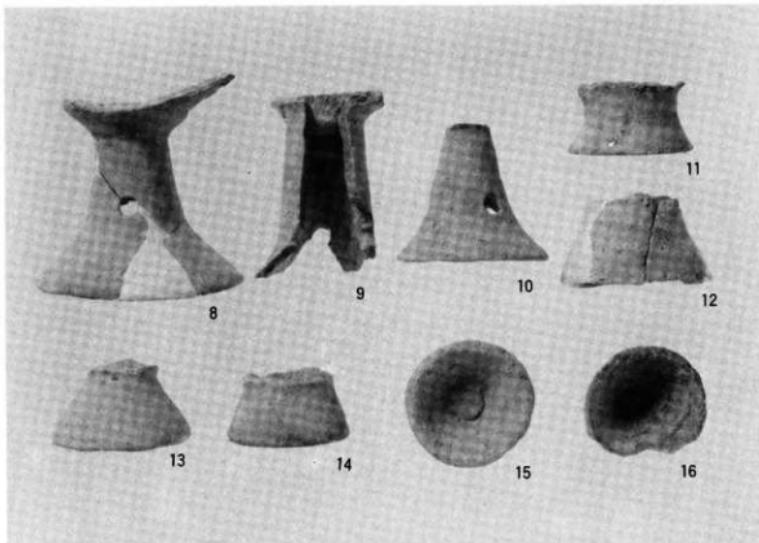
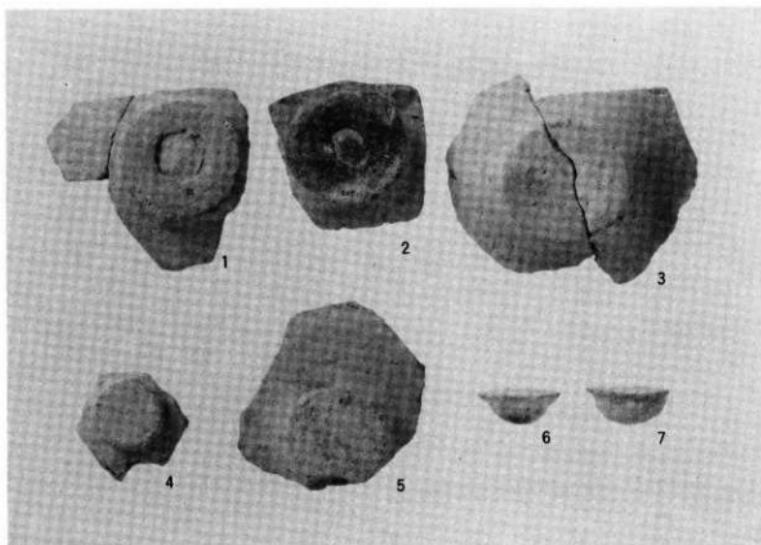
鏡塚、第6トレンチ出土遺物



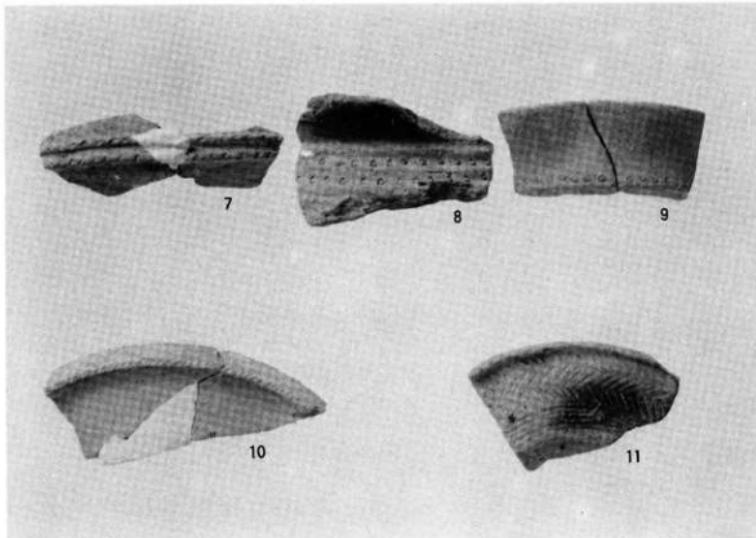
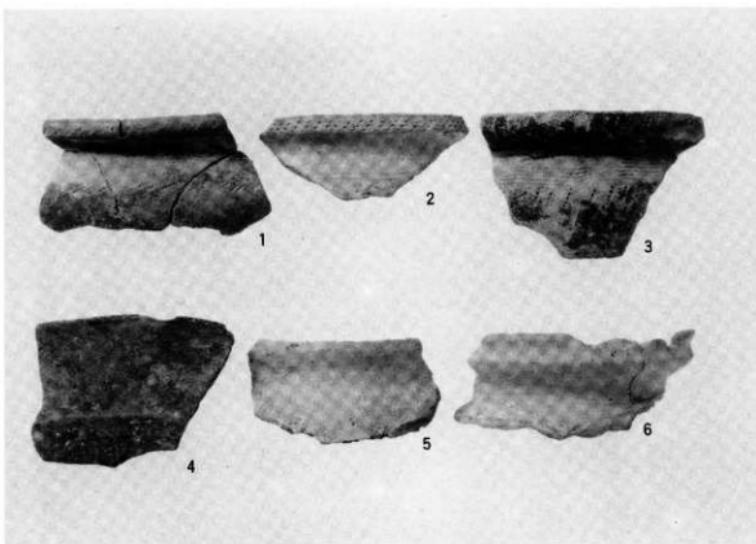
第6トレンチ SD001



第6トレンチSD001、第7トレンチSD002出土遺物

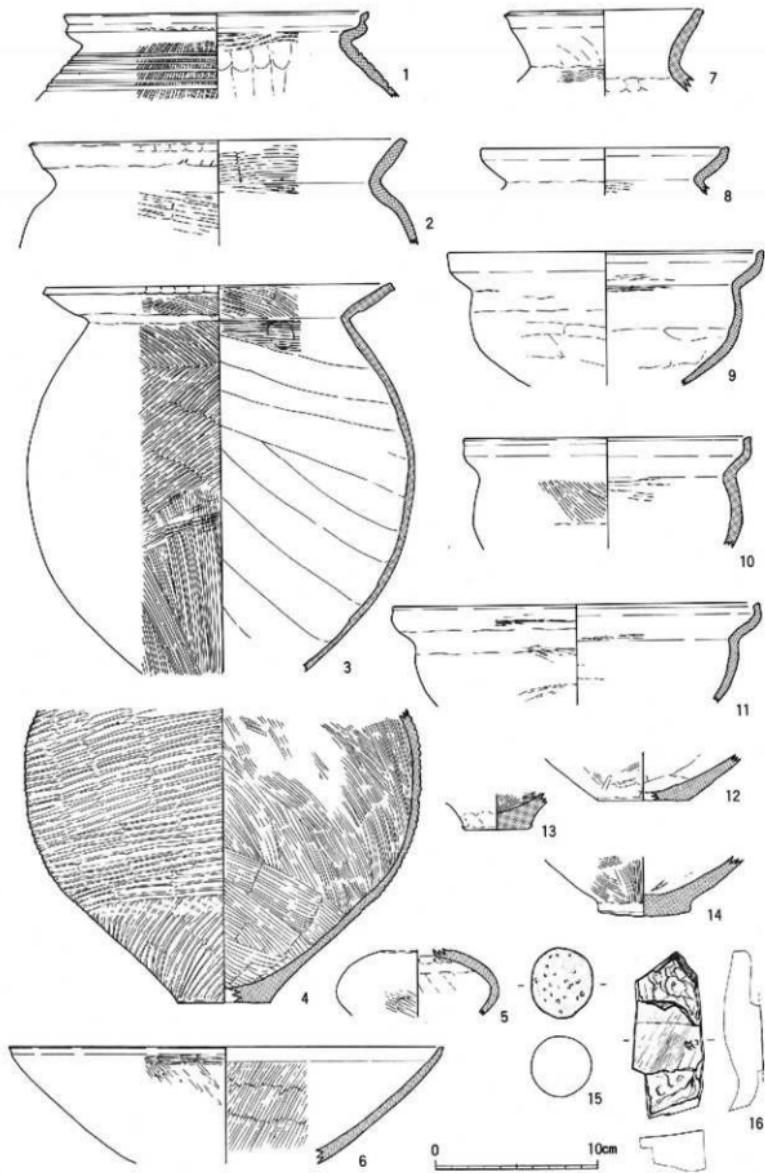


第7トレンチSD002出土遺物

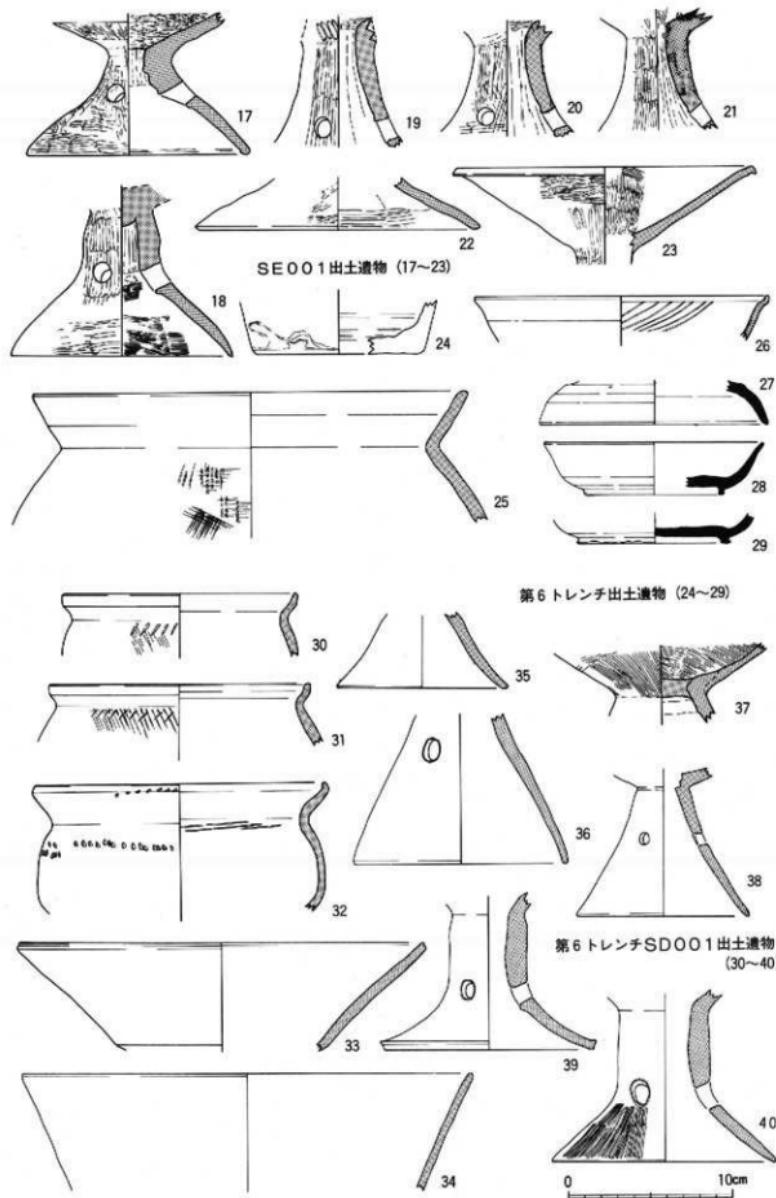


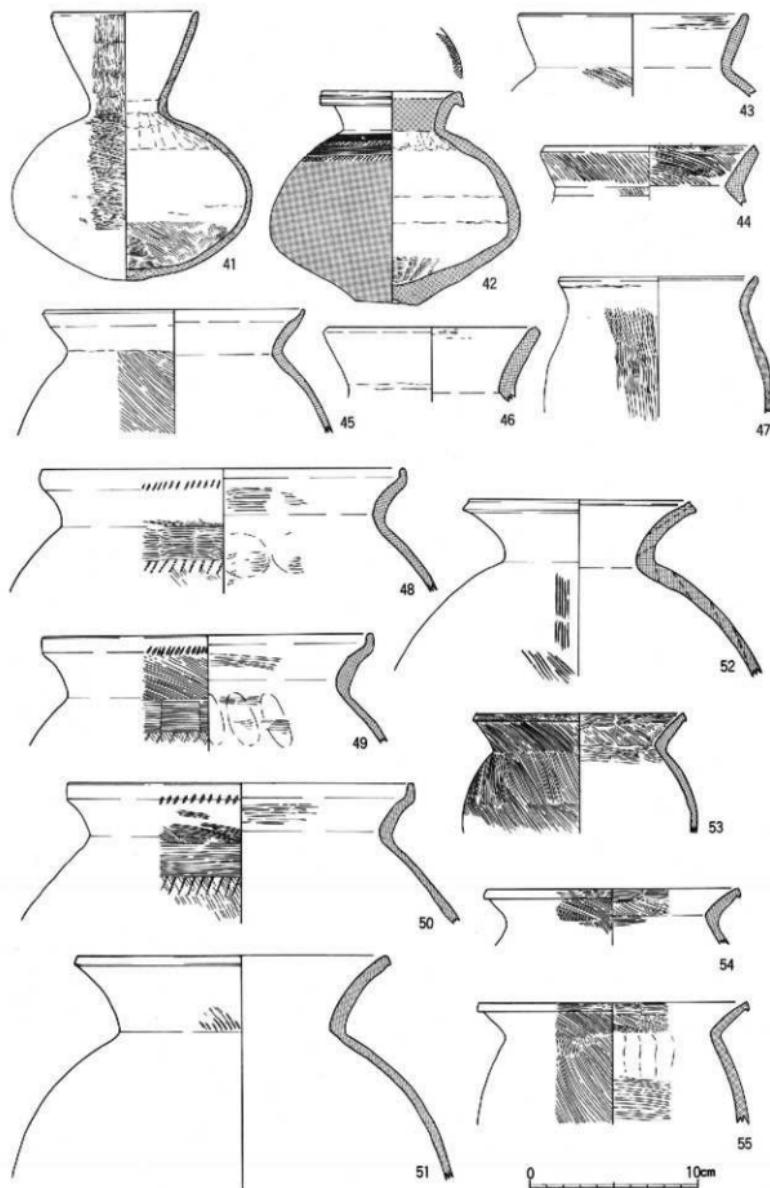
第7トレンチSD002出土遺物

図版三九 金剛寺遺跡

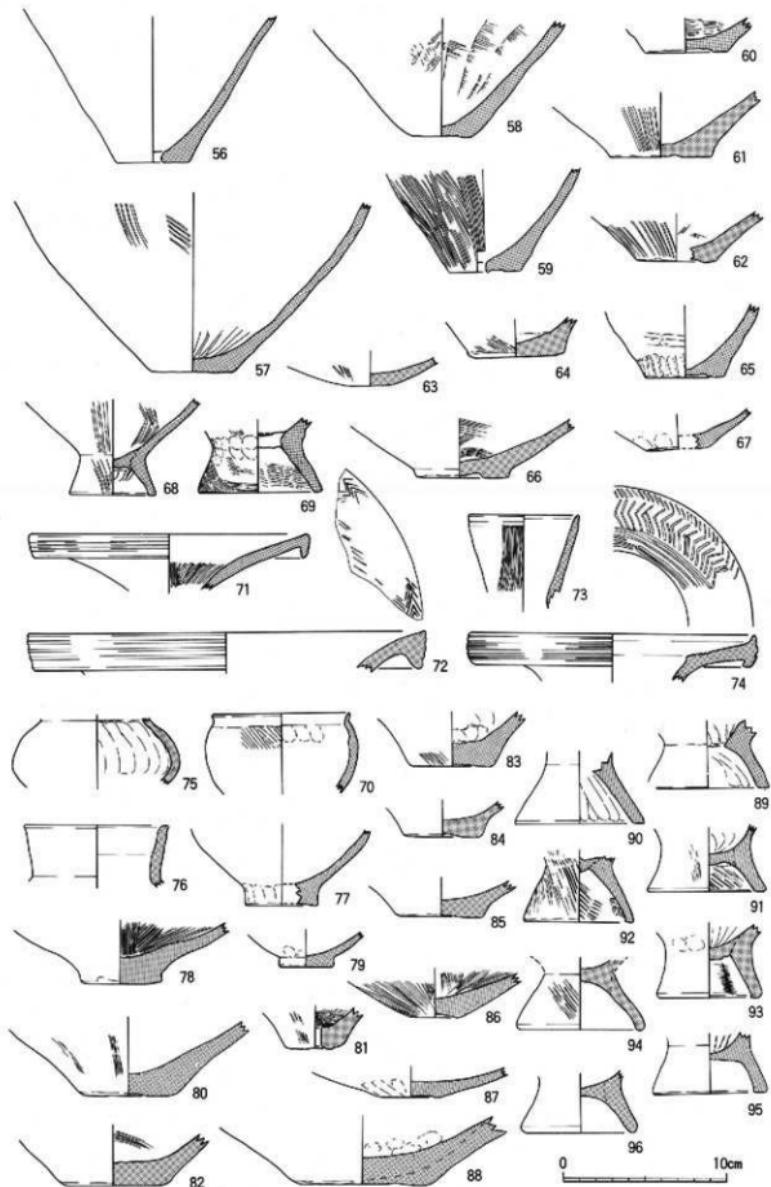


SE 001出土遺物

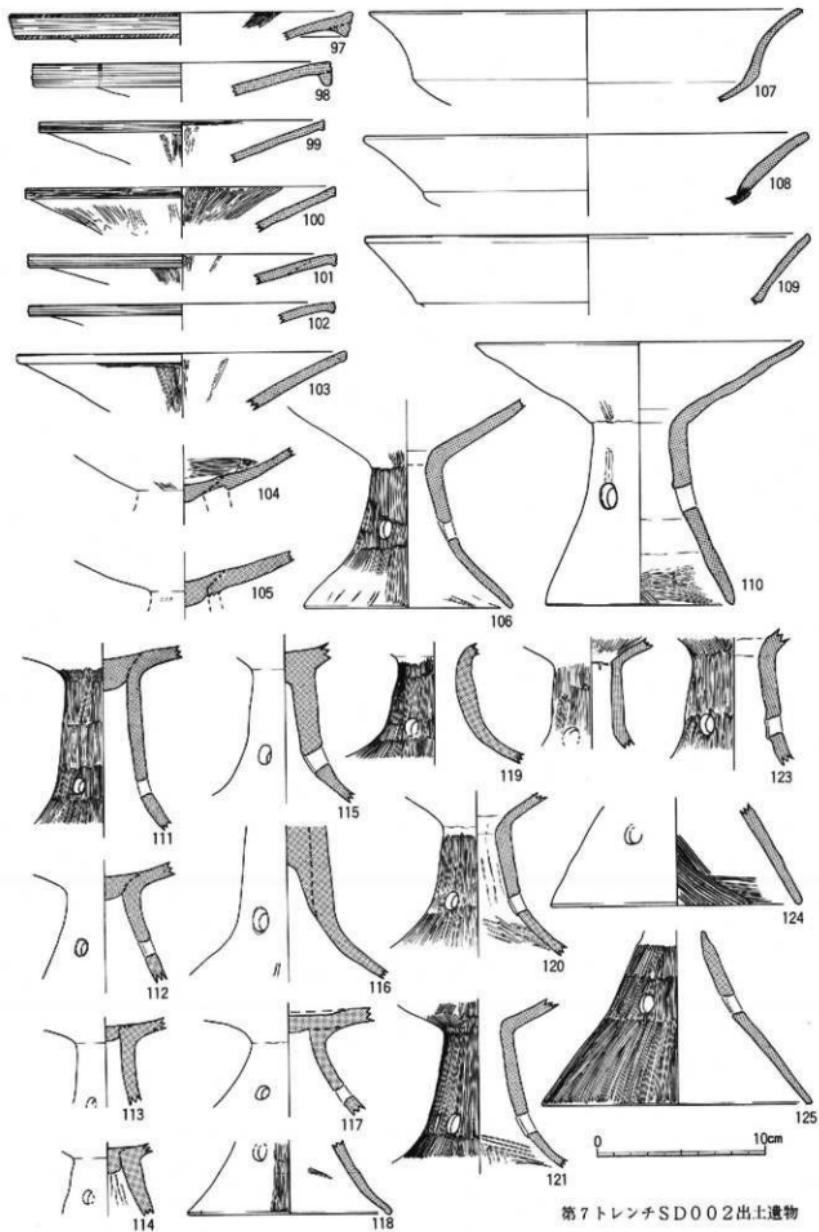




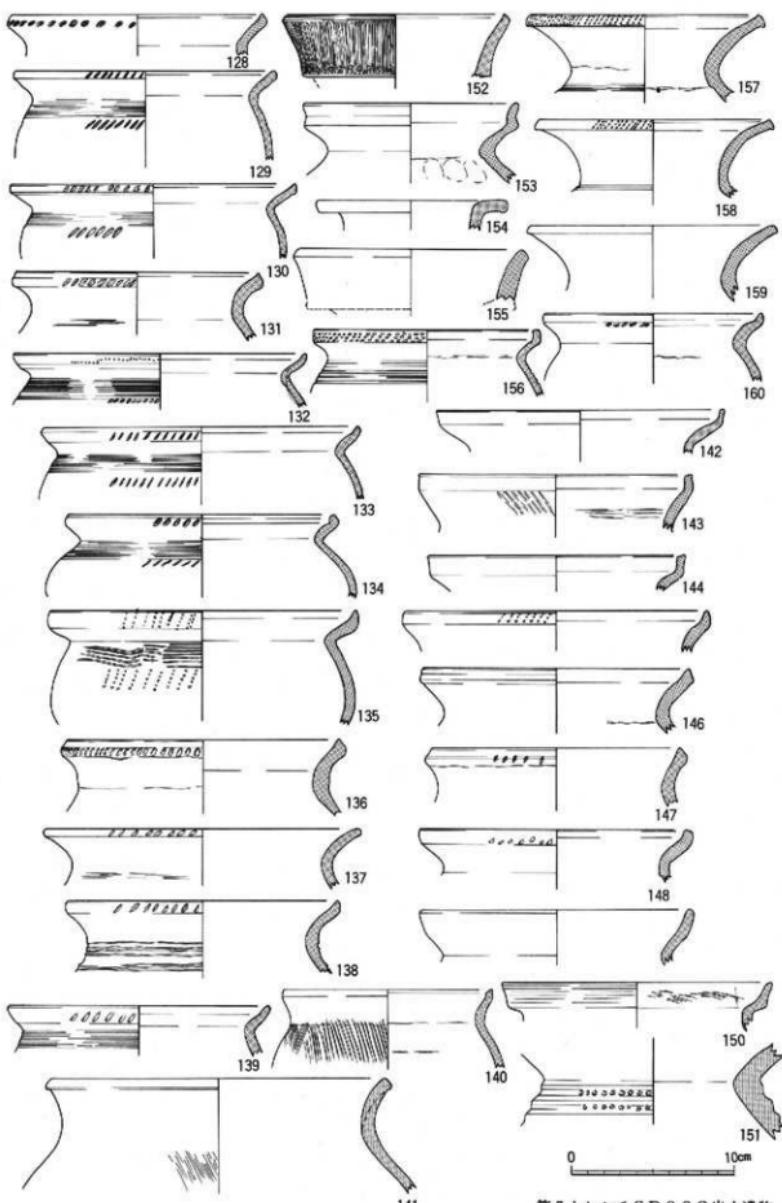
第6トレンチSD001出土遺物



第6 トレンチSD001、第7 トレンチSD002出土遺物

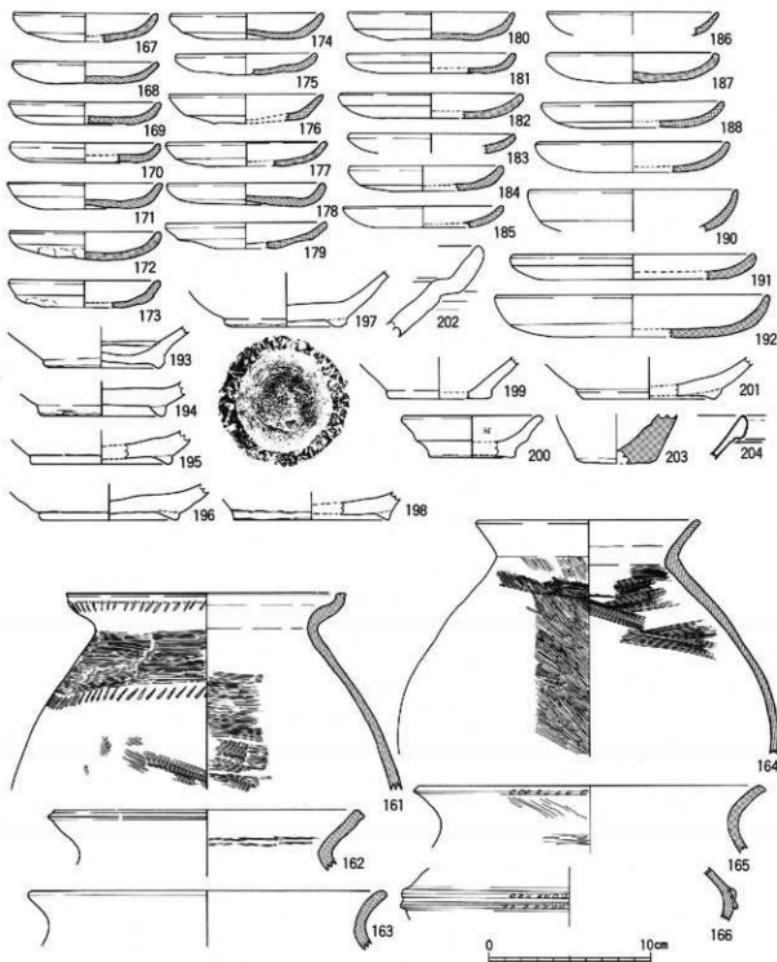


第7トレンチSD002出土遺物



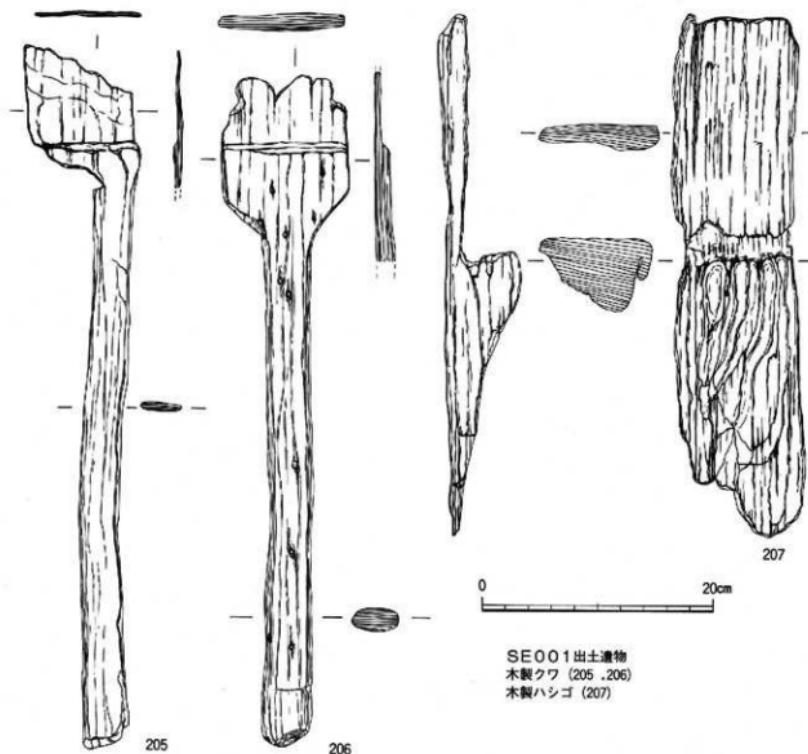
141

第7トレンチSD002出土遺物



第7トレンチSD002出土遺物 (161~166)

鏡壇出土遺物 (167~203) 檜木壇出土遺物 (203, 204)



昭和 62 年 3 月

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告 XIV-3

編集・発行 滋賀県教育委員会文化部文化財保護課
大津市京町四丁目 1-1
電話 0775-24-1121 内線 2536

財滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町 1732-2
電話 0775-48-9781

印 刷 所 富士出版印刷株式会社
大津市札の辻 4-20